

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第331集

## 休場遺跡発掘調査報告書

担い手育成基盤整備事業徳岡地区関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

やすみば

# 休場遺跡発掘調査報告書

扱い手育成基盤整備事業徳岡地区関連遺跡発掘調査

## 序

岩手県には、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、平成 10 年現在で 10,278 ヶ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発とともに社会資本の充実も重要な一施策であります。このように埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、圃場整備事業に関連して平成 10 年度に発掘調査を実施した休場遺跡の発掘調査結果をまとめたものであります。調査によって、岩手県南部においては調査例の少ない縄文時代早期から前期にかけての遺構・遺物が出土し、貴重な資料を提供することができました。この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助、ご協力を賜りました水沢地方振興局胆江土地改良事業所、胆沢町教育委員会をはじめとする多くの関係機関・関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成 12 年 1 月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 船 越 昭 治

## 例 言

1. 本報告書は、岩手県胆沢郡胆沢町小山字外浦 70 他に所在する休場遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 岩手県遺跡台帳の登録番号は N E 45-1144、遺跡略号は Y B-98 である。
3. 本遺跡の調査は畠場整備事業の実施に伴い記録保存を目的とした緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と水沢地方振興局胆江土地改良事業所との協議を経て、財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
4. 発掘調査期間、調査面積、担当者は、次の通りである。  
平成 10 年 9 月 1 日～11 月 6 日 3,200m<sup>2</sup> 中村直美・平めぐみ
5. 整理期間と担当者は次の通りである。  
平成 10 年 11 月 1 日～平成 11 年 3 月 31 日 中村直美・平めぐみ
6. 今回の調査で検出された遺構の種類および遺構数は次のとおりである。

堅穴住居跡	7 棟	土坑	14 基	陥し穴	11 基
陥し穴状遺構	2 基	焼上遺構	3 基	溝	1 条
柱穴状小ピット	10 基				
7. 出土遺物一部の接合・復元・鑑定・空中写真撮影は次の機関及び方々に依頼した。  
土器の接合・復元……株式会社京都科学  
石器の材質 …………花崗岩研究会（代表 矢内桂二）  
火山灰の分析・鑑定……パリノ・サーヴェイ株式会社  
空中写真撮影 ………東邦航空株式会社 株式会社ハイマーテック
8. 調査区内の基準点測量・基準杭の設置は有限会社東北ブランディングに委託した。
9. 土層の観察は「新版標準土色粘」（小山・竹原：1989）によった。
10. 野外調査では胆沢町教育委員会・小山地区をはじめとする地元作業員の方々の協力をいただいた。
11. 本報告書の作成にあたり、下記の方々に御指導を頂いた。（順不同・敬称略）  
村木 淳、藤田俊雄、宇部則保（八戸市教育委員会）、神原雄一郎（盛岡市教育委員会）
12. 本書の執筆は、I 章を高橋與右衛門、II～IV 章を平めぐみ、V 章を中村直美・平めぐみが分担し、文末に氏名を記した。
13. 本遺跡で出土した遺物及び調査資料は、岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

## 目次

### 本文目次

序

例言

日次

I 調査に至る経緯	1	2 遺構外出土遺物	61
II 遺跡の立地と環境	2	(1) 土器	61
1 遺跡の立地と地形	2	(2) 石器	61
2 基本層序	2	V まとめと考察	67
3 周辺の遺跡	3	1 遺構	67
III 調査方法と整理方法	9	(1) 壺穴住居跡	67
1 調査方法	9	(2) 土坑	72
2 整理方法	9	(3) 陥し穴	72
IV 検出された遺構と遺物	11	(4) 焼土遺構	73
1 遺構と遺構内出土遺物	11	2 遺物	73
(1) 壺穴住居跡	11	(1) 土器	73
(2) 土坑	40	(2) 上製品	74
(3) 陥し穴	48	(3) 石器	75
(4) 陥し穴状遺構	56	VI 分析・鑑定	77
(5) 焼土遺構	57	(1) 休場遺跡の炭化材の年代測定	77
(6) 柱穴状小ピット	58	(2) 休場遺跡の火山灰分析鑑定	77
(7) 溝跡	58	報告書抄録	116

### 表 目 次

第1表 周辺の遺跡	8	第3表 壺穴住居における器種組成	75
第2表 岩手県内における表裏縄文期の住居観察表	69		

### 図版目次

第1図 基本層序	2	第10図 1号壺穴住居跡出土遺物⑤	20
第2図 岩手県図	4	第11図 2号壺穴住居跡①・②	21
第3図 遺跡の周辺図	5	第12図 2号壺穴住居跡柱穴断面図・出土遺物①	22
第4図 粗沢原状地を中心とした段丘区分	6	第13図 2号壺穴住居跡出土遺物②	23
第5図 周辺の遺跡分布図	7	第14図 3号壺穴住居跡①・②	24
第6図 1号壺穴住居跡・出土遺物①	16	第15図 3号壺穴住居跡出土遺物①	25
第7図 1号壺穴住居跡遺物出土状況・出土遺物②	17	第16図 3号壺穴住居跡出土遺物②	26
第8図 1号壺穴住居跡出土遺物③	18	第17図 3号壺穴住居跡出土遺物③	27
第9図 1号壺穴住居跡出土遺物④	19	第18図 3号壺穴住居跡出土遺物④	28

第 19 図 3 号竪穴住居跡出土遺物⑤	29	第 35 図 8~11 号陥し穴	54
第 20 図 4 号竪穴住居跡	30	第 36 図 1~3 号陥し穴出土遺物	55
第 21 図 5 号竪穴住居跡	31・32	第 37 図 1・2 号陥し穴状遺構	56
第 22 図 4・5 号竪穴住居跡出土遺物①	33	第 38 図 1~3 号焼土遺構	57
第 23 図 5 号竪穴住居跡出土遺物②	34	第 39 図 柱穴状小ピット	58
第 24 図 5 号竪穴住居跡出土遺物③	35	第 40 図 遺構配置図	59・60
第 25 図 5 号竪穴住居跡出土遺物④	36	第 41 図 遺構外出土遺物①	62
第 26 図 5 号竪穴住居跡出土遺物⑤	37	第 42 図 遺構外出土遺物②	63
第 27 図 6 号竪穴住居跡・出土遺物	38	第 43 図 遺構外出土遺物③	64
第 28 図 7 号竪穴住居跡・出土遺物	39	第 44 図 遺構外出土遺物④	65
第 29 図 1~6 号土坑	44	第 45 図 遺構外出土遺物⑤	66
第 30 図 7~14 号土坑	45	第 46 図 岩手県における表裏繩文期の住居跡①	70
第 31 図 1・3・5 号土坑出土遺物	46	第 47 図 岩手県における表裏繩文期の住居跡②	71
第 32 図 7・11・13・14 号土坑出土遺物	47	第 48 図 陥し穴配列図	72
第 33 図 1~3 号陥し穴	52	第 49 図 県内近県における早期~前期の土偶土製品	
第 34 図 4~7 号陥し穴	53	第 50 図 遺構外石器出土点数	75

### 写真図版目次

カラー写真図版 1 調査区遠景	83	写真図版 15 1~3 号焼土遺構・作業風景	100
カラー写真図版 2 3 号竪穴住居跡・尖底土器出土状況	84	写真図版 16 1 号溝	101
カラー写真図版 3 3 号竪穴住居跡出土上器	85	写真図版 17 遺構内出土遺物①	102
写真図版 1 調査区遠景・基本土層	86	写真図版 18 遺構内出土遺物②	103
写真図版 2 1 号竪穴住居跡	87	写真図版 19 遺構内出土遺物③	104
写真図版 3 2 号竪穴住居跡	88	写真図版 20 遺構内出土遺物④	105
写真図版 4 3 号竪穴住居跡	89	写真図版 21 遺構内出土遺物⑤	106
写真図版 5 4 号竪穴住居跡	90	写真図版 22 遺構内出土遺物⑥	107
写真図版 6 5 号竪穴住居跡	91	写真図版 23 遺構内出土遺物⑦	108
写真図版 7 6 号竪穴住居跡	92	写真図版 24 遺構内出土遺物⑧	109
写真図版 8 7 号竪穴住居跡	93	写真図版 25 遺構内出土遺物⑨	110
写真図版 9 1~5 号土坑	94	写真図版 26 遺構内出土遺物⑩	111
写真図版 10 6~9 号土坑	95	写真図版 27 遺構内出土遺物⑪	112
写真図版 11 10~14 号土坑	96	写真図版 28 遺構外出土遺物①	113
写真図版 12 1~3 号陥し穴		写真図版 29 遺構外出土遺物②	114
写真図版 13 4~8 号陥し穴	98	写真図版 30 遺構外出土遺物③	115
写真図版 14 9~11 号陥し穴、 1~2 号陥し穴状遺構			
	99		

## I 調査に至る経過

休場遺跡は、「担い手育成基盤整備事業徳岡地区」の施行に伴って、その事業区域に位置することから発掘調査することとなったものである。

「担い手育成基盤整備事業徳岡地区」は、胆沢郡胆沢町小山地内の受益面積 219.9ha の地区で、水田は昭和 38 年ごろ 10a 区画に整備されたが、区画形状が小さく農道の幅員も狭い状況であった。

又小用水路は、土水路で漏水し用水不足を補うために、小排水路は用排兼用で浅く、排水不良となって渉田化しているなど、営農の機械化、耕地の汎用化、さらには農地の流動化、生活環境の向上など、高生産性農業を阻害していた。

これらの障害要因を除去し、効率的で安定的な経営体に農地を集積し、高生産性農業の確立を図り、併せて農村環境水準の向上を資するために、大区画は場整備を実施するものとして、平成 7 年度新規採択された地区で、平成 9 年で 3 度目である。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、水沢地方振興局胆江土地改良事業所から平成 7 年 6 月 5 日付け胆土地第 179 号「県営は場整備事業実施に伴う遺跡分布調査について（依頼）」の文章によって岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼をしたのが最初である。依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成 7 年 7 月 17～18 日に分布調査を実施したが、その結果は平成 7 年 8 月 25 日付け教文第 478 号「県営は場整備事業実施に伴う文化財の分布調査について（回答）」で水沢地方振興局胆江土地改良事業所へ回答、その際工事施工範囲内が休場遺跡の範囲内であることが付記された。

回答を受けた水沢地方振興局胆江土地改良事業所では、休場遺跡を含む面工事実施年度である平成 9 年 10 月 28 日付け胆土地第 337 号「担い手育成基盤整備事業徳岡地区に係る埋蔵文化財の発掘調査について（依頼）」の文章によって岩手県教育委員会に対して、試掘調査を依頼した。依頼を受けた岩手県教育委員会では平成 9 年 11 月 12～14 日に試掘調査を実施したが、その結果は平成 9 年 11 月 25 日付け教文第 704 号「担い手育成基盤整備事業徳岡地区に係る埋蔵文化財の発掘調査について（回答）」で水沢地方振興局胆江土地改良事業所へ回答し、その際休場遺跡の発掘調査が必要である旨が付記された。

## II 遺跡の立地と環境

### 1 遺跡の立地と地形

休場遺跡は岩手県胆沢郡胆沢町小山字外浦 70 他に所在し、JR 東北本線前沢駅より北西に約 5km に位置する。胆沢町は奥羽山脈の中央部東側の山間部にあり、北は金ヶ崎町、東は水沢市、南は前沢町・衣川村、西が秋田県東成瀬村に接している。北西には焼石岳 (1547m) が望まれ、西から南西にかけては笹森山 (1085m)、桑原岳 (1126m)、大鶴山 (1165m) などが南北に連なり、これらの山々の狭間に縫うように胆沢川が流れている。この川は胆沢扁状地南側を通り水沢市胆沢城跡の北東で北上川に注ぐ。また、石淵ダム下流約 2km で胆沢川から分流した岩堰川は胆沢扁状地を南西方向に流れ JR 東北本線前沢駅の西側で北上川に注ぐ。現在岩堰川は前沢町に入っているので、胆沢町内では寿安上堰の名称が使用されている。

胆沢扁状地は胆沢川の侵食と堆積によって今から約 80~50 万年前につくられたとされる。この扁状地は胆沢川から衣川間に広がる北上川流域では最大のもので扇頂から扇端に傾斜と共に、南部から北部にも傾斜し、階段状に多くの段丘面が段丘崖をはさんで配列している。これら段丘群は、南から高位（人首坂段丘）・中位（胆沢段丘）・低位（水沢段丘）に大別される。各段丘の中で、最も広範囲を占めるのは胆沢段丘である。胆沢段丘は高位から順に上野原・横道・堀切・福原の各段丘に細分され、人首坂段丘の残丘と思われる見分森・養ヶ森が存在する他は、段丘面群の交叉はほとんど見られない。福原段丘では黒沢尻火山灰があり、その下に村崎野浮石がみられる。また、上野原・横道・堀切の各段丘には、黒沢尻火山灰と、その下位に前沢火山灰がある。

休場遺跡は胆沢扁状地の南部、岩堰川の河岸段丘上に立地している。回りは緩やかな傾斜が見られるがほぼ平坦な地形が続き、北側に岩堰川、南側に一の沢・二の沢・三の沢などを源流とする白鳥川に挟まれ、水源にも恵まれている。昭和 38 年まで水田の開墾が進み、それに伴い胆沢川より水路を増設し、その時の壞跡は調査区内にも見られる。現状は水田のほか畠地や宅地となっている。遺跡の標高は約 120m、岩堰川との比高は約 11m 高く、白鳥川との比高は約 29m 低くなっている。

### 2 基本層序

調査区の大部分は地山のⅢ層まで削除され、遺構の上面が一部掘削されているものもある。調査区内では基本的に図 1 のような土層が観察される。以下、表土から順に層序を示す。

I 層 黄褐色土 (10YR5/6) と暗褐色土 (10YR3/4) の混合土。

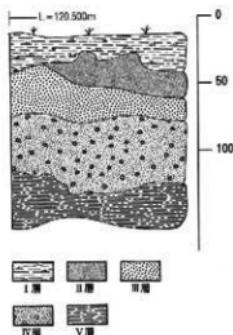
層厚 10~30cm。草木根・ビニールなどの農業廃棄物を多く含む。現在の表土および畠地の耕作土。掘削の跡が激しく部分的に地山がブロック状に入れる箇所も見られる。

II 層 暗褐色土 (10YR3/3)

層厚 0~20cm。Ⅲ層に続く漸移層である。I 層と同様に掘削が激しく一部地山がブロック状に混入する。またこの II 層は部分的にみられない所もある。

III 層 極褐色土 (10YR4/6)

層厚 20~35cm。しまり・粘性あり。地山、遺構検出面。



第 1 図 基本層序

#### IV層 褐色土（10YR4/4）

層厚 45~55cm。直徑 1cm 程の黒色ブロック（マンガン）含む。しまりあり。

#### V層 明黄褐色土（10YR6/8）

層厚 20cm 以上。直徑 3~5cm の黒色ブロック（マンガン）含む。非常に固い。涌水著しい。

### 3 周辺の遺跡

岩手県教育委員会事務局文化課の遺跡登録台帳によれば、胆沢町の遺跡は 170 カ所確認されている。

第 5 図には胆沢扇状地の南部を中心として 82 カ所（No1~82）の遺跡を掲載した。遺跡の分布状況をみると胆沢扇状地中央部にかけては角塚古墳を中心に古代・近世の遺跡が密集している。該期の遺跡は古くから水田の開けたと伝えられる胆沢扇状地低部や、それに接する段丘座北縦に多いようである。扇状地南端部には縄文時代の遺跡の分布が多く見られる。ここでは旧石器・縄文時代を中心に遺跡を概観する。

旧石器時代の遺跡として若柳の上萩森遺跡があげられる。ここではナイフ形石器や彫刻刀形石器等が出土している。

縄文時代早期前半の遺跡として、胆沢町西部、宮原段丘北縦の 19 山の神・20 十文字遺跡などが挙げられる。また、尼坂台地北縦には 18 芦の隨・25 浅野・26 小十文字・28 尼坂・29 片子沢・30 穂谷田遺跡が分布している。十文字・芦の隨遺跡からは楓ノ木 2 式相当の土器片、尼坂遺跡からは貝殻条痕文・縄文条痕文土器が出土している。

縄文時代前期初めとしては、25 浅野遺跡から胎土に多量の纖維を含み燃りのきつい縄文をもつ土器小破片が出土している。その他前期の遺跡として、白鳥川水系の 66 西風・78 二の沢遺跡から人木 1 式相当の土器片が出土し、44 小田切遺跡は人木 4~5 式相当の土器片が出土している。その他にも 29 片子沢・30 穂谷田・34 浅野前遺跡などが挙げられる。

縄文時代中期に入ると若柳の宮沢原 A・B・C・D・E・E 束遺跡が挙げられる。大木 7b~10 式崩にわたっての集落であり、宮沢原 B 遺跡では複雑な構造を備えた複式戸をもつ住居跡が見られる。この他には、大木 8a 式期の有孔土器が出土した 40 北赤堀遺跡、小山地区の 56 油地・47 人畠・49 船戸・50 念仏塚遺跡等が挙げられる。

縄文時代後期になると分布は少なくなる。若柳地区西部の大清水上・赤剥遺跡などが上げられ、赤剥遺跡からは掘之内 II~安行 I 式併行の土器が出土している。

縄文晩期の遺跡としては 37 潟川・38 合野（大洞 C : 式）、若柳の大清水上（大洞 C I ~ A）、萩袋（大洞 A）から晩期の土器片が出土している。

弥生時代の遺跡としては石包丁が出土した 6 清水下遺跡や 19 山の神・44 小田切遺跡等が挙げられる。

その他、古代の土師器や須恵器が出土した遺跡として 54 遺跡、中・近世は 13 遺跡が登録されている。

胆沢町教育委員会では、上萩森遺跡・角塚古墳等を初めとする 18 遺跡の一部を発掘調査している。

#### <引用・参考文献>

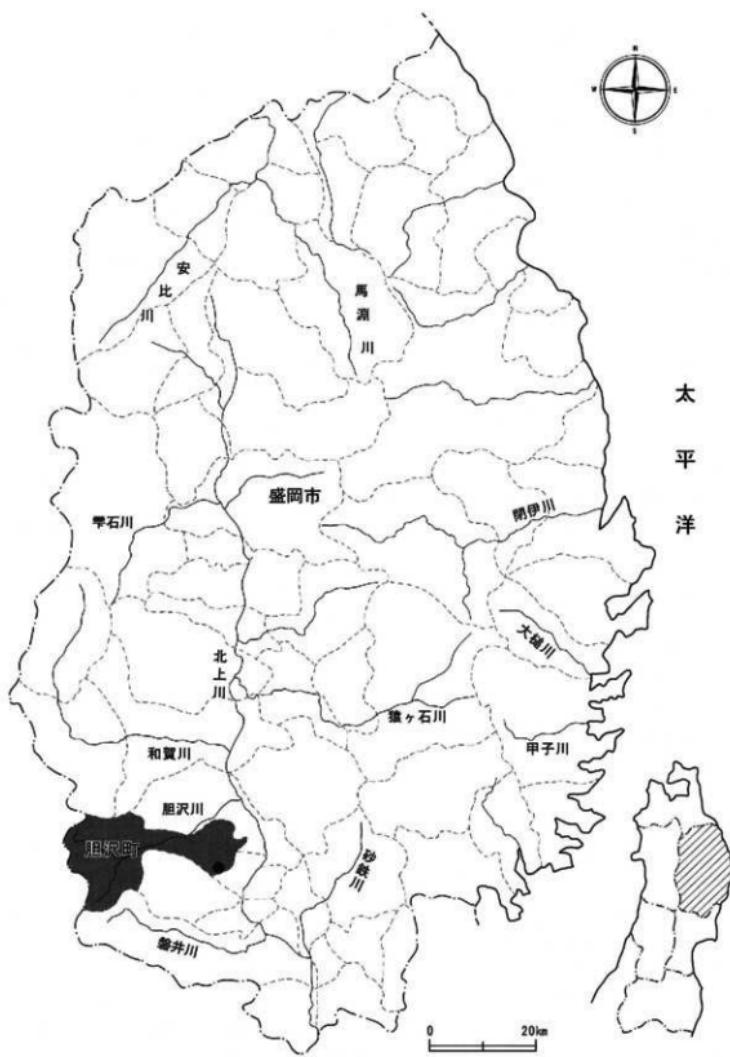
胆沢町 1971 『胆沢町史 I 原始古代編』

岩手県教育委員会 1995 『岩手県埋蔵文化財包藏地一覧』

文化庁 1984 『全国遺跡地図 岩手県』

（財）岩手県埋蔵文化財センター 1996 『龍ヶ馬場遺跡発掘調査報告書 第243集』

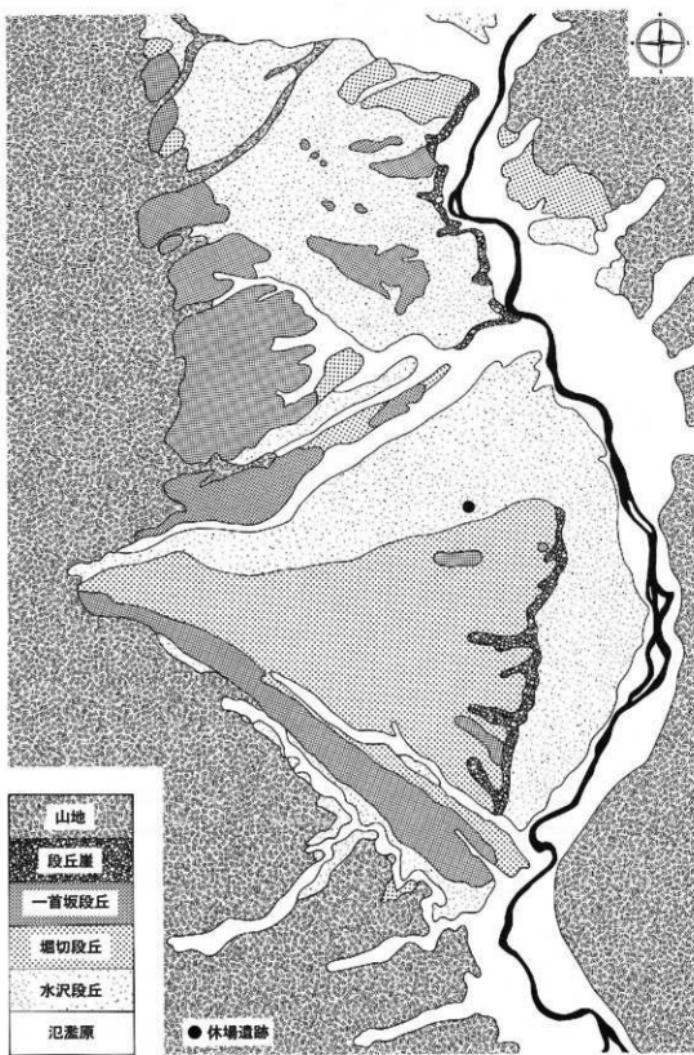
（財）岩手県埋蔵文化財センター 1997 『下尻前 II 遺跡発掘調査報告書 第252集』



第2図 岩手県図



第3図 遺跡の周辺図



第4図 胆沢扇状地を中心とした段丘区分



第5図 周辺の遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	時代	遺構、出土物	所在地
1	毛利城跡	城跡	中世	土器、陶器	青柳字毛利
2	埋石	散布地	平安	土器	青柳字埋石
3	机地	散布地	平安・平成	土器等	青柳字机地
4	中井	散布地	平安	瓦砾	青柳字中井
5	新里塚	城跡	平安	土器等、泊泥炭、陶器	青柳字新里塚
6	清水ト	散布地	弘仁・平安	弥生土器、土器等	青柳字清水下
7	疋田	散布地	平安	土器等、漆器等	青柳字疋田町
8	机地盤	城跡	中世	水器等	青柳字机地盤
9	穀倉	散布地	奈良・平安	土器等	青柳字穀倉
10	足利城跡	散布地・城跡	平安・近世	土器等、漆器等、土器	青柳字足利城跡
11	舟形古墳	古墳	古墳時代	土器等	青柳字舟形
12	大木	散布地	平安	土器等、瓦砾	青柳字大木
13	石田1・2	散布地	平安	土器等、波泥炭	青柳字石田1・2
14	沢田	散布地	奈良・平安	土器等	青柳字沢田
15	朝神下	散布地	平安	土器等	青柳字朝神下
16	第塚	散布地	平安	土器等、漆器等	青柳字第塚
17	山田城	城跡	中世	土器等	青柳字山田城
18	芦の池	散布地	平安	绳文土器（前、中期）、石器、土器等	青柳字芦の池
19	山の寺	散布地	平安	绳文土器（早、中期）、弥生・平安、土器等、石器	青柳字山の寺
20	十文字	散布地	平安	绳文土器	青柳字十文字
21	作原野	散布地	奈良・平安	土器等	青柳字作原野
22	丹野村	散布地	奈良・平安	绳文二号、土器等、須恵器	青柳字丹野村
23	川原	散布地	平安	土器等	青柳字川原
24	佐賀館	散布地	平安	土器等	青柳字佐賀館
25	成戸	散布地	平安	绳文・古代	青柳字成戸
26	小十文字	散布地	平安	绳文二号（中期）、土器等、須恵器、土偶	青柳字小十文字
27	区分	散布地	平安	绳文二号、石器等	青柳字区分
28	尼坂	散布地・黒森跡	平安	绳文二号（後期）、石器等、土器等	青柳字尼坂
29	川子沢	散布地	平安	绳文土器	青柳字川子沢
30	桃谷出	散布地	平安	绳文土器、土器等、須恵器、フレーク	青柳字桃谷出
31	石行	散布地	奈良・平安	土器等	青柳字石行
32	森下1	散布地	奈良・平安	土器等	青柳字森下1
33	南柄の下	散布地	平安	绳文土器	青柳字南柄の手
34	浅瀬町	散布地	平安	绳文土器	青柳字浅瀬町
35	鶴田1・2	散布地	平安	绳文土器（前、中期）、土器等、須恵器	青柳字鶴田1・2
36	吉田古墳群	古墳群	古墳時代	土器等	青柳字吉田古墳群
37	御所	散布地	平安	绳文土器	青柳字御所
38	合野	散布地	平安	绳文土器（前、中期）、石器等	青柳字合野
39	小鳥	散布地	平安	绳文土器（早、中期）、石器等	青柳字小鳥
40	北山跡	散布地	平安	绳文土器（中期）、土器等	青柳字北山跡
41	台丘	散布地	平安	绳文土器	青柳字台丘
42	砂飛	散布地	平安	绳文土器	青柳字砂飛
43	今1	散布地	平安	绳文土器	青柳字今1
44	小田切	散布地	平安	绳文土器	青柳字小田切
45	上峰	散布地	平安	绳文土器	青柳字上峰
46	小山古八丁	城跡	中世、近世	土器等、三脚	青柳字古八丁
47	大堀	散布地	平安	绳文土器（前、中期）、石器等	青柳字大堀
48	後原	散布地	平安	绳文土器（中期）、石器等	青柳字后原
49	芦原	散布地	平安	绳文土器	青柳字芦原
50	余化跡	散布地	平安	绳文土器	青柳字余化跡
51	田代長原	散布地	平安	绳文土器（前、中期）、土器等	青柳字田代長原
52	昂山	散布地	平安	绳文土器	青柳字昂山
53	上森の	散布地	平安	绳文土器	青柳字上森の
54	上段・赤坂	散布地	平安	绳文土器（前、中期）、弥生土器、石器等	青柳字上段・赤坂
55	八幡堂	散布地	古代	フレーク	青柳字八幡堂
56	油池	散布地	平安	土器等	青柳字油池
57	中谷地	散布地	平安	绳文土器（中期）、石器等	青柳字中谷地
58	四ツ尾	散布地	平安	土器等	青柳字四ツ尾
59	埴山	散布地	平安	绳文土器	青柳字埴山
60	五反町	散布地	平安	绳文土器	青柳字五反町
61	の台	散布地	平安	绳文土器	青柳字の台
62	植人	散布地	平安	绳文土器	青柳字植人
63	植人一ノ塚	散布地	平安	绳文土器	青柳字植人一ノ塚
64	跡地裏	散布地	平安	绳文土器	青柳字跡地裏
65	穴敷	散布地	平安	フレーク、石器	青柳字穴敷
66	四風	散布地	平安	绳文土器	青柳字四風
67	二の古多様	散布地	平安	土器等	青柳字二の古多様
68	翁人	散布地	平安	フレーク	青柳字翁人
69	主計谷地	散布地	平安	绳文土器	青柳字主計谷地
70	竹子地	散布地	平安	绳文土器	青柳字竹子地
71	駒込	散布地	平安	绳文土器	青柳字駒込
72	上締者	散布地	古代	土器等	青柳字上締者
73	後締者	散布地	平安	绳文土器、石器	青柳字后締者
74	中井	散布地	平安	绳文土器	青柳字中井
75	中田	散布地	平安	绳文土器	青柳字中田
76	松原	散布地	平安	绳文土器	青柳字松原
77	片原	散布地	平安	绳文土器	青柳字片原
78	二の沢	散布地	平安	绳文土器（前、中期）	青柳字二の沢
79	二の沢II	散布地	平安	绳文土器（フレーク）	青柳字二の沢II
80	外屋	散布地	平安	绳文土器	青柳字外屋
81	林地	散布地	平安	绳文土器	青柳字林地
82	二の沢Ⅲ	散布地	平安	绳文（フレーク）	青柳字二の沢Ⅲ

### III 調査方法と整理方法

#### 1 調査方法

##### グリッドの設定と遺構名

調査区域は南北約 90m、東西約 70m の平地にある。調査区内に南北方向 2 点の基準点を設定し、それを基にグリッドを設定した。基準点 1・2 の成果値は以下のとおりである。

基準点 1 X = -103,485.000m Y = +21,200.000m H = 120.271m

基準点 2 X = -103,410.000m Y = +21,200.000m H = 121.060m

調査区内には上記の基準点のほか、補点を 5ヶ所に設置している。

グリッドは、起点を北西に置き 5×5m を 1 グリッドとした。南北方向は 00 から 17（算用数字）まで、東西方向は A から R（アルファベット大文字）までを与える、その組み合わせによって（01A 区・12B 区など）グリッド名とした。

なお、基準点 1 は 17 I 区、基準点 2 は 7 I 区の各グリッドにあたる。

##### 遺構と遺構検出・遺構の精査

調査は、まず雑物の除去後に文化課が実施した試掘結果の確認とトレンチのクリーニングを行った。その後、表土の厚さや遺構の有無、遺物の出土状況を確認する目的で調査区全体にトレンチを入れた。この結果、表土下・基本層序の第 III 層上面が遺構の検出面であることが確認された。このため基本層序の第 II 層下位までは重機を使用した。地点により II 層がみられない所もあり重機の掘り下げは表土を指標に行い、この後人力によって遺構の有無を確認しながら第 III 層まで掘り下げた。

検出された遺構は、住居跡は 4 分法、土坑・焼土は 2 分法を原則として精査を行ったが、必要に応じて他の方法も併用した。各遺構とも平面実測はグリッド軸に合わせた 1m のメッシュを基本とした。遺構の平・断面図は 20 分の 1 の縮尺を基本とし、炉跡等は 10 分の 1 で実測した。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を適宜行った。

##### 写真撮影

野外での写真撮影は、35mm 判 2 台（モノクローム・カラーリバーサル各 1 台）と 6×7cm 判モノクローム 1 台を使用した。また、メモ的にポラロイドカメラも使用した。調査終了直前には、セスナ機による空中写真撮影を行った。

#### 2 整理方法

##### 遺物の処理

遺物は、野外調査と並行して雨天時などに水洗まで行い、その後室内で注記・接合・復元の順に進めた。

土器類は報告書掲載用のものを選別後、登録作業・実測・拓本・写真撮影・トレースを行い、遺物図版を作成した。また、復元については 2 点を外部に委託した。石器類は器種毎に登録し、土器類と同様に進めた。

##### 遺構図面・図版について

野外調査で得られた図面類は、標高等の確認、平面・断面図の点検をし、必要に応じて合成した。その後トレース・遺構図版作成の順に進めた。

遺物の図版は遺構の種別毎に作成し、遺構外出土のものはまとめて掲載した。縮尺は、土器実測図は原寸および 2 分の 1 および 3 分の 1、拓本図は 2 分の 1 および 3 分の 1、剥片石器は 3 分の 2、礫石器は 3 分の 1、土製品は 2 分の 1 とした。また各図版内にはそれぞれスケールを付している。

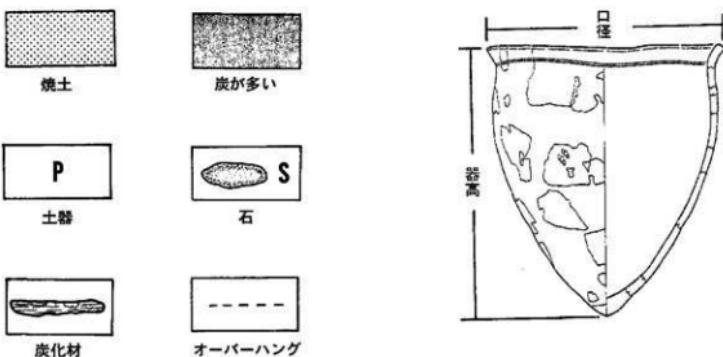
遺構図版は遺構の種類毎に掲載した。縮尺は住居跡・陥し穴・陥し穴状遺構が50分の1、土坑が40分の1、焼土が30分の1である。遺構・遺物の図版に使用したスクリーントーンについては凡例に示した。

#### 遺物写真について

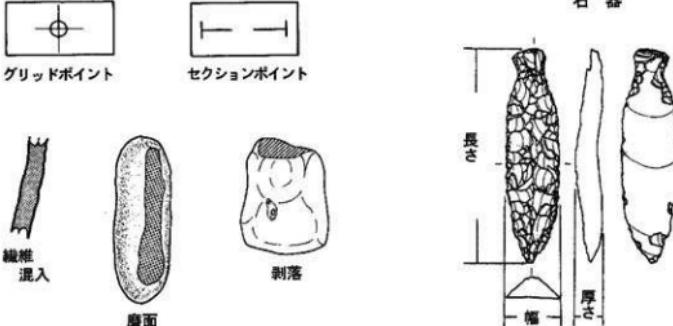
遺物写真図版の縮尺は、剥片石器3分の2、礫石器3分の1および6分の1、土器の立体が3分の1、土器破片2分の1および原寸、土製品は2分の1を原則とした。遺物写真図版のNoは、遺物図版と同一のNoとした。

#### <凡　　例>

土　器



石　器



## IV 検出された遺構と遺物

### 1 遺構と遺構内出土遺物

#### (1) 積穴住居跡

縄文時代の積穴住居跡が7棟検出された。時期は早期末葉のものと思われる。出土遺物数は各遺構ごとにばらつきはあるものの総じて僅少であり、土器は磨耗の著しい細片がほとんどであった。

各住居ともⅢ層上面で検出されている。I・II層からの削平跡がⅢ層にもみられ遺構の上部が剥ぎ取られたものもあると思われる。柱穴の配置については明確な特定に至らず、調査時に確認できたものを全て図面に掲載した。文章内で推定しているものは暗褐色～黒褐色土を含んだもので、柱穴の規模と配置に着目したものである。

#### 1号積穴住居跡

遺構（第6図、写真図版2）

<位置> 調査区南西部グリッド151区の南西側に位置する。

<検出状況> Ⅲ層上面で暗褐色土の上面プランと、プラン北側にて84×90cmの範囲で広がる明赤褐色焼上により検出した。

<規模・平面形> 2.67×2.35mの不整円形を呈する。

<埋土> 上位に明赤褐色の燒土を薄く含む。埋土は暗褐色土の単層で炭化粒を含む。

<壁・床> Ⅲ層を壁・床とし緩やかに外傾して立ち上がる。塗高は4.3～11.0cmである。床面はほぼ平坦であるが、部分的に僅かな凹凸がある。北側で土器が集中して出土した地点の床は一部しまっている。

<ピット> 3基検出した。P1の埋土は褐色土・炭化粒を含む暗褐色土の単層で、配置・深さ・埋土からみて柱穴の可能性もある。P2の埋土は黒褐色土で多量の炭化物を含んでいる。P3は座んだように浅く、平面形は楕円形を呈し、埋土は暗褐色土の単層である。また同様のものが2号住居から2基検出されている。

<柱穴> 柱穴状小ピットは3基検出し、深さは8.1～14.4cmである。2基は壁際に位置しているが、1基は遺構外に位置している。埋土はいずれも炭化物を含んだ黒褐色土である。柱穴はpp1-pp2-pp3で三角形の柱穴配置が想定される。

遺物（第6～10図、写真図版17・18）

<出土状況> 埋土及び床面直上から土器片・石器類が出土している。土器片は住居の北・南・北東隅・中央部にまとめて出土し、それぞれA・B・C・Dに分けて取り上げた。C地点の出土土器は特に摩滅が激しかった。P1からは磨石3点、横型石匙1点、口縁部土器片が出土している。P2からは黒褐色土中から破碎した小破片と多量の炭化物が出土している。

<土器> 1～4はA地点より出土したものである。胎土は全て砂粒を含みやや粗～粗で繊維の混入は見られない。色調は橙～褐色を呈し2・4は内面に炭化物が付着している。5～8はB地点の出土土器である。6・7には内外面ともLR縄文が施されている。8は土器の口縁部で内外表面が非常にやすく剥がれやすい。9～11はD地点より出土した土器で、11には1段Rの撚糸文が施される。12は口縁部と同一ヶ所から出土した撚糸文が施された破片である。12は外面がにい明黄褐色、内面が黒色を呈する土器片で内面に指頭圧痕と思われる跡がある。15・16はほぼ同一地点より出土した口縁部で胎土・焼成とともにほぼ似通っているが16には口唇部に刻印がはり、外面には0段rの撚糸文が施されている。19はP2埋土より出土した口縁部の

破片である。外面はL R網文が口唇部近くまで施され、口縁部には太くて浅い沈線が巡る。沈線の下には原体圧痕が施される。

＜石器＞ 20・21は床面より出土した縦型の石匙で表面は全面加工が施され裏面は片側に加工が施される。22は住居内P1より出土した横型の石匙でつまみ部分から表面にかけて丁寧な加工が施されてある。23は台形状、24は三角形状の石磨である。25は上部に加工が施された剥片（Rフレ）である。26・27・28は22の横型石匙と同地点より出土した磨石である。29は右縁辺に磨面を持つ磨石である。

## 2号堅穴住居跡

遺構（第11図、写真図版3）

＜位置＞ 調査区南西部グリッド12H・12I区の北側にかけて位置する。

＜検山状況＞ Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりにて検出した。

＜規模・平面形＞ 4.68×2.77mの不規格円形を呈する。

＜埋土＞ 暗褐色土を主体とする3層からなる。黒色土・黒褐色土には炭化粒を含む。

＜壁・床＞ 立ち上がりは一部はっきりと確認できず、Ⅲ層の褐色土を壁・床とした。壁の立ち上がりは緩やかに外傾し壁高は8.0～17.2cmである。床面は部分的に凹凸があり、住居の南側の土器が出土した地点と炉の東側部分が一部硬くしまっている。

＜ピット＞ 住居内北側、南北に達るように2基検出した。1号堅穴住居跡と同様、平面形は椭円形で浅い窪み状である。埋土は暗褐色土の単層である。

＜柱穴＞ 遺構内外にて46基検出した。開口部は8～34cmとばらつきが多く、深さは5.0cmと浅いものから28.6cmまである。埋土は暗褐色土・黒褐色土を主体とし、炭化物はほとんど含まれていない。推定される柱配置はpp6-pp7-pp8-pp14-pp19-pp20-pp24である。浅い柱穴は全て壁際に寄っているため、3cmほどの深さのものもプランに入れた。

＜炉＞ 住居北側より地床炉を検出した。規模は53×38cm・厚さ約20cm、平面形は椭円形を呈する。焼土は2層に分かれ、その下層の黒褐色土には炭化物が多く含まれる。また、焼土の下層には焼土の形に沿うような状態で炭化材が残っている。

遺物（第12～13図、写真図版19）

＜出土状況＞ 埋土及び床面直上から土器片・石器類が出土している。住居南側で土器片がまとまって出土した。

＜土器＞ 29は尖底深鉢の胴下部から底部にかけての接合破片である。外面はL R網文が施され尖底部はナデ調整されている。内外面ともに灰黄褐色を呈し纖維の混入は見られなかった。30～37、39は表裏網文土器片である。30・31の胎土は砂粒を含みやや粗く少量ではあるが纖維を含み、内外面には微かな痕跡であるがR L網文が施されている。33の内面には炭化物が付着している。32～34はL R、35～37はR Lの網文が施される。纖維は含んでいない。

＜石器＞ 40は無茎円基の石鏃、41は片面加工の縦型石匙である。

＜土製品＞ 長さ（4.3cm）、幅3.3cmで上半部に凸状のふくらみを持つ。下側部に刺突が2ヶ所、ふくらみの下1ヶ所に施されている。裏面は僅かに内湾する。

### 3号竪穴住居跡

遺構（第14図、写真図版4）

＜位置＞ 調査区南西部グリッド13・14K区の東側にかけて位置する。

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりにて検出した。

＜規模・平面形＞ 4.49×1.74mの不整長楕円形を呈する。

＜埋土＞ 黒褐色土・暗褐色土を主体とする6層からなる。住居中央部の埋土には炭化物を含む。

＜壁・床＞ Ⅲ層を壁とし、緩やかに外傾して立ち上がる。壁高は6.0～22.9cmである。床面は黒色土を含んで汚れた暗褐色土を床面とし、東側から中央部に緩やかに傾斜していくが西側はやや凹凸気味である。東側壁付近は部分的に便くしまっている。

＜柱穴＞ 35基検出した。うち15基は壁の外側から、13基は壁の立ち上がり部分から検出した。開口部7～24cm・深さ2.1～41.9cmとばらつきが多い。pp33は住居内に内傾して柱穴が入り込むがその他はほぼ垂直に柱穴が入り込む。埋土は褐色土混じりの黒褐色土・暗褐色土が主体である。推定される柱配置はpp1～pp2～pp3～pp5～pp11～pp12～pp33～pp35である。浅い柱穴に関しても2号住居と同様に壁際に寄っているもののが多いためプラン内にいたれた。

遺物（第15～19図、写真図版20～21）

＜出土状況＞ 埋土及び床面直上から土器片・石器類が出土している。住居内の西側壁際より尖底土器が2点出土した。また、尖底土器の出土位置から土器の上部に僅かに重なるように1点(43×23cm)・住居内中央部より2点(凹石・僅かに使用面が見られる台石)・住居内東側より大きい礫(台石?)が2点出土した。

＜土器＞ 43・44は出土状況を元に復元したものである。43は外面にRL縞文、44は内外面ともRL縞文が施されている。器形は両方とも尖底部から胴部にかけて緩やかにふくらみ、口縁部はやや外傾する。43には口縁部のくびれに浅い沈線がめぐっている。52・53は同一個体と思われる破片である。LR縞文施文後、口縁部に浅い沈線をめぐらし沈線の下に原体圧痕が見られる。また、口唇部にも同一の原体圧痕を施していると思われる。48の口縁部破片は口唇部近くまで地文があり、口唇部には工具により刻目が施されている。55は住居内東側の石台の下より出土した土器片で、RL縞文が施されている。

＜石器＞ 56は無茎で基部が長い石鎌である。57・58は3縁刃に刃部を持つ石鎌で、57は裏面1刃に粗雑な剥離があり、58は基部に大きな剥離が施され下部が欠損している。59・60は1刃に刃部をもつ削器である。61は上部が欠損し、片面に押圧剥離が施され尖頭部を持つ。62は表面の剥離の末端と裏面の右側刃に刃部を形成している。63・64・65はRフレ、66はUフレである。67～69は側面に磨面を持つ磨石で、69の棒状磨石は半分が欠損し表面に煤が付着している。70は小型の凹石、71は中央部に使用痕を残した凹石である。

### 4号竪穴住居跡（第20図、写真図版5）

＜位置＞ 調査区南東部グリッド12L・12M区にかけて北側に位置する。

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりにて検出した。

＜規模・平面形＞ 4.53×3.60mの不整円形を呈する。

＜埋土＞ 上位に黒褐色土、下位に黒褐色土を含む褐色土が堆積する。

＜壁・床＞ Ⅲ層を壁とし、緩やかに外傾して立ち上がる。壁高は9.5～12.7cmである。しまりのある褐色土を床面とし、部分的に凹凸が見られる。

<柱穴> 遺構内より 6 基、遺構外より 4 基計 10 基を検出した。開口部 12.5~30cm・深さ 8~36.5cm である。埋土は黒褐色土を主体としている。pp1、pp2、pp3、pp6、pp7、pp8 は開口部が底部に比べ大きく開き、開口部付近でえぐられたような跡を伴う。柱配置は pp1-pp2-pp3-pp4-pp10 を推定した。

遺物（第 22 図、写真図版 22）

<出土状況> 床面直上より土器の細片数点と石器 1 点が出土した。

<土器> 74 は北側壁際から出土した土器で、磨耗が著しく原体は RL と思われる。胎土は砂粒を含み粗く、少量であるが織維を含んでいる。

<石器> 75 の削掻器は右側の縁辺部に刃部が作られている。

#### 5 号堅穴住居跡（第 21 図、写真図版 6）

<位置> 調査区南東部グリッド 12N 区の北西側に位置する。

<検出状況> Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりにて検出した。

<規模・平面形> 8.02×6.94m の不整隅丸方形を呈する。東側にやや張り出し気味である。

<埋土> 上位は暗褐色土、下位は褐色土を主体とする。

<壁・床> Ⅲ層を壁とし、緩やかに外傾して立ち上がる。しまりのある褐色土を床面とする。壁高は 7~15.3cm と緩やかな凹凸がある。

<ピット> 住居南東側より平面形が不整橢円形のピット 1 基検出。規模は開口部径 90×61cm・深さ 17 cm である。暗褐色土の單層からなり埋土中より炭化粒と 110 点のチップが出土した。総重量は 24.7g、石材は全て頁岩である。また、住居内より出土した石器と全てのチップの接合関係は確認できなかった。床面検出時に検出されたことからこの住居に伴う施設と思われる。

<柱穴> 遺構内全体より 32 基、壁の外側より 5 基の計 37 基を検出した。規模は、開口部 14.5~33.5cm・深さ 9~33.7cm である。埋土は暗褐色土・褐色土等の混合土が多い。柱穴配置は pp23-pp4-pp28-pp30-pp31-pp32-pp33-pp17-pp20 と推定され、配置を見る限り南東側にも検出しえなかつた柱穴がある可能性を持っている。

遺物（第 22~26 図、写真図版 22~25）

<出土状況> 壁上部・床面より土器片・石器が出土した。

<土器> 76・78 は埋土上部にて出土した。76 は胴下部から底部の接合破片である。丸みを帯びた尖底部から緩やかに外傾している。胎土は砂粒を含み粗く微量であるが織維を含んでいる。外面のみ RL 織文が施される。77 は床面より検出した破片で、微量であるが織維を含み、外面のみ RL 織文が施されている。

<石器> 79 は尖頭部を欠損した石鎌、80 は刃部を欠損した石鎌である。81~84 は片面加工の石鎌で、81 は細長台形状、82 は不整台形状を呈する。83・84 はホルンフェルスを石材としているため摩滅が著しい。85 は細長の形状を呈し表面に加工が施され右側辺に刃部を持つ。86・89 はノッチ状に加工した刃部を持つ。92 は両面全体に加工を施している。93 は左側辺に刃部を施し尖頭部を形成している。103 は片面加工の打製石斧で、刃部が欠損している。105・106 は棒状磨石で石の縁辺と側面に磨面をもつ。105 は焼成を受け表面が被損している。

#### 6号竪穴住居跡（第27図、写真図版7）

＜位置＞ 調査区南東部グリッド11M区の南東側に位置する。

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりにて検出した。

＜規模・平面形＞ 3.95×2.27mの長楕円形を呈する。

＜埋土＞ 暗褐色土を主体とする。

＜壁・床＞ 上部は削平を受け壁高は1.8～7cmと浅く、埋土のしまりがある部分で壁の立ち上がりを決めた。暗褐色土を含む褐色土を床面とする。

＜柱穴＞ 造構内より4基、立ち上がり部分より3基、壁の外側より12基の計19基を検出した。開口部は径9～57cm・深さ5.9～21.8cmである。一部の柱穴は埋土上部には搅乱の跡が見られるが、下層は暗褐色土を主体とするものがほとんどであった。またpp11の埋土上には炭化物が多く含まれていた。

#### 遺物（第27図、写真図版25）

＜出土状況＞ 床面より土器片が出土した。住居中央部に18×15cm程の礫があり、その周りに土器の小破片が散らばっていた。礫には磨面等は見られなかった。

＜土器＞ 住居床面の北西側から出土した。磨耗が著しく108は外面L R、109は外面R L？の縄文が施される。胎土は砂粒を含みやや粗い。

#### 7号竪穴住居跡（第28図、写真図版8）

＜位置＞ 調査区南東隅グリッド10Q区の南西側に位置する。

＜検出状況＞ Ⅲ層上層で褐色土混じりの暗褐色土の広がりにて検出した。

＜規模・平面形＞ 3.35×3.06mのほぼ円形を呈する。北側は一部トレンチにより切られている。

＜埋土＞ 褐色土混じりの暗褐色土を主体とする。

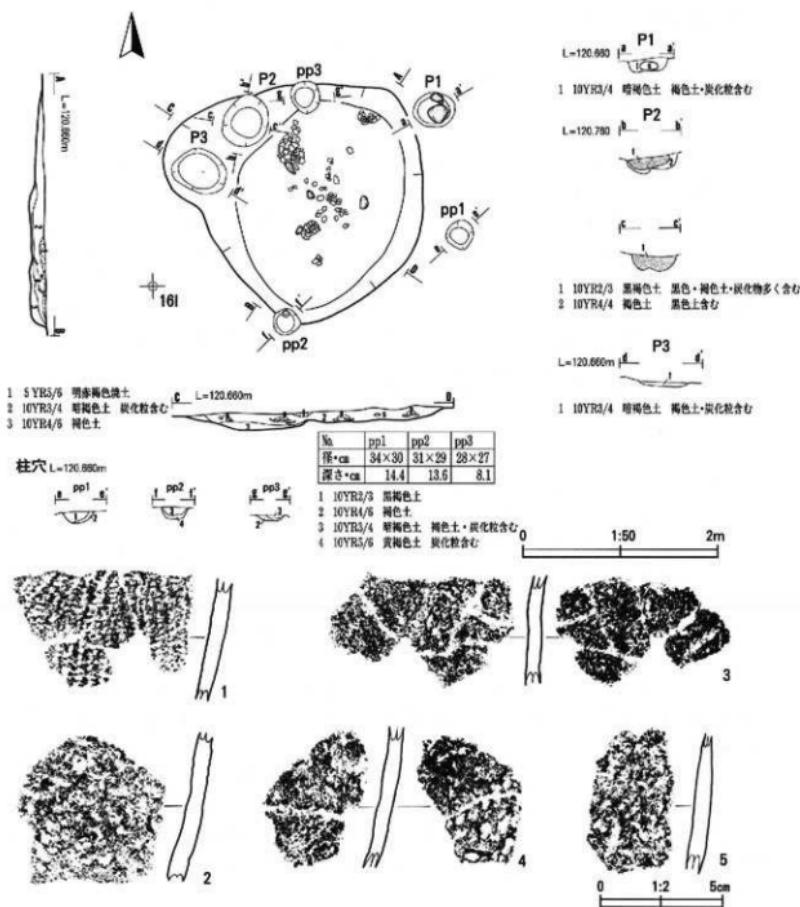
＜壁・床＞ 壁高は1.6～8cmと浅く、埋土のしまりがある部分で壁の立ち上がりを決めた。暗褐色土を含む黄褐色土を床面とし、ほぼ平坦である。

＜柱穴＞ 造構内より8基、壁の外側より4基の計12基を検出した。開口部径9～50cm・深さ7～24cmである。埋土は暗褐色・褐色土等の混合土を主体としている。推定される柱配置はpp6～pp3～pp11である。

#### 遺物（第28図、写真図版25）

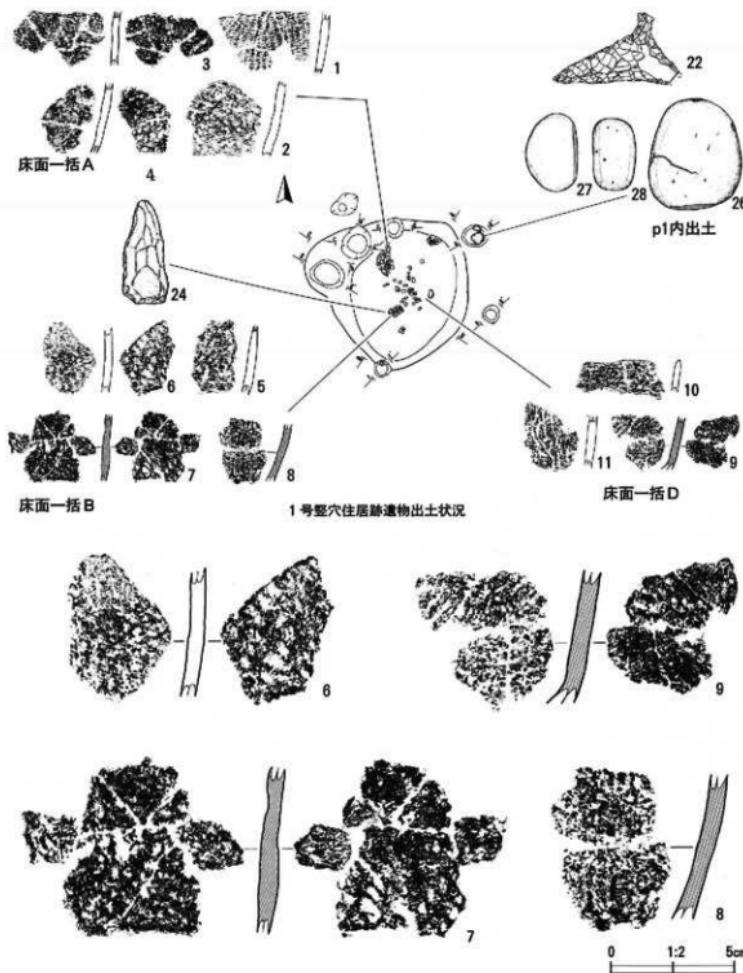
＜出土状況＞ 床面中央部よりまとまった状態で土器片が出土した。土器の縄文・条痕の違いより2個体の破片があるものと思われる。

＜土器＞ 7号住居より出土の上器の胎土は砂粒を含んではいるが、他の住居から出土した土器に比べ焼成は良好である。110・111は外面L Rで内面はナデ調整される。112・113は外面L R・内面貝殻条痕文が施される。53の内面には炭化物が付着する。



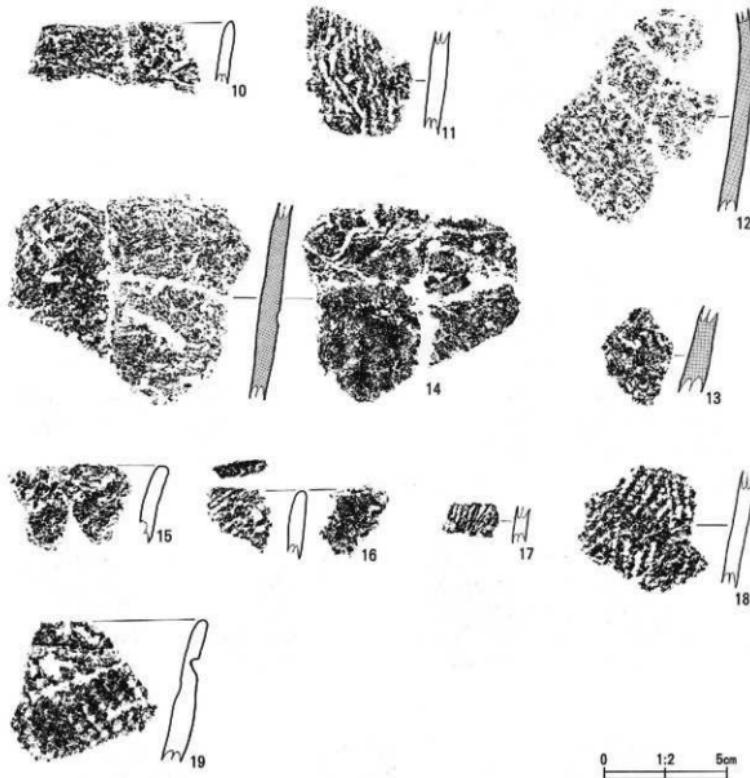
No.	出上地点	層位	器種	部位	文様ほか	色調			
						縫糸	外面	内面	分類
1	1号住居	床面-括A	深鉢	縫糸	縞文(外面:LR?) 内面:ナデ	なし	明黄褐色	褐灰色	I 17-1
2	1号住居	床面-括A	深鉢	縫糸	内外面磨耗著しい 内面灰化物付着	なし	褐色	褐色	I 17-2
3	1号住居	床面-括A	深鉢	縫糸	内外面磨耗著しい 表土:砂粒含む・やや粗	なし	褐色	こいの褐色	II 17-3
4	1号住居	床面-括A	深鉢	縫糸	縞文(LR) 内面灰化物付着 表土:砂粒含む・粗い	なし	褐色	褐色	II 17-4
5	1号住居	床面-括B	深鉢	縫糸	内外面磨耗著しい 表土:砂粒含む・粗い	なし	褐色	褐色	I 17-5

第6図 1号穴住居跡・出土遺物①



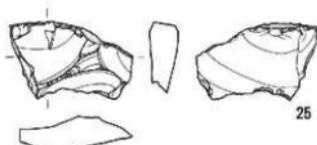
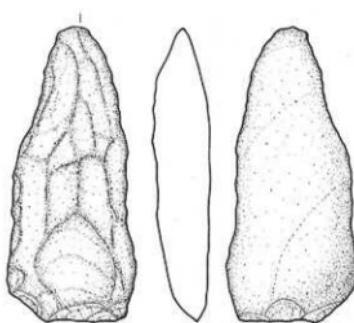
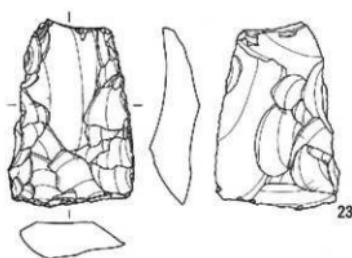
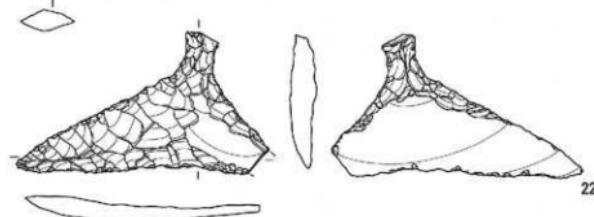
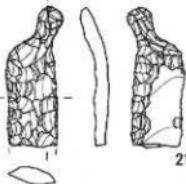
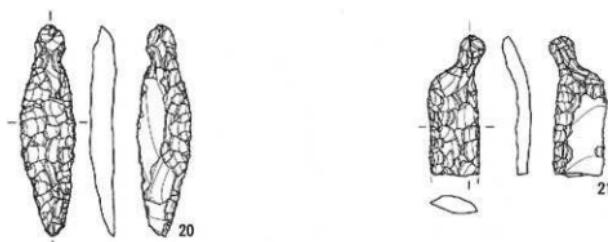
第7図 1号竖穴住居跡遺物出土状況・出土遺物②

No.	出土地点	層位	器種	部位	文様ほか		編號	色調		分類	写真図版
					外面	内面		外	内		
6	1号住居	床面一括B	深鉢	側部	圓文(外面:不明・内面:LR?)	胎土:砂粒含む・粗い	なし	褐色	褐色	II	17-6
7	1号住居	床面一括B	深鉢	側部	圓文(外面:LR?・内面:LR?)	胎土:砂粒含み粗い	微細	褐色	褐色	II	17-7
8	1号住居	床面一括B	深鉢	側部	内外面磨耗著しい		含む	明褐色	黑色	I	17-8
9	1号住居	床面一括D	深鉢	側部	圓文(内面:LR?)		微量	明褐色	黑色	II	17-9



No.	出土地点	層位	器種	部位	文様ほか	色面			分類	写真図版
						縫織	外面	内面		
10	1号住居	床面-括D	漆鉢	口縁部	内外面消耗著しい	なし	赤褐色	褐色	I	17-10
11	1号住居	床面-括D	漆鉢	側部	帆文(外面: 漆り糸R1段) 内面: ナデ	なし	赤褐色	褐色	V	17-11
12	1号住居	Q 1	漆鉢	側部	内外面消耗著しい 内面: 指爪圧痕	合む	赤褐色	黒色	I	17-12
13	1号住居	Q 1	漆鉢	側部	粘土: 粘粒含むや粗い	少量	褐色	赤褐色	I	17-13
14	1号住居	Q 1	漆鉢	側部	粘土: 粘粒含むや粗い	多量	褐色	赤褐色	II	17-14
15	1号住居	Q 2	漆鉢	口縁部	内外面消耗著しい	なし	褐色	赤褐色	I	17-15
16	1号住居	Q 2	漆鉢	口縁部	帆文(外面: LR?) 内面: ナデ	なし	褐色	赤褐色	II	17-16
17	1号住居	Q 2	漆鉢	側部	曳文(外面: 漆り糸) 内面: ナデ 粘土: 粘粒含むや粗い	なし	褐色	黒色	V	17-17
18	1号住居	西側ベルト	漆鉢	帆文(外面: LR?) 内面: ナデ	なし	褐色	黒色	I	17-18	
19	1号住居	P 1 壁上	漆鉢	口縁部	帆文(外面: LR) 内面: ナデ 口縁・太く(底)吹き詰め	なし	褐色	赤褐色	I	17-19

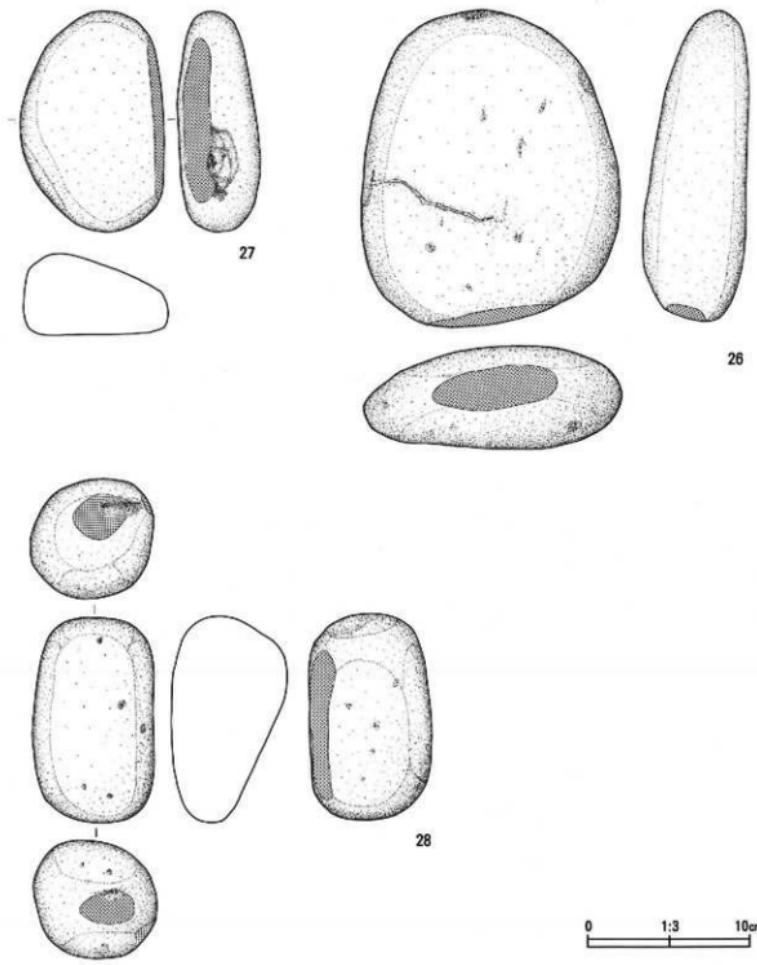
第8図 1号整穴住居跡出土遺物③



0 2:3 5cm

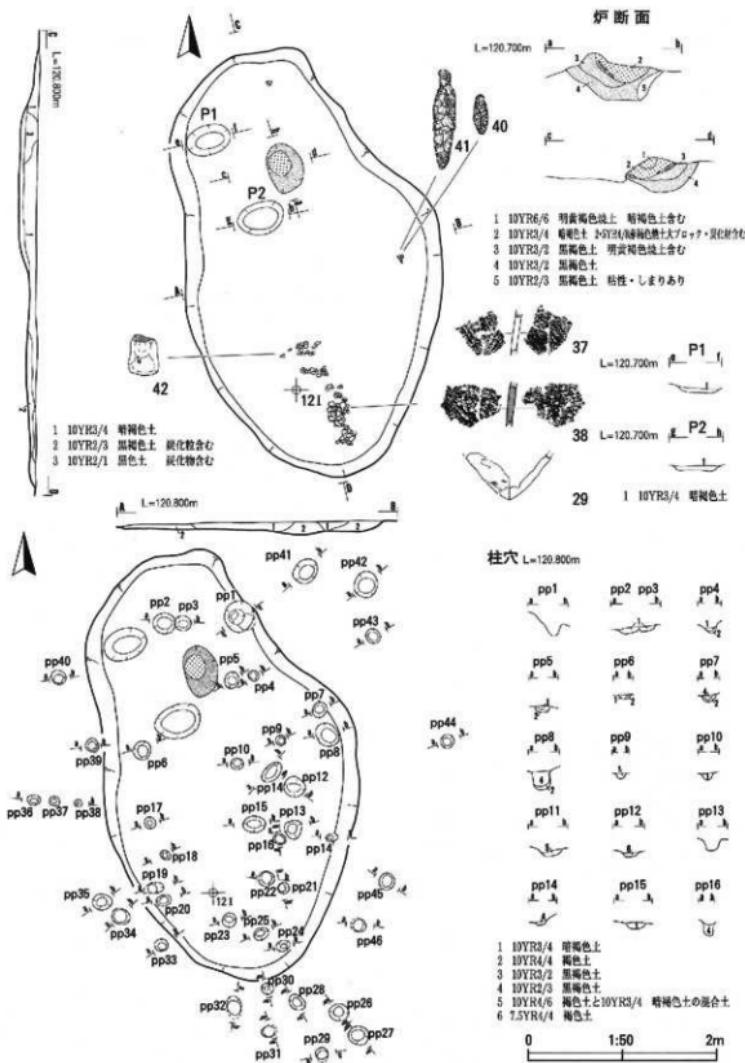
%	出土地點	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	产地	備考	写真図版
20	1号住居	上面一括	石器	6.5	1.7	0.8	6.6	頁岩	奥羽山脈		18-20
21	1号住居	上面一括	石器	(4.4)	1.7	0.9	4.3	頁岩	奥羽山脈	欠損	18-21
22	1号住居	床面一括E	石器	4.4	(7.8)	0.8	16.0	頁岩	北上山地	欠損	18-22
23	1号住居	埋土	石器	5.8	3.9	1.5	34.0	頁岩	奥羽山脈		18-23
24	1号住居	上面一括	石器	9.0	4.0	1.8	70.0	ホルンフェルス	北上山地	表面磨滅著しい	18-24
25	1号住居	床面一括2	剥片	2.4	3.8	0.9	7.7	頁岩	奥羽山脈		18-25

第9図 1号竪穴住居跡出土遺物④



號	出土地点	部位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	產地	備考	写真図版
26	1号住居	ppl	磨石	19.8	16.0	6.3	2960.0	石英安山岩	奥羽山脈		18-26
27	1号住居	ppl	磨石	13.8	8.9	5.7	810.0	石英安山岩	奥羽山脈		18-27
28	1号住居	ppl	磨石	12.8	7.6	7.3	1150.0	石英安山岩	奥羽山脈		18-28

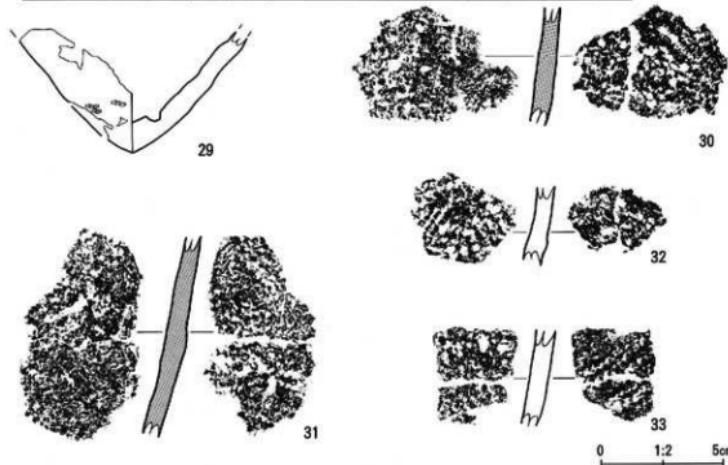
第10図 1号竪穴住居跡出土遺物⑤



第11図 2号竖穴住居跡①・②

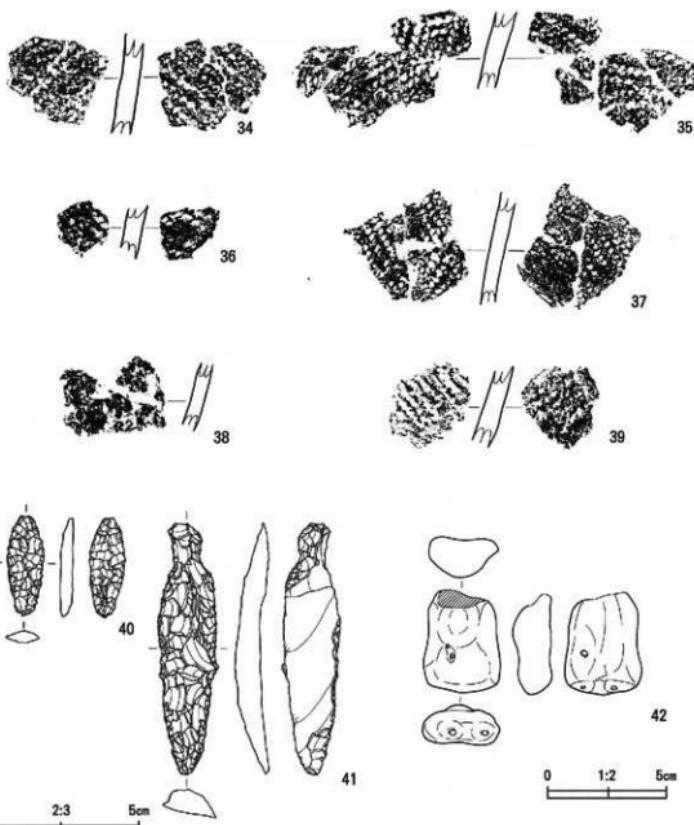


No.	pp1	pp2	pp3	pp4	pp5	pp6	pp7	pp8	pp9	pp10	pp11	pp12	pp13	pp14	pp15	pp16
0~cm	34×32	23×22	18×17	13×11	18×16	21×15	17×15	25×20	11×10	13×12	26×16	22×22	22×19	12×8	24×18	13×11
深3~cm	25.9	8.6	3.6	7.9	15.9	6.1	2.1	27.9	9.8	13.8	9.1	10.0	11.4	10.0	7.4	19.4
No.	pp17	pp18	pp19	pp20	pp21	pp22	pp23	pp24	pp25	pp26	pp27	pp28	pp29	pp30	pp31	pp32
0~cm	13×12	12×10	18×11	17×12	12×11	17×15	16×15	16×15	16×13	21×20	21×20	19×15	13×12	14×12	15×11	21×15
深3~cm	4.8	2.0	15.4	8.6	12.0	17.3	18.1	18.1	7.6	17.8	11.6	6.0	23.8	7.0	19.3	21.1
No.	pp33	pp34	pp35	pp36	pp37	pp38	pp39	pp40	pp41	pp42	pp43	pp44	pp45	pp46		
0~cm	14×13	21×18	21×17	15×12	12×11	8×7	15×14	16×15	23×23	29×25	16×13	15×14	18×17	14×13		
深3~cm	13.9	10.3	15.1	9.2	3.1	4.4	3.0	8.8	8.2	17.9	10.4	10.0	14.0	28.6		



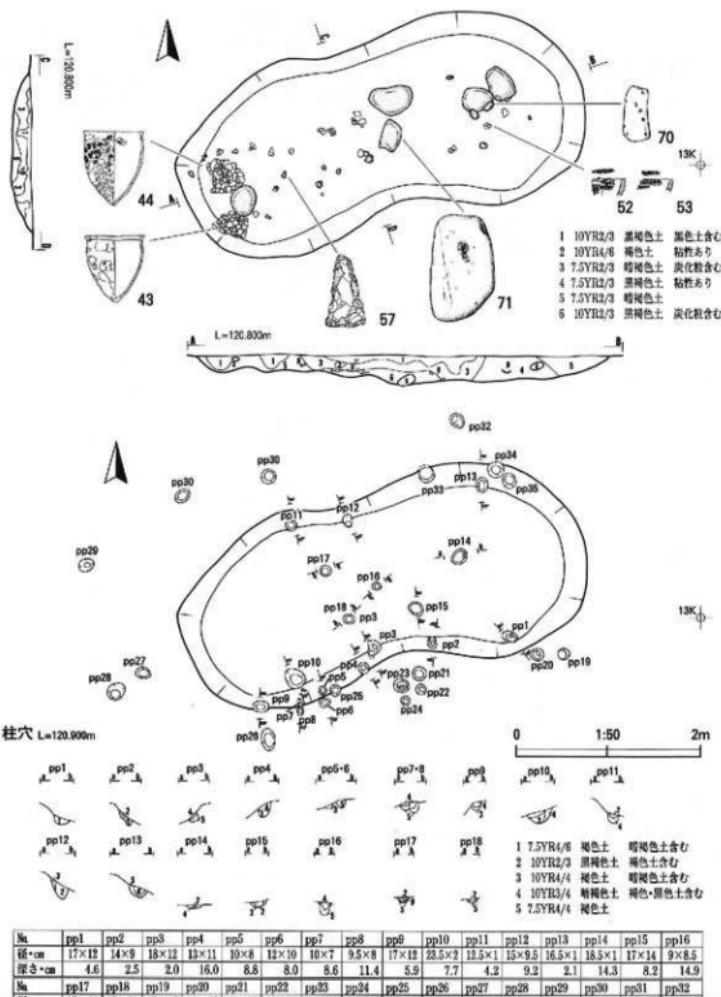
No.	出土地点	層位	基質	部位	文様ほか		織錠	色面		外面	内面	分類	写真図版	
					裏面(外面・内面)	ナデ		なし	火黄褐色	褐色				
29 2号住居	南側床面	表鉢	剥離	裏面(外面)	ナデ		なし	火黄褐色	褐色	I	19~29			
30 2号住居	南側床面	表鉢	剥離	裏面(外面・内面: RL)	粘土: 砂粒含みや粗	少量	なし	火黄褐色	褐色	II	19~30			
31 2号住居	南側床面	表鉢	剥離	裏面(外面: RL?)	粘土: 砂粒含み粗い	微量	火黄褐色	火黄褐色	褐色	II	19~31			
32 2号住居	南側床面	表鉢	剥離	裏面(外面・内面: RL)		なし	火黄褐色	火黄褐色	褐色	II	19~32			
33 2号住居	南側床面	表鉢	剥離	裏面(外面・内面: RL)	内面炭化物付着	なし	火黄褐色	火黄褐色	褐色	II	19~33			

第12図 2号堅穴住居跡柱穴断面図・出土遺物①

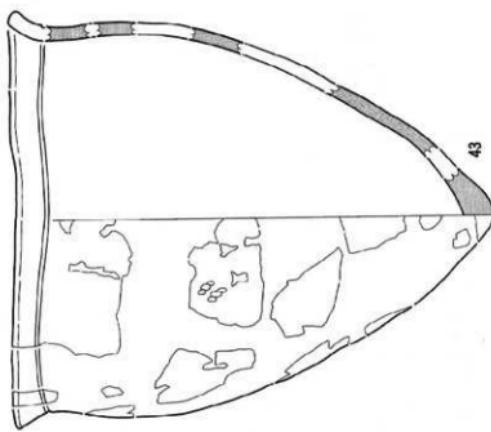
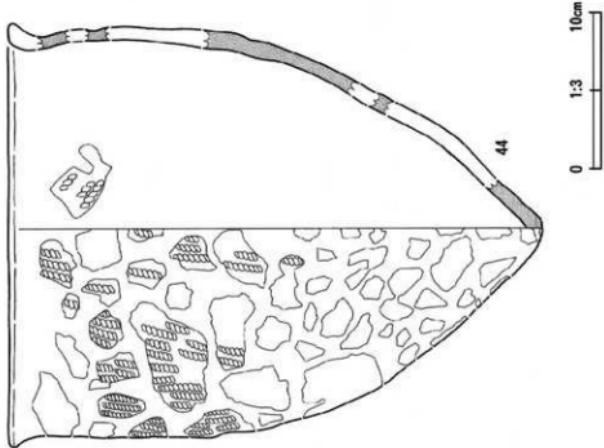


第 13 図 2 号竪穴住居出土遺物②

No.	出土地点	層位	器種	部位	文様ほか	色調		分類	写真図版		
						外面	内面				
34	2号住居	南側床面	深鉢	縫隙	縞文(外面: 内面: LR)	なし	灰黄褐色	くじ割型	II 19-34		
35	2号住居	南側床面	深鉢	縫隙	縞文(外面: 内面: LR)	なし	灰黄褐色	灰黄褐色	II 19-35		
36	2号住居	南側床面	深鉢	縫隙	縞文(外面: 内面: LR)	なし	褐色	褐色	II 19-36		
37	2号住居	南側床面-括	深鉢	縫隙	縞文(外面: 内面: LR)	なし	明黄褐色	くじ割型	II 19-37		
38	2号住居	北側床面-括	深鉢	縫隙	内外面磨耗著しい	船上: 砂粒含み粗	なし	明黄褐色	褐色	I 19-38	
39	2号住居	南側-括	深鉢	縫隙	縞文(外面: 内面: RL?)	なし	灰黄褐色	くじ割型	II 19-39		
No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	產地	備考	写真図版
40	2号住居	Q4	石鏡	3.2	1.1	0.4	1.5	頁岩	奥羽山脈		写真図版
41	2号住居	埋土	石鏡	8.0	1.9	1.1	11.5	頁岩	奥羽山脈		写真図版
No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	產地	備考	写真図版
42	2号住居	北側-括	(4.5)	3.4	1.7	1.8	中央部に凸状のふくらみを持つ	下面に剥落あり			写真図版

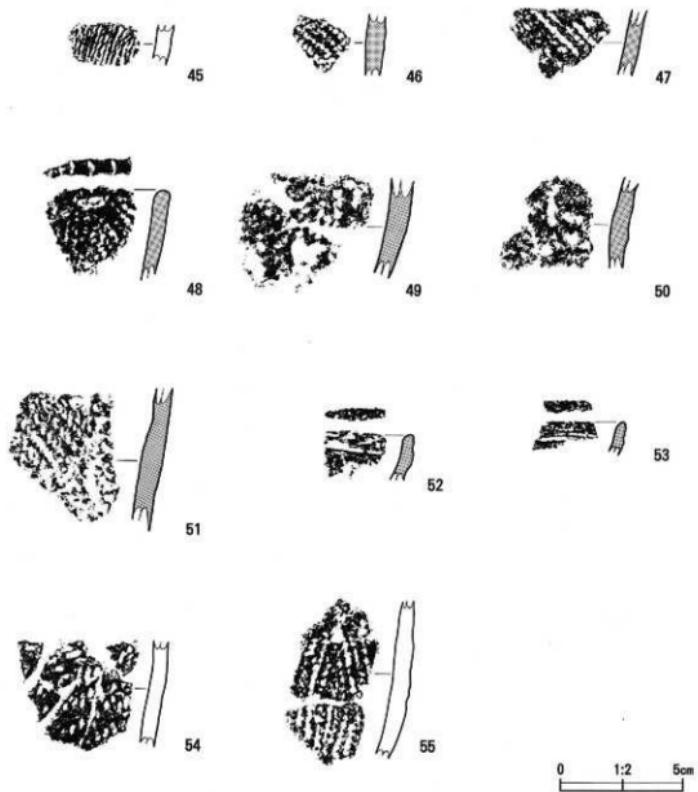


第14図 3号堅穴住居跡①・②



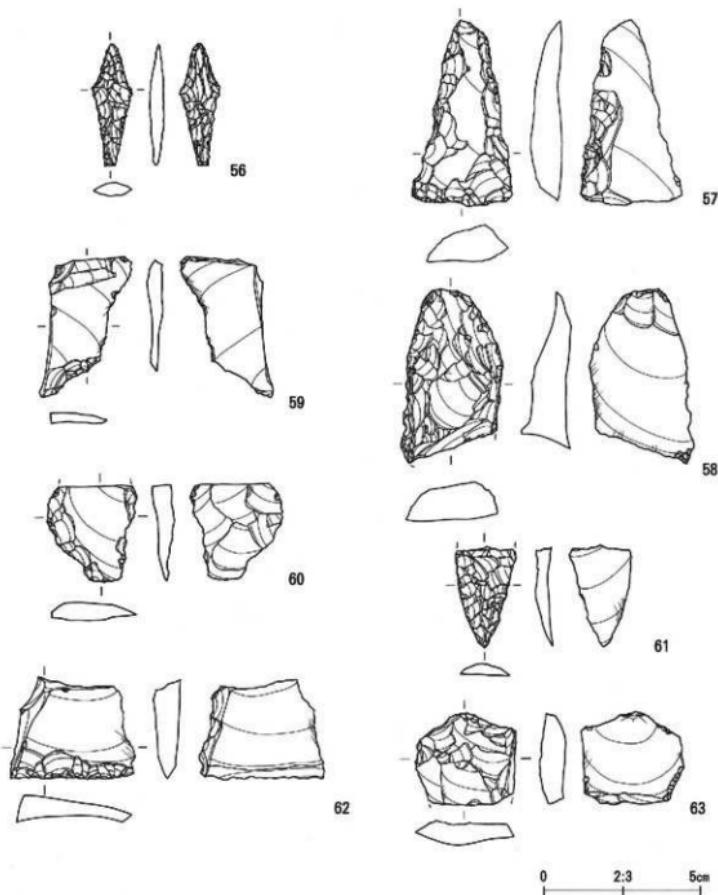
地點	層位	形態	部位	文様	分類	著者
3号住居	深部	圓文(外面・R)	内面	楕円形アリ	含む	いわゆる 1
44.3号住居	深部	圓文(外側)	内面	楕円形アリ	少量	明海色 II

第15圖 3号窓穴住居出土遺物①



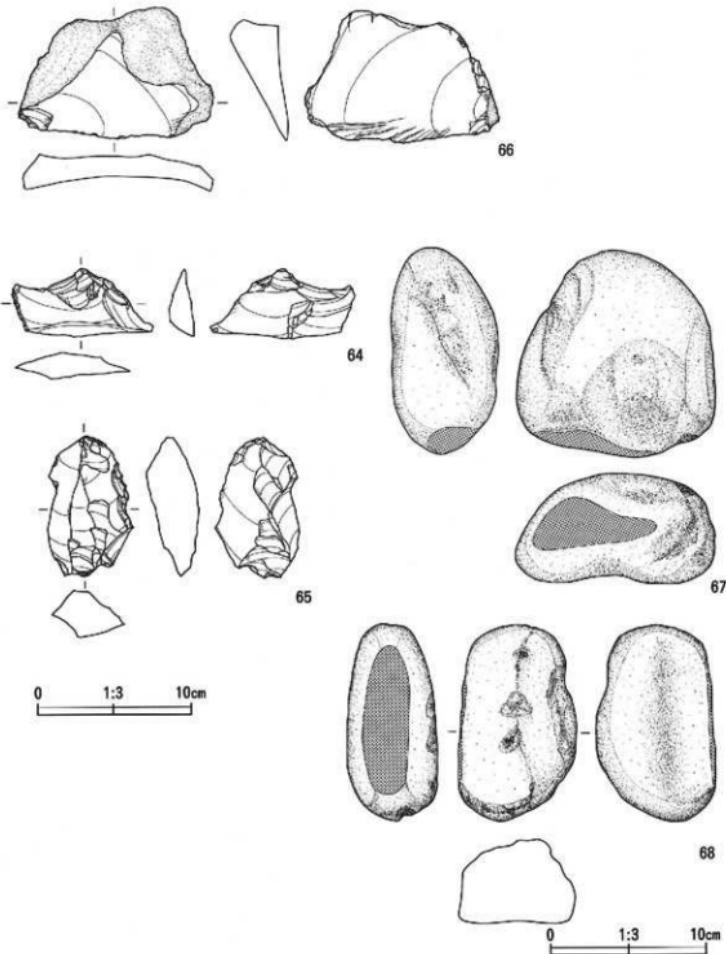
No.	出土地点	層位	器種	部位	文様ほか	色調				写真採用
						織錠	外面	内面	分類	
45	3号住居	埋土	深鉢	側部	織文(外面: 携糸) 内面ナデ 粘土: 密	なし	明黄褐色	に赤い青褐色	V	20-45
46	3号住居	埋土	深鉢	側部	織文(外面: LR) 内面ナデ 粘土: 鈍粒含みやや粗	少量	棕色	に赤い青褐色	I	20-46
47	3号住居	④	深鉢	側部	織文(外面: RL)	少量	に赤い青褐色	に赤い青褐色	I	20-47
48	3号住居	②	深鉢	側部	織文(外面: LR) 内面: ナデ 粘土: 密	少量	に赤い青褐色	に赤い青褐色	I	20-48
49	3号住居	北 墓壙上	深鉢	側部	外面: 斑接続らしい 内面: ナデ 粘土: 密	少量	に赤い青褐色	に赤い青褐色	I	20-49
50	3号住居	南西エリヤ埋土	深鉢	側部	磨耗著しく不明	微量	棕色	に赤い青褐色	I	20-50
51	3号住居	東前ベルト埋土	深鉢	側部	織文(外面: RL) 内面: ナデ	含む	に赤い青褐色	褐灰色	I	20-51
52	3号住居	② 東壁際	深鉢	口縁部	織文(外面: LR) 内面: ナデ 地紋の上から太く浅い 沈線・沈線下に原体妊娠・口縁部に同一の原体妊娠	含む	に赤い青褐色	明黄褐色	I	20-52
53	3号住居	② 東壁際	深鉢	口縁部	織文(外面: LR) 内面: ナデ 地紋の上から太く浅い 沈線・沈線下に妊娠・口縁部に同一の原体妊娠	少量	に赤い青褐色	明黄褐色	I	20-53
54	3号住居	②	深鉢	口縁部	織文(外面: LR?) 内面: ナデ 口縁・工具により口縁部に跡を残す	なし	明黄褐色	明黄褐色	I	20-54
55	3号住居	①の石の下	深鉢	側部	織文(外面: RL) 内面: ナデ 粘土: 鈍粒含みやや粗	なし	に赤い青褐色	明黄褐色	I	20-55

第16図 3号整穴住居跡出土遺物②



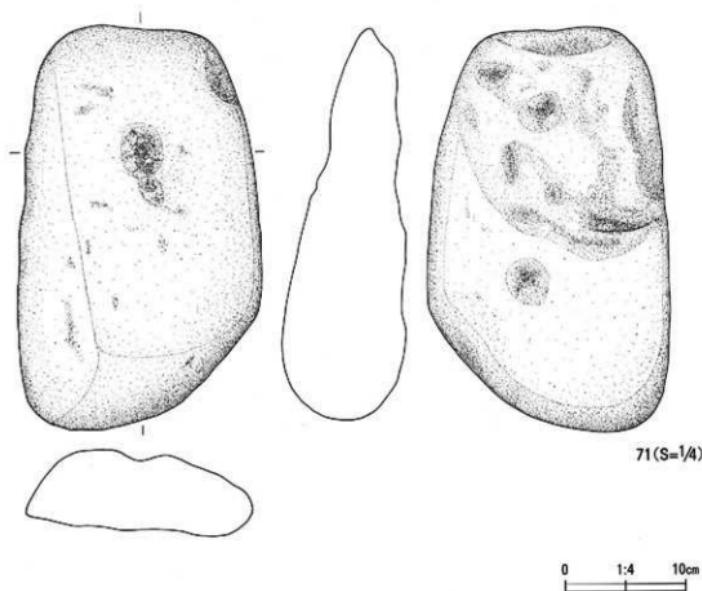
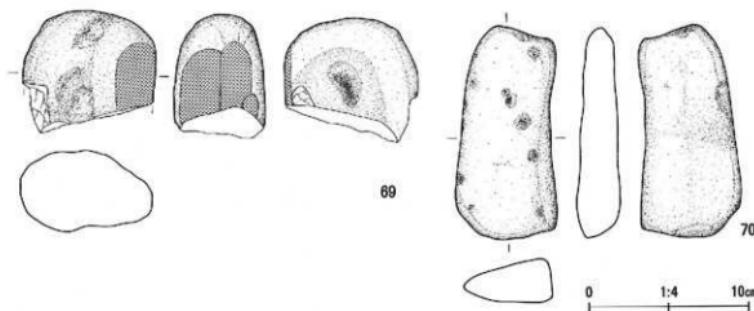
No.	出土地点	層位	基範	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	产地	備考	写真版
56	3号住居	北斜壁上部	石範	4.0	1.3	0.5	1.7	頁岩	奥羽山脈		21-56
57	3号住居	西側壁上下	石範	6.1	3.3	1.1	17.6	頁岩	奥羽山脈		21-57
58	3号住居	西側ベルト埋上	石範	(5.6)	3.3	1.6	25.7	頁岩	奥羽山脈	欠損	21-58
59	3号住居	鉈	削籠器	5.2	2.2	0.6	5.5	頁岩	奥羽山脈		21-59
60	3号住居	北西エリヤ堆土	削籠器	(3.1)	2.7	0.6	6.0	頁岩	奥羽山脈	欠損	21-60
61	3号住居	南西エリヤ堆土	削籠器	(3.2)	1.9	0.5	2.2	凝灰岩	奥羽山脈	欠損	21-61
62	3号住居	西側ベルト埋下	削籠器	3.5	3.0	0.9	13.5	頁岩	奥羽山脈	欠損	21-62
63	3号住居	南西エリヤ堆土	剝片	(3.0)	3.2	0.9	9.1	頁岩	奥羽山脈	欠損	21-63

第17図 3号竪穴住居跡出土遺物③



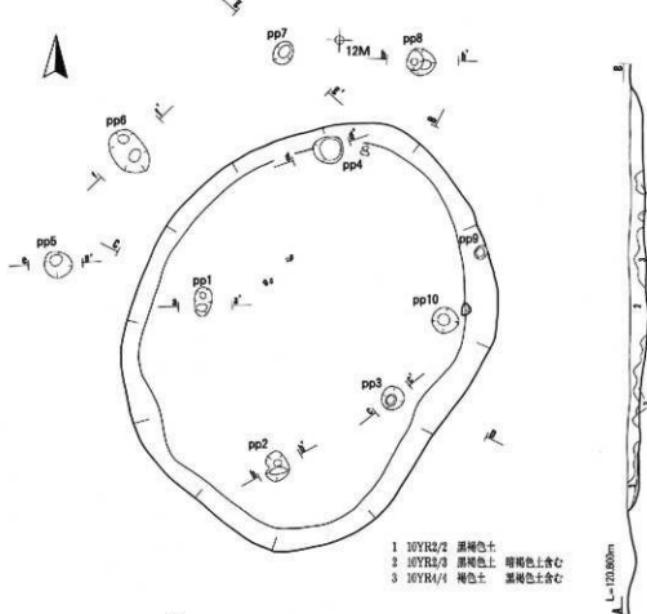
第18図 3号窓穴住居跡出土遺物④

出土地点	部位	基種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	产地	備考	写真欠番
64 3号住居	南西ヨリア壁土	刮片	2.2	4.6	0.9	5.5	頁岩	奥羽山脈	Rフレ	21-64
65 3号住居	壁土	刮片	4.6	2.7	1.6	17.8	頁岩	奥羽山脈	Rフレ	21-65
66 3号住居	壁	刮片	6.3	3.9	1.6	35.8	頁岩	奥羽山脈	Uフレ	21-66
67 3号住居	南西ヨリア壁土	磨石	13.5	13.0	7.1	1750.0	石英安山岩	奥羽山脈		21-67
68 3号住居	南西ヨリア壁土	磨石	12.6	7.6	5.4	760.0	石英安山岩	奥羽山脈		21-68

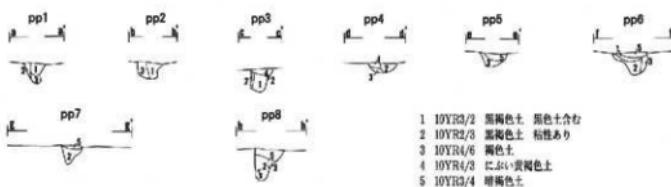


出土地点	部位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
69 3号住居	④	整石	(7.0)	8.3	5.0	490.0	石英安山岩	奥羽山脈	東凹石	21-69
70 3号住居	⑦	石台	13.4	6.4	2.8	365.0	石英安山岩	奥羽山脈	打痕有	21-70
71 3号住居	⑤	石台	33.7	20.1	10.1	8.5kg	石英安山岩	奥羽山脈	打痕有	21-71
72 3号住居	①	石台	39.0	31.0	9.0	20kg	石英安山岩	奥羽山脈	写真のみ掲載	21-72
73 3号住居	②	石台	47.0	32.0	12.0	26kg	石英安山岩	奥羽山脈	写真のみ掲載	21-73

第19図 3号堅穴住居跡出土遺物⑤



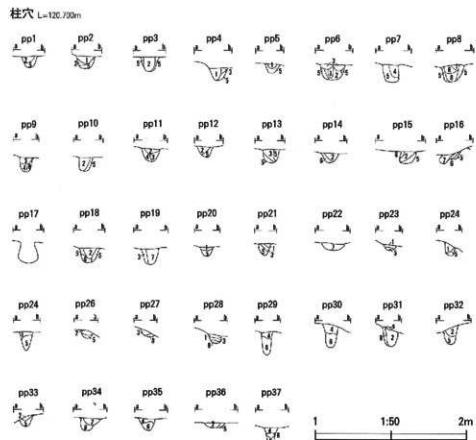
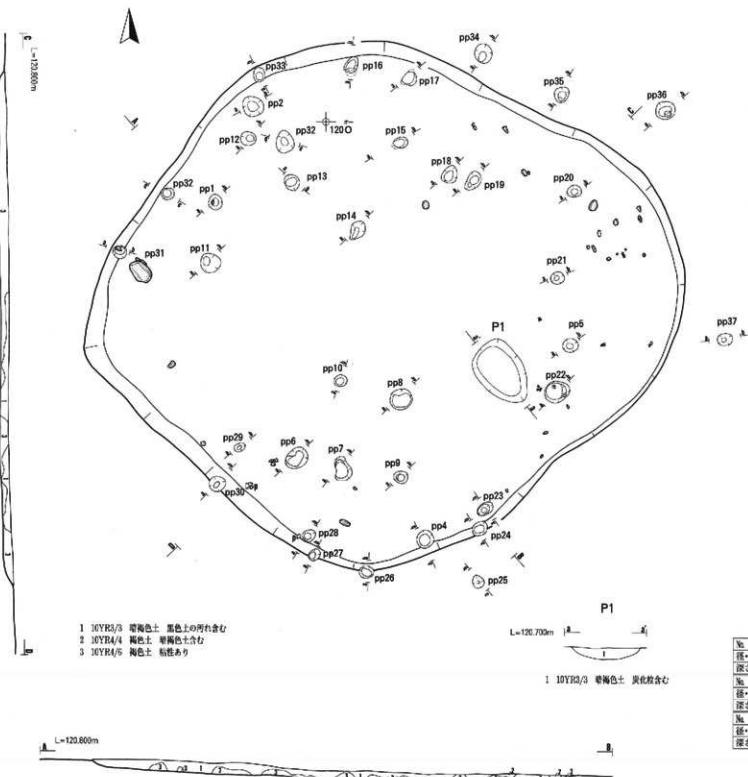
柱穴 L=120.000m



No.	pp1	pp2	pp3	pp4	pp5	pp6	pp7	pp8	pp9	pp10
幅・cm	30×18	21×22	25×34	16×13	29×27	31×36	25×20	30×29	15×12	28×26
深さ・cm	36.5	20.0	36.6	11.8	31.7	36.6	21.7	33.6	8.0	29.5

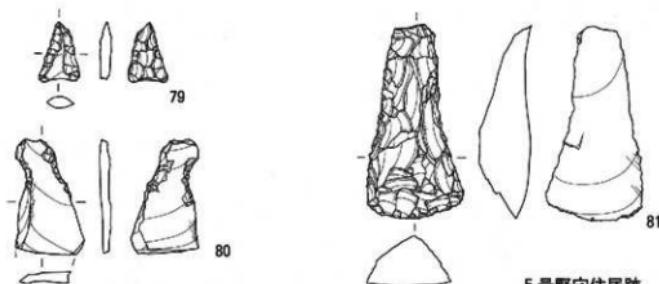
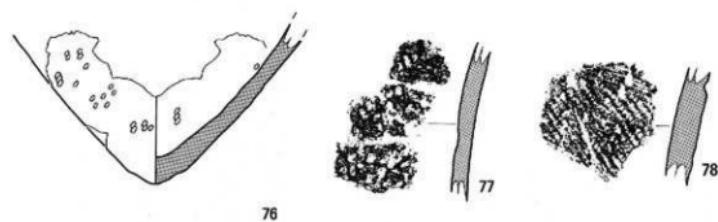
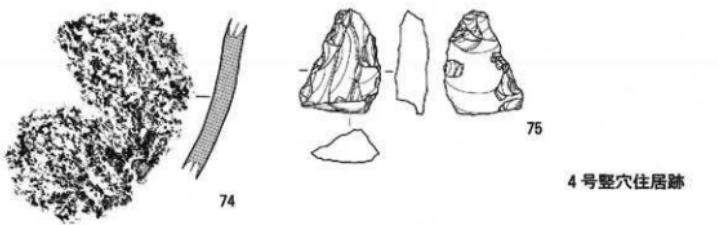
1 1:50 2m

第20図 4号竪穴住居跡



No.	pp1	pp2	pp3	pp4	pp5	pp6	pp7	pp8	pp9	pp10	pp11	pp12	pp13	pp14	pp15	pp16	
深さ・cm	27.5	27.5	27.5	30×24	25×22	21×19	26.5	33×18	30×29	19×16	18×15	28×21	21×19	33×19	38×26	18×15	34×18
底さ・cm	16.0	16.0	16.0	18.5	18.5	21.0	26.7	25.3	26.3	16.9	24.8	15.3	16.9	14.2	9.0	14.3	
No.	pp17	pp18	pp19	pp20	pp21	pp22	pp23	pp24	pp25	pp26	pp27	pp28	pp29	pp30	pp31	pp32	
深さ・cm	19×19	14×19	27×18	19×17	17×16	33×29	23×15	33×18	17×14	19×16	17×13	17×15	15×11	22×29	19×17	19×16	
底さ・cm	32.2	20.7	28.0	24.2	13.9	11.1	31.2	26.9	25.1	14.8	14.0	16.0	31.7	32.7	26.9	26.7	
No.	pp33	pp34	pp35	pp36	pp37												
深さ・cm	19×16	16×23	31×19	35×22	21×17												
底さ・cm	22.2	9.3	27.0	25.9	33.7												

第21図 5号整穴住居跡

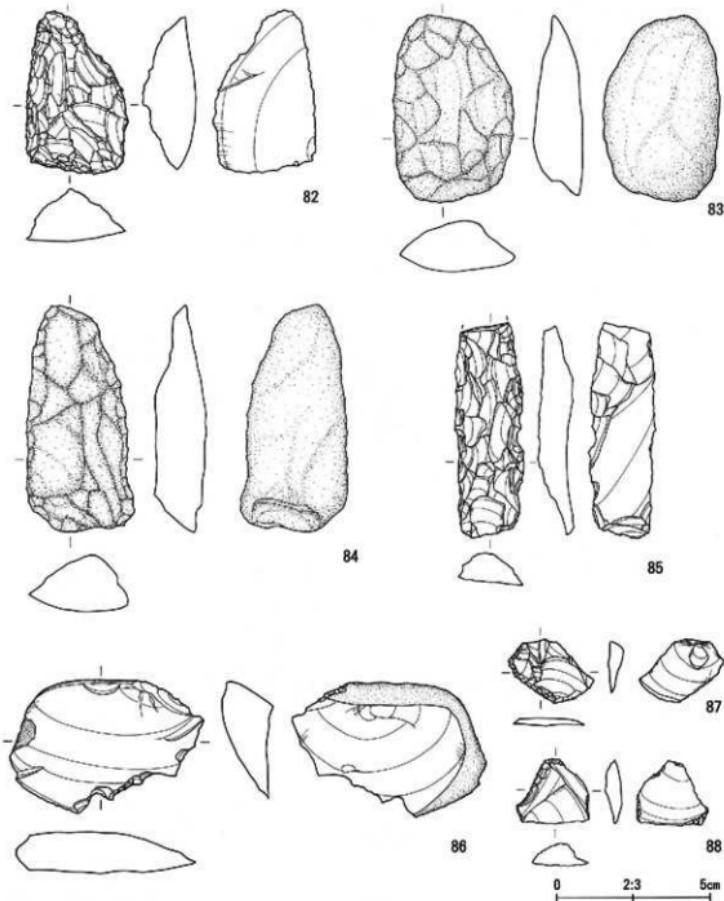


0 2.3 5cm 0 1.2 10cm  
(石器) (土器)

5号堅穴住居跡

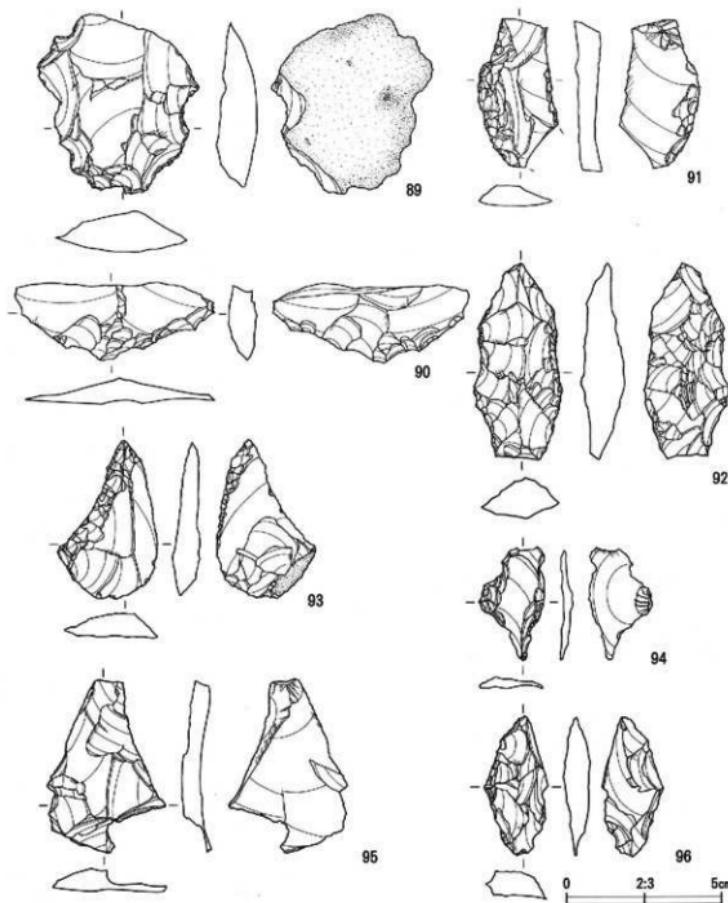
No.	出土地点	部位	器種	部位	文様ほか			縦縫	色調		分類	写真図版
					裏面	外面	内面		外	内		
74	4号住居 ①	深鉢	縫部	縫部	織文(表面:RL?) 粘土:砂粒含み細い	少量	青緑~灰青緑	にごり青緑	I	22-74		
75	4号住居Ⅱ層上	深鉢	縫部	縫部	織文(表面:RL) 内面:ナメ	微量	褐色	にごり褐色	II	22-75		
77	5号住居 21	深鉢	縫部	縫部	織文(表面:LR) 内面:ナメ 粘土:砂粒含みや粗	微量	明黄褐色	じぶん褐色	I	22-77		
78	5号住居Ⅱ層上	深鉢	縫部	縫部	織文(表面:LR) 内面:ナメ 粘土:砂粒含みや粗	合む	褐色	灰褐色	IV	22-78		
No.	出土地点	部位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	地	縫地	参考	写真図版
75	4号住居 ⑤	削様器	3.3	2.5	1.1	7.9	頁岩	奥羽山脈				22-75
79	5号住居 北	石鏟	1.8	1.2	0.4	0.8	頁岩	奥羽山脈				22-79
80	5号住居 墓土上部	石匙	(3.5)	2.1	0.4	3.1	頁岩	奥羽山脈	欠損			22-80
81	5号住居 ②	石鏟	6.1	3.0	1.6	20.5	頁岩	奥羽山脈				22-81

第22図 4・5号堅穴住居跡出土遺物①



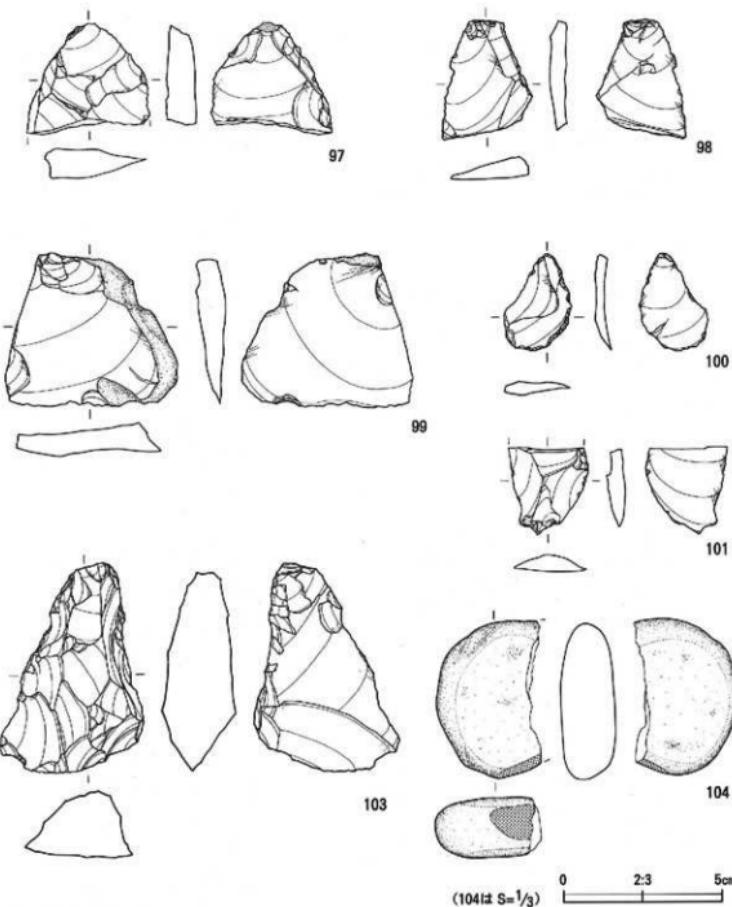
No.	出土地点	層位	名種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真番号
82	5号住居	⑤	石塊	5.2	3.3	1.7	20.9	頁岩	奥羽山脈		23-82
83	5号住居	③	石塊	6.1	3.7	1.6	42.3	ホルンフェルス	北上山地	表面摩滅著しい	23-83
84	5号住居	堆土上	石塊	7.3	3.6	1.9	50.6	ホルンフェルス	北上山地	表面摩滅著しい	23-84
85	5号住居	⑥	刮削器	(7.0)	2.2	1.1	15.7	頁岩	奥羽山脈	欠損	23-85
86	5号住居	⑥	刮削器	4.3	6.2	1.6	38.9	頁岩	奥羽山脈	ノッチ状加工あり	23-86
87	5号住居	⑦	刮削器	2.6	1.7	0.5	2.0	頁岩	奥羽山脈	一辺に繊かな刃部調整	23-87
88	5号住居	堆土下	刮削器	2.1	2.3	0.6	2.5	頁岩	奥羽山脈		23-88

第23図 5号室穴住居跡出土遺物②



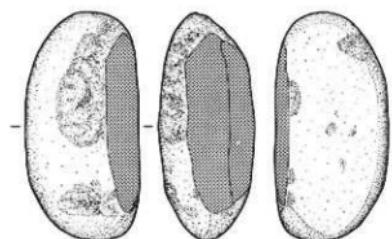
No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
89	5号住居	埋土下	削核器	5.8	5.2	1.3	37.7	頁岩	奥羽山脈	ノッチ状加工あり	23-29
90	5号住居	埋土上	削核器	2.6	6.4	0.9	11.3	頁岩	奥羽山脈		23-30
91	5号住居	埋土上部	削核器	4.7	2.4	0.7	9.2	頁岩	奥羽山脈	欠損	23-91
92	5号住居	埋土上部	削核器	6.3	2.7	1.2	19.9	頁岩	奥羽山脈	両面に深い剥離にて調整	23-22
93	5号住居	埋土下	削核器	5.1	3.2	10.8	10.8	頁岩	奥羽山脈	一辺から尖頭部に刃部調整	23-23
94	5号住居	等	剥片	3.6	2.0	2.1	2.4	頁岩	奥羽山脈	Rフレ	23-94
95	5号住居	等	剥片	5.4	3.8	9.2	9.2	頁岩	奥羽山脈	Rフレ	23-95
96	5号住居	埋土下	剥片	4.5	2.0	6.1	6.1	頁岩	奥羽山脈	Rフレ	23-96

第24図 5号堅穴住居跡出土遺物③

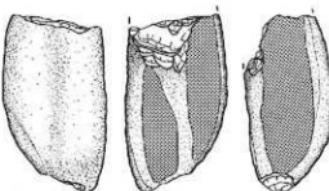


No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	参考	写真図版
97	5号住居	埋土下	測片	(3.5)	3.8	1.0	12.0	頁岩	奥羽山脈	Rフレ	24- 97
98	5号住居	①	測片	4.1	2.5	0.6	6.2	頁岩	奥羽山脈	Uフレ	24- 98
99	5号住居	③	測片	5.3	4.9	0.8	22.2	頁岩	奥羽山脈	Uフレ	24- 99
100	5号住居	埋土上部	測片	3.1	1.9	0.3	2.0	頁岩	奥羽山脈	Uフレ	24-100
101	5号住居	埋土上部	測片	(2.8)	2.5	0.6	3.4	頁岩	奥羽山脈	Uフレ	24-101
102	5号住居	P-1 埋土	チップ類	-	-	-	24.7	頁岩	奥羽山脈	写真のみ掲載	24-102
103	5号住居	床面	打削石片	6.6	4.6	2.2	51.5	頁岩	奥羽山脈	欠描	24-103
104	5号住居	埋土下	磨石	9.7	(6.0)	3.5	35.0	石英安山岩	奥羽山脈	欠描	24-104

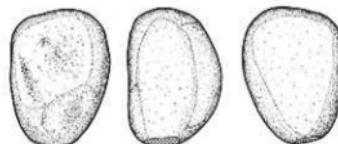
第25図 5号堅穴住居跡出土遺物④



105



106



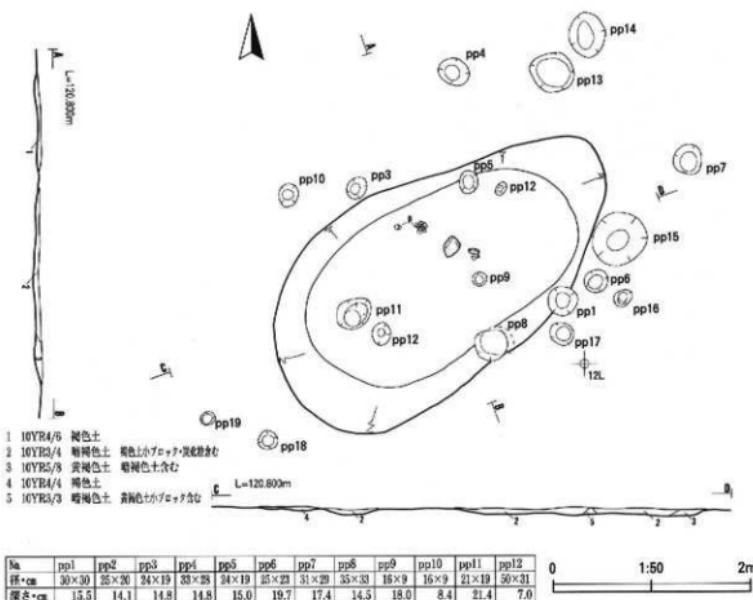
107



0 1:3 10cm

No.	出土地点	層位	石種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	产地	備考	写真図版
105	5号住居	⑧	磨石	14.2	6.1	5.0	710.0	石英斑岩	奥羽山脈	洗成による表面破損	24-105
106	5号住居	埋土下	磨石	(11.0)	6.3	5.6	510.0	綠色麻灰岩	奥羽山脈	欠損	24-106
107	5号住居	⑦	磨石	12.7	9.4	8.5	1490.0	石英安山岩	奥羽山脈		24-107

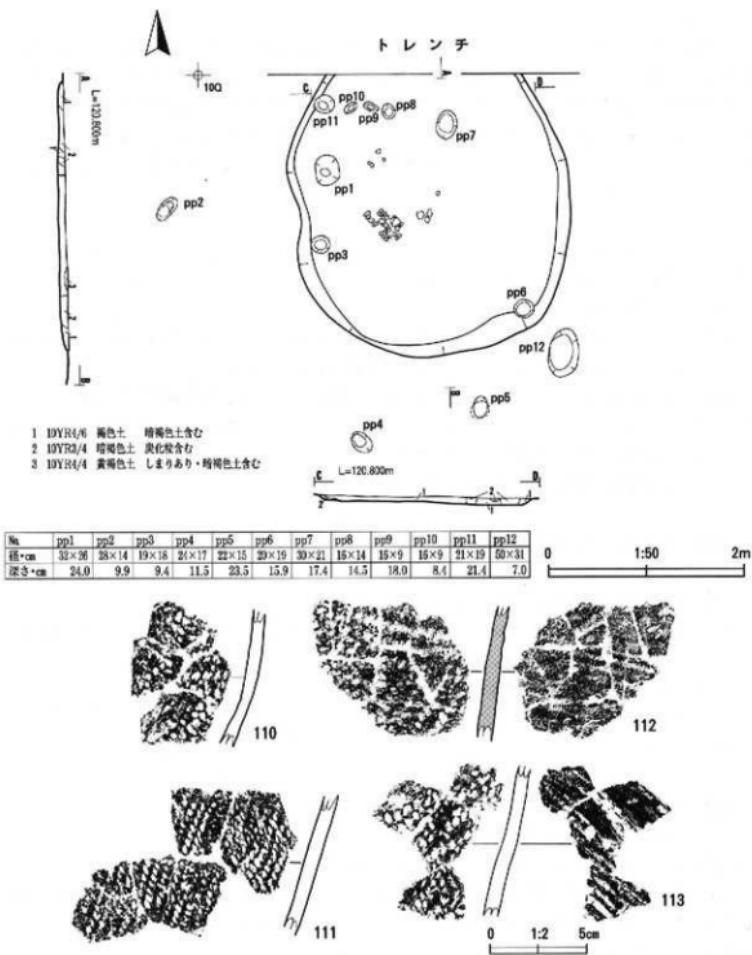
第26図 5号整穴住居跡出土遺物⑤



0 1.2 5cm

No.	出土地点	層位	基盤	部位	文様ほか	色調			写真図版
						縦維	外面	内面	
108	6号住居	床面一括	深鉢	脚部	轍文(外面: RL?) 内面: ナデ	胎土: 彩粒含む	微量	こいき青色、灰黄褐色	I 25-108
109	6号住居	床面一括	深鉢	前一部	轍文(外面: LR) 内面: ナデ	胎土: 粒粒含らやや重い	少量	黄褐色、黄褐色	II 25-109

第27図 6号整穴住跡・出土遺物



No.	出土地点	部位	器種	部位	文様はか	縦横	色調		分類	写真図版
							外面	内面		
110	7号住居	床面一部	深体	脚部	幾文(外面:LR) 内面:ナメ 粘土:砂粒含む	なし	灰褐色	灰黃褐色	I	25-110
111	7号住居	床面一部	深体	脚部	幾文(外面:LR) 外観:物質名 内面:ナメ 粘土:砂粒含み粗い	なし	灰褐色	灰褐色	I	25-111
112	7号住居	床面一部	深体	脚部	幾文(外面:LR) 内面:目隠条筋 粘土:砂粒含み粗い	含む	明黄褐色	灰褐色	III	25-112
113	7号住居	床面一部	深体	脚部	幾文(外面:LR) 黄褐色浮き 内面:目隠条筋 粘土:砂粒含み粗い	なし	灰黃褐色	灰黃褐色	III	25-113

第28図 7号竪穴住居・出土遺物

## (2) 土坑

土坑は14基を登録した。分布域は調査区南半部に集中し、住居の分布域と重なる。住居跡との重複は見られず、住居跡の周辺に点在するような在り方を呈する。土坑の平面形は不整形のものが多く、深さも46~10cmと浅い。深さについては1層の搅乱が激しい為上部を剥ぎ取られている部分もあると思われる。時期としては出土遺物より縄文時代と考えられ、7号土坑からは尖底部の破片が出上している。3・6・7・9・10・12・13・14号土坑内には小ピットが検出されたが、いずれも深さは5cm以内と浅いものである為、副穴と断定するにいたらなかった。

### 1号土坑（第29図、写真図版9）

<位置> 12H区、2号住居の西側約2mに位置する。

<検出状況> 表土除去後Ⅲ層上面で検出された。

<形状・規模> 開口部径103×101cm・底部径106×100cm・深さ45cmで、平面形は不整円形、断面形はビーカー状を呈する。底面は平坦で、壁は開口部よりやや外反気味に立ちあがる。

<埋土> 暗褐色土と褐色土を主体とする5層からなる。暗褐色土には微量に炭化物が含まれる。

<出土遺物> 褐色土中より磨耗の著しい土器片が数点出土した。114は繊維を含み胎土は砂粒を混入し粗い。外面にLR縄文を施し、内面はナデ調整されている。（第31図、写真図版26）

<時期> 出土遺物より縄文時代のものと思われる。

### 2号土坑（第29図、写真図版9）

<位置> 13N区北西側に位置する。

<検出状況> 表土除去後Ⅲ層上面で検出された。

<形状・規模> 開口部径105×100cm・底部径55×60cm・深さ26cmで、平面形は不整円形、断面形は皿形を呈する。底面はゆるやかに傾斜し立ちあがる。

<埋土> 黒褐色土と暗褐色土を主体とする3層からなる。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 時期不明。

### 3号土坑（第29図、写真図版9）

<位置> 13M区の北東側に位置する。

<検出状況> 表土除去後Ⅲ層上面で4号土坑に切られた状態で検出した。

<形状・規模> 開口部径(80)×88cm・底部径53×65cm・深さ30cm、平面形は不整円形、断面形は皿形を呈する。底面は浅い凹凸があり、壁はゆるやかに立ちあがってゆく。

<埋土> 暗褐色土と褐色土を主体とする。

<出土遺物> 埋土底部より細かく碎けた土器片と石器が出土した。115・116は上部が欠損している削搔器である。117は刃部が欠損している打製石斧である。118は左側刃に2面磨面をもつ磨石である。（第31図、写真図版26）

<時期> 出土遺物より縄文時代のものと思われる。

#### 4号土坑（第29図、写真図版9）

＜位置＞13M区の北東側に位置する。

＜検出状況＞表土除去後Ⅲ層上面で3号土坑を切った状態で検出した。

＜形状・規模＞開口部径(83)×46cm・底部径(64)×36cm・深さ17cm、平面形はだるま形、断面形は皿形を呈する。底面部は平坦でゆるやかに立ちあがってゆく。

＜埋土＞暗褐色土の单層で上面に黄褐色土ブロックが含まれている。

＜出土遺物＞出土していない。

＜時期＞時期不明。

#### 5号土坑（第29図、写真図版9）

＜位置＞12J・12K区の北側にかけて位置する。

＜検出状況＞表土除去後Ⅲ層上面で検出された。

＜形状・規模＞開口部径115×114cm・底部径102×57cm・深さ32cm、平面形は不整円形、断面形は皿形を呈する。底面は平坦で西側にゆるやかに立ちあがり、東側は外傾する。

＜埋土＞上層は暗褐色土、下層は褐色土を主体とする5層からなる。

＜出土遺物＞埋土底部より細かく碎けた土器片が出土した。119は織維を含み外面はLR繩文？、内面はナデ調整されている。内面に一部炭化物の付着がみられる。120は無茎の石錐である。（第31図、写真図版26）

＜時期＞出土遺物より縄文時代のものと思われる。

#### 6号土坑（第29図、写真図版10）

＜位置＞11L区の南西側に位置する。

＜検出状況＞表土除去後Ⅲ層上面で検出された。

＜形状・規模＞開口部径128×111cm・底部径67×63cm・深さ46cm、平面形は不整円形、断面形は皿形を呈する。底面は平坦で壁はゆるやかに外傾する。西側と南東側壁面に土坑中央部に向かって斜めに掘られた副穴が2基検出された。

＜埋土＞黄褐色土と暗褐色土を主体とする7層からなる。中層・下層に褐色土と黒色土をブロック状に含む埋土がある。

＜出土遺物＞出土していない。

＜時期＞時期不明。

#### 7号土坑（第30図、写真図版10）

＜位置＞13L・14M区の南側にかけて位置する。

＜検出状況＞表土除去後Ⅲ層上面で検出された。

＜形状・規模＞開口部径242×188cm・底部径224×159cm・深さ22cm、平面形は不整円形、断面形は皿形を呈する。底面はゆるやかに傾斜して立ちあがってゆく。

＜埋土＞暗褐色土と褐色土の2層からなる。

＜出土遺物＞土坑北側中層より土器片が出土した。121は尖底部の破片である。明黄褐色から灰褐色を呈し、胎土には織維の混入は見られない。外面に僅かにRL繩文？が施され、内面はナデ調整されている。123・

124は他の土器片に比べ砂粒が少なく内面は黄橙色、外面はにぶい黄橙色と色調も似ており、同一個体と思われる。125～127は胎土に砂粒が含まれる。128は磨石である。(第32図、写真図版26)

<時期> 出土遺物より縄文時代早期末葉から前期前葉のものと思われる。

#### 8号土坑(第30図、写真図版10)

<位置> 10I区の北東側に位置する。

<検出状況> 表土除去後Ⅲ層上面で検出された。

<形状・規模> 開口部径59×56cm・底部径53×50cm・深さ34cm、平面形は不整円形、断面形はビーカー形を呈する。底面はほぼ平坦で壁は直立する。

<埋土> 暗褐色土と褐色土を主体とする5層からなる。

<出土遺物> 埋土中より細かく破碎した縄文土器が出土した。

<時期> 出土遺物より縄文時代のものと思われる。

#### 9号土坑(第30図、写真図版10)

<位置> 6H・6I区にかけて位置する。

<検出状況> 表土除去後Ⅲ層上面で検出された。

<形状・規模> 開口部径84×80cm・底部径85×45cm・深さ40cm、平面形は不整梢円形、断面形は皿形を呈する。底面は凹凸があり壁は外傾する。

<埋土> 上層は暗褐色土、下層は褐色土を主体とする4層からなる。上面に黄褐色土ブロックを含む。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 時期不明。

#### 10号土坑(第30図、写真図版11)

<位置> 16K区の北西側に位置する。

<検出状況> 表土除去後Ⅲ層上面で検出された。

<形状・規模> 開口部径60×57cm・底部径28×20cm・深さ19cm、平面形は円形、断面形は皿形を呈する。底面は平坦でゆるやかにたちあがる。底面部北西側の隅に9×7cm・深さ5cmの副穴?が1基検出された。

<埋土> 暗褐色土と褐色土を主体とする4層からなる。上面に木根痕が入ってくる。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 時期不明。

#### 11号土坑(第30図、写真図版11)

<位置> 14K・15K区の西側に位置する。

<検出状況> 表土除去後Ⅲ層上面で検出された。

<形状・規模> 開口部径66×62cm・底部径80×67cm・深さ21cm、平面形は圓丸方形、断面形はフランコ形を呈する。底面は平坦で壁は内傾する。

<埋土> 暗褐色土と褐色土の2層からなる。褐色土には微量であるが炭化粒が含まれる。

<出上遺物> 129 は繊維が混入し外面に L R 繩文、内面はナデられている。胎土は非常にろく磨耗が著しい。130 も同様に磨耗が著しい土器片である。繊維の混入は見られなかった。131 は基部が欠損している石器である。(第 32 図、写真図版 26)

<時期> 出土遺物より縄文時代前期前葉のものと思われる。

#### 12号土坑（第 30 図、写真図版 11）

<位置> 14G 区の南東側に位置する。

<検出状況> 表土除去後Ⅲ層上面で検出された。

<形状・規模> 開口部径 99×67cm・底部径 84×40cm・深さ 18cm、平面形はだるま形、断面形は皿形を呈する。底面はほぼ平坦で壁は北西側が一部内傾するが、その他は外傾してたちあがる。

<埋土> 暗褐色土を含む褐色土を主体とする。下層に褐灰土ブロック含む。

<出土遺物> 埋土下階より細かく碎けた土器片が出土した。

<時期> 出土遺物より縄文時代のものと思われる。

#### 13号土坑（第 30 図、写真図版 11）

<位置> 14L 区の南東側に位置する。

<検出状況> 表土除去後Ⅲ層上面で 14 号土坑を切った状態で検出された。

<形状・規模> 開口部径 82×77cm・底部径 57×59cm・深さ 15cm、平面形は楕円形、断面形は皿形を呈する。底面はほぼ平坦でゆるやかに立ちあがる。底面の隅と壁面に 3 基副穴を検出した。

<埋土> 炭化粒を含む暗褐色土の単層である。

<出土遺物> 底面より土器片が出土した。132 は胎土が粗く磨耗が著しい。繊維は少量ではあるが含まれ、外面に R L と思われる縄文が見られる。(第 32 図、写真図版 26)

<時期> 出土遺物より縄文時代前期前葉のものと思われる。

#### 14号土坑（第 30 図、写真図版 11）

<位置> 14L・15L 区の東側に位置する。

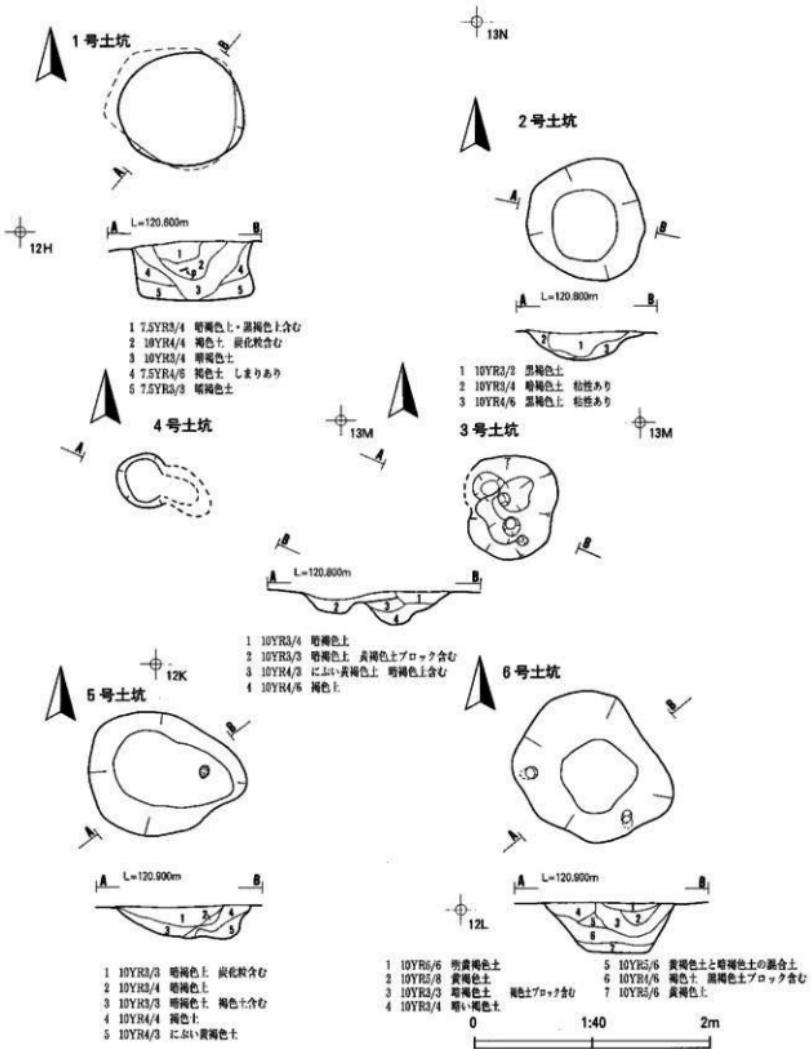
<検出状況> 表土除去後Ⅲ層上面で 13 号土坑に切られた状態で検出された。

<形状・規模> 開口部径 138×73cm・底部径 133×50cm・深さ 10cm、平面形は不整長楕円形、断面形は皿形を呈する。底面はほぼ平坦でゆるやかに外傾する。底面の隅と壁の立ち上がり部分に 4 基副穴? を検出した。

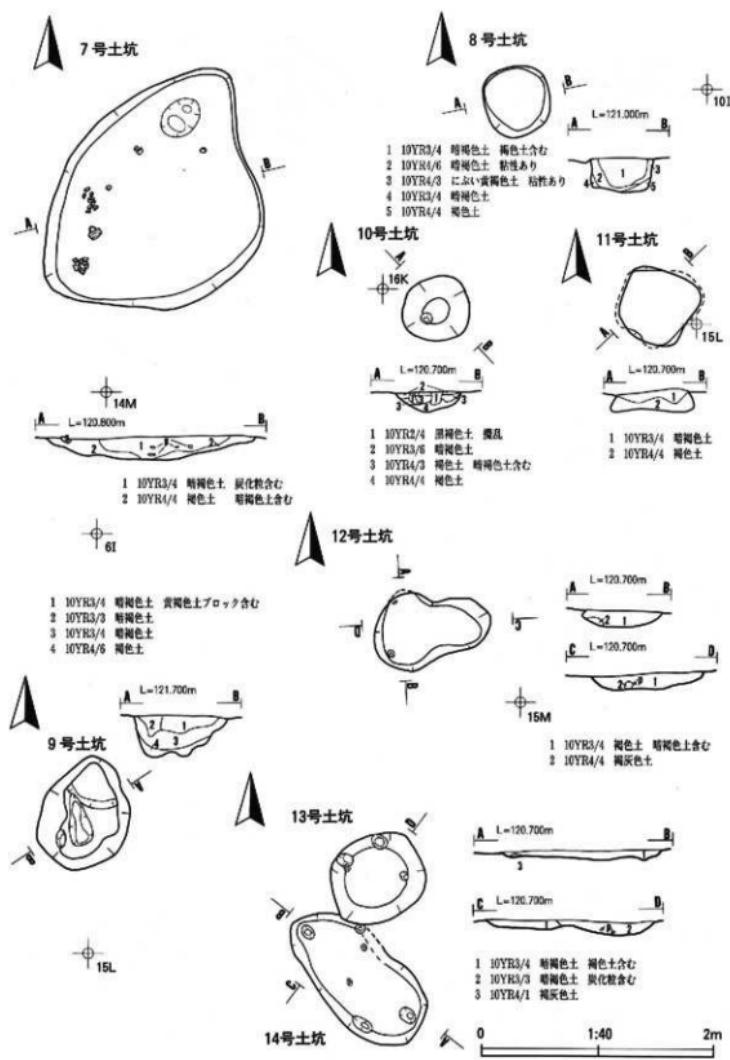
<埋土> 暗褐色土を主体とする。下層に褐灰土ブロックを含む。

<出土遺物> 底面より磨耗が著しい土器の細片が出土した。133 は 0 段多条の R L 縄文が施される。胎土は砂粒を含み密であり、繊維の混入はみられなかった。(第 32 図、写真図版 26)

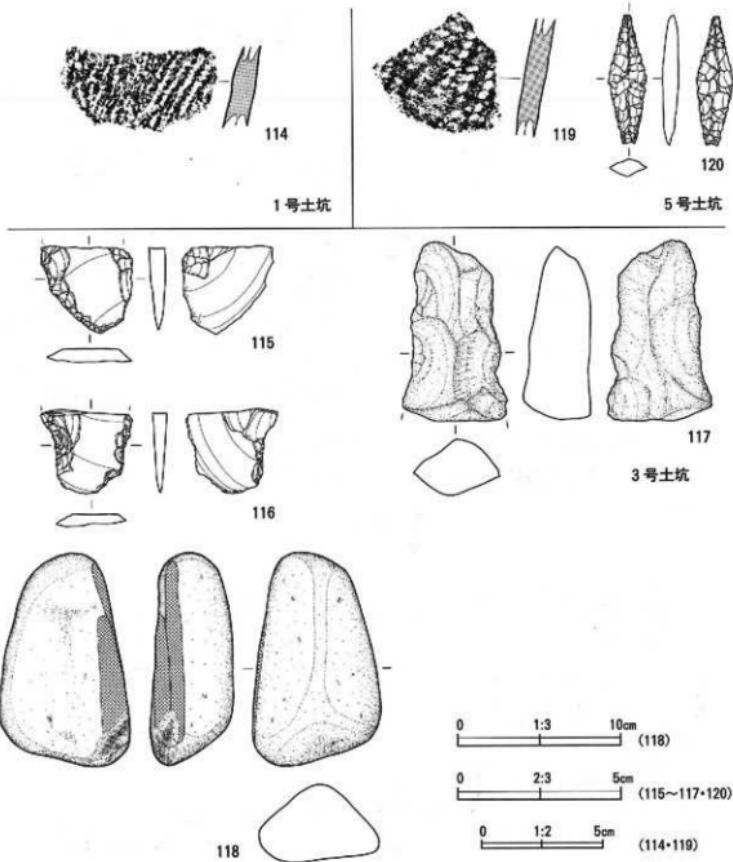
<時期> 出土遺物より縄文時代のものと思われる。



第29図 1~6号土坑

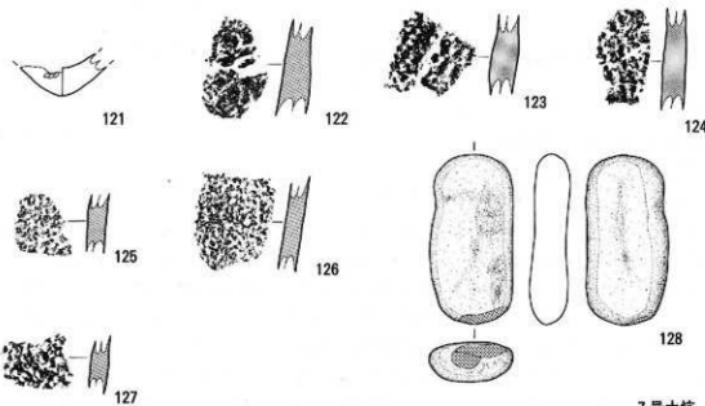


第30図 7~14号土坑

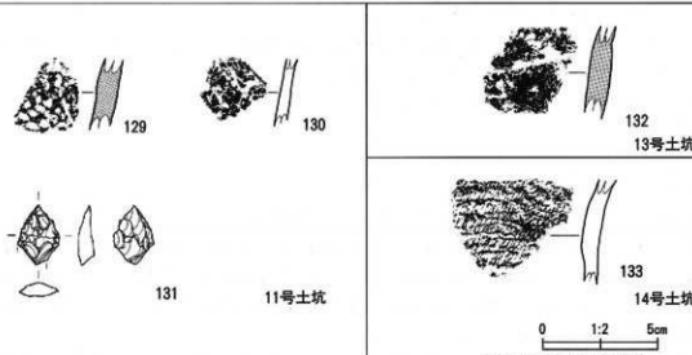


No.	出土地点	層位	器種	部位	文様はか			縫合	色調		分類	写真図版
					縫合	外面	内面		明褐色-褐色	褐色		
114 1号土坑	埋土上部	深鉢	網形	縄文(外面:LR) 内面:ナメ		含む				I	26-114	
119 5号土坑	埋土	網形	縄文(外面:該付)	内面:波状物付		少量	褐色			I	26-119	
No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	产地	備考	写真図版	
115 3号土坑	北側埋土	削刮器	(2.6)	2.8	0.5	3.3	頁岩	奥羽山脈	欠損		26-115	
116 3号土坑	南側埋土	削刮器	(3.2)	2.7	0.5	3.8	頁岩	奥羽山脈	欠損		26-116	
117 3号土坑	南側埋土	打製石斧	(5.5)	3.3	2.1	32.6	ホルンフェルス	北山脈	欠損、表面研磨著しい		26-117	
118 3号土坑	埋土	磨石	13.2	8.0	4.8	630.0	砂岩	奥羽山脈			26-118	
120 3号土坑	埋土	石核	4.0	1.2	0.5	1.5	頁岩	奥羽山脈			26-120	

第31図 1・3・5号土坑出土遺物



7号土坑



(128はS=1/3 131はS=2/3)

No.	出土地点	部位	器種	部位	文様はか		機能	色調		分類	写真図版
					内面	外面		外面	内面		
121	7号土坑 埋土一括	深鉢	胸部	内面・外面	ナデ		なし	明黄褐色	褐灰色	I	26-121
122	7号土坑 南側埋土一括	深鉢	胸部	内面・外面	ナデ		含む	褐色	上部青褐色	I	26-122
123	7号土坑 南側埋土一括	深鉢	胸部	内面・外面:RL?	ナデ	監土: 番数少ない 外面: 製造者しい	少量	黄褐色	上部青褐色	I	26-123
124	7号土坑 南側埋土一括	深鉢	胸部	内面: 製造者しい・外面:ナデ	監土: 番数少ない 且と同一箇所		少量	黄褐色	上部青褐色	I	26-124
125	7号土坑 北側埋土一括	深鉢	胸部	内面: RL?	ナデ	監土: やや粗	少量	褐色	所産褐色	I	26-125
126	7号土坑 北側埋土一括	深鉢	胸部	内面: RL?	ナデ	監土: やや粗	含む	明黄褐色	灰黃褐色	I	26-126
127	7号土坑 北側埋土一括	深鉢	胸部	内面: RL?	ナデ	監土: 番数少ない	少量	褐色	明黃褐色	I	26-127
128	11号土坑 埋土一括	深鉢	胸部	内面: RL	ナデ	監土: 番数少ない	少量	武松色	上部青褐色	I	26-128
130	11号土坑 埋土	深鉢	胸部	内外面磨耗著しい			なし	褐色	褐色	I	26-130
132	13号土坑 埋土	深鉢	胸部	内面: RL?	ナデ	磨耗著しい 監土: 粗い	少量	褐色	褐色	I	26-132
133	14号土坑 埋土	深鉢	胸部	内面: RL?	ナデ	磨耗著しい 監土: 粗い	なし	明黄褐色	褐灰色	V	26-133
No.	出土地点	部位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	病害	備考	写真図版
128	11号土坑 埋土	磨石		11.1	5.5	2.6	235.0	石英安山岩	異形山脈		26-129
131	11号土坑 埋土下	石錐		(1.9)	1.4	0.5	0.9	燧灰岩	圓錐山脈	基部欠損	26-131

第32図 7・11・13・14号土坑出土遺物

### (3) 陥し穴

11基検出した。時期を決定する遺物の出土はなかったが、1~3号陥し穴の埋土上層には「和田中擴浮石」が含まれている。

#### 1号陥し穴（第33図、写真図版12）

＜位置＞ 15J区の北側に位置する。

＜検出状況＞ 表土除去後Ⅲ層上面で黒色土の広がりにより確認した。

＜形状・規模＞ 規模は開口部径 267×205cm・底部径 195×106cm・深さ 175cm、平面形は梢円形で長軸方向は北西—南東である。短軸の断面形は底部から80cm位まではほぼ垂直に立ち上がり、その後ゆるやかに外傾するビーカー形である。長軸の断面形は開口部が僅かに広がる逆台形状を呈している。底部には深さ18~10cmの副穴が8基見られる。配置はほぼ4隅によるもの7基、中心に1基である。逆木痕を確認できたレベルは底部より110cm上部である。（写真図版12参照）

＜埋土＞ 17層からなりレンズ状の自然堆積を呈する。全体的に粘性のある埋土で、上位は十和田中擴浮石の層を含む暗褐色土・黄褐色土を主体とし、中～下位は褐色・黄褐色土が主体で下位には炭化粒を含む層もある。底部まで掘り下げるとき水が湧いてくる。

＜出土遺物＞ 埋土上より削器1点と、調整痕のある剥片が1点出土した。出土層からみて埋土の堆積の際に入りこんだものと思われる。（第36図、写真図版27）

＜時期＞ 堆積層からみて縄文時代のものと思われる。

#### 2号陥し穴（第33図、写真図版12）

＜位置＞ 14L区の北西側に位置する。

＜検出状況＞ 表土除去後Ⅲ層上面で黒色土の広がりにより確認した。

＜形状・規模＞ 規模は開口部径 285×200cm・底部径 195×80cm・深さ 176cm、平面形は梢円形で長軸方向は北西—南東である。短軸の断面形は底部から95cm位まではほぼ垂直に立ち上がり、その後ゆるやかに外傾するビーカー形である。長軸の断面形は開口部が僅かに広がる逆台形状を呈している。底部はほぼ平坦で副穴と思われる柱穴痕はみられなかった。

＜埋土＞ 15層からなりレンズ状の自然堆積を呈する。全体的に粘性のある埋土で、上位は十和田中擴浮石の層を含む暗褐色土・黄褐色土を主体とし、中～下位は褐色・黄褐色土が主体である。底面付近は湧き水が著しい。

＜出土遺物＞ 埋土上～中位より片面加工の石鏃が2点出土した。1点は基部が欠損している。出土層からみて埋土の堆積の際に入りこんだものと思われる。（第36図、写真図版27）

＜時期＞ 堆積層からみて縄文時代のものと思われる。

#### 3号陥し穴（第33図、写真図版12）

＜位置＞ 16H区の南東側に位置する。

＜検出状況＞ 表土除去後Ⅲ層上面で黒色土の広がりにより確認した。

＜形状・規模＞ 規模は開口部径 310×160cm・底部径 178×76cm・深さ 190cm、平面形は長梢円形で長軸方向は北西—南東である。短軸の断面形は底部から90cm位まではほぼ垂直に立ち上がり、その後ゆるやか

に外傾するビーカー形である。長軸の断面形は開口部の北側が強く外傾する不整逆台形状を呈している。底部には深さ 30~15cm の副穴が 5 基みられる。配置はほぼ四隅によっている。上面からの逆木の確認はできなかった。

＜埋土上＞ 12 層からなりレンズ状の自然堆積を呈する。全体的に粘性のある埋土で、上位は十和田中漂浮石の層を含む暗褐色土・黄褐色土を主体とし、中～下位は褐色・黄褐色土が主体である。底部まで掘り下げると水が湧いてくる。

＜出土遺物＞ 埋土上～中位より欠損した石器・削器が 5 点出土した。出土層位からみて、埋土の堆積の際に入り込んだものと思われる。(第 36 図、写真図版 27)

＜時期＞ 検出面、堆積層からみて縄文時代のものと思われる。

#### 4 号陥し穴 (第 34 図、写真図版 13)

＜位置＞ 12 J 区の北側に位置する。

＜検出状況＞ 表土除去後Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりにより確認した。

＜形状・規模＞ 規模は開口部径 293×50cm・底部径 292×10cm・深さ 100cm、平面形は溝形を呈し長軸方向は東～西である。短軸の断面形は底部から 65cm 位まで立ち上がり、開口部に向かって外傾する Y 字形である。長軸の断面形は両端底部が内傾するフ拉斯コ型を呈し、底部は東側に傾斜気味であるがほぼ平坦である。両端での高低差は約 12cm である。

＜埋土上＞ 黄褐色土・暗褐色土を含む 5 層からなる。上層はレンズ状に堆積し、自然堆積の様相を呈する。

＜出土遺物＞ 出土していない。

＜時期＞ 縄文時代のものと思われる。

#### 5 号陥し穴 (第 34 図、写真図版 13)

＜位置＞ 9 F 区の北西側に位置する。

＜検出状況＞ 表土除去後Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりにより確認した。

＜形状・規模＞ 規模は開口部径 293×50cm・底部径 292×10cm・深さ 100cm、平面形は溝形を呈し長軸方向は東～西である。短軸の断面形は底部から 80cm 位まではほぼ垂直に立ち上がり、その後開口部に向かって外傾する Y 字形である。長軸の断面形は西側底部が内傾する不整台形型を呈し、底部は東側に傾斜気味であるがほぼ平坦である。両端での高低差は約 10cm である。

＜埋土上＞ 黄褐色土・黒褐色土を主体とする 5 層からなる。上層はレンズ状に堆積し、自然堆積の様相を呈する。

＜出土遺物＞ 出土していない。

＜時期＞ 縄文時代のものと思われる。

#### 6 号陥し穴 (第 34 図、写真図版 13)

＜位置＞ 10 H・10 I 区の南側に位置する。

＜検出状況＞ 表土除去後Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりにより確認した。

＜形状・規模＞ 規模は開口部径 265×70cm・底部径 290×20cm・深さ 113cm、平面形は溝形を呈し長軸方向は東～西である。短軸の断面形は底部から 80cm 位まではほぼ垂直に立ち上がり、その後開口部に向かっ

て外傾するY字形である。長軸の断面形は底部の両端が内傾する不整フラスコ形を呈している。底部はほぼ平坦で、東側に深さ19cmの小ピットが1基ある。

<埋土> 暗褐色土、褐色土等9層からなる。上層はレンズ状に堆積し、自然堆積の様相を呈する。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 繩文時代のものと思われる。

#### 7号陥し穴（第34図、写真図版13）

<位置> 9H・9I区の南側に位置する。

<検出状況> 表土除去後Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりにより確認した。

<形状・規模> 規模は開口部径265×75cm・底部径250×18cm・深さ97cm、平面形は溝形を呈し長軸方向はほぼ東一西である。短軸の断面形は底部から50cm位まではほぼ垂直に立ち上がり、その後開口部に向かって外傾するY字形である。長軸の断面形は西側底部が内傾する不整台形を呈し、底部は中央部が僅かに低くなるがほぼ平坦である。両端での高低差は約10cmである。

<埋土> 暗褐色土、褐色土を主体とする5層からなる。上層はレンズ状に堆積し、自然堆積の様相を呈する。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 繩文時代のものと思われる。

#### 8号陥し穴（第35図、写真図版13）

<位置> 3H区の南側に位置する。

<検出状況> 表土除去後Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりにより確認した。

<形状・規模> 規模は開口部径265×60cm・底部径270×16cm・深さ92cm、平面形は溝形を呈し長軸方向はほぼ東一西である。短軸の断面形は底部から60cm位まではほぼ垂直に立ち上がり、その後開口部に向かって外傾するY字形である。長軸の断面形は底部の両端が内傾するフラスコ形を呈し、底部は東側に傾斜気味であるがほぼ平坦である。両端での高低差は約10cmである。

<埋土> 暗褐色土、褐色土を主体とする7層からなる。上層はレンズ状に堆積し、自然堆積の様相を呈する。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 繩文時代のものと思われる。

#### 9号陥し穴（第35図、写真図版14）

<位置> 8H・8I区の南側に位置する。

<検出状況> 表土除去後Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりにより確認した。

<形状・規模> 規模は開口部径285×63cm・底部径300×25cm・深さ107cm、平面形は溝形を呈し長軸方向はほぼ東一西である。短軸の断面形は底部から50cm位まではほぼ垂直に立ち上がり、その後開口部に向かって外傾するY字形である。長軸の断面形は底部の両端が強く内傾する不整フラスコ形を呈し、底部は東側に傾斜気味であるがほぼ平坦である。両端での高低差は約10cmである。

<埋土> 上位は暗褐色土、中位は褐色土、下位は黄褐色土を主体とする10層からなる。上層はレンズ状

に堆積し、自然堆積の様相を呈する。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 繩文時代のものと思われる。

#### 10号陥し穴（第35図、写真図版14）

<位置> 5K区の南側に位置する。

<検出状況> 表土除去後Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりにより確認した。

<形状・規模> 規模は開口部径 295×63cm・底部径 325×30cm・深さ 100cm、平面形は溝形を呈し長軸方向はほぼ東一西である。短軸の断面形は底部から 70cm 位までほぼ垂直に立ち上がり、その後開口部に向かって外傾するY字形である。長軸の断面形は底部の両端が強く内傾する不整フラスコ形を呈する。底部は中央部が低くなっている、両端と中央部の高低差は約 20～25cm である。

<埋土> 上位は暗褐色土、中位は褐色土、下位は黄褐色土を主体とする 10 層からなる。上層はレンズ状に堆積し、自然堆積の様相を呈する。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 繩文時代のものと思われる。

#### 11号陥し穴（第35図、写真図版14）

<位置> 3I区の南東側に位置する。

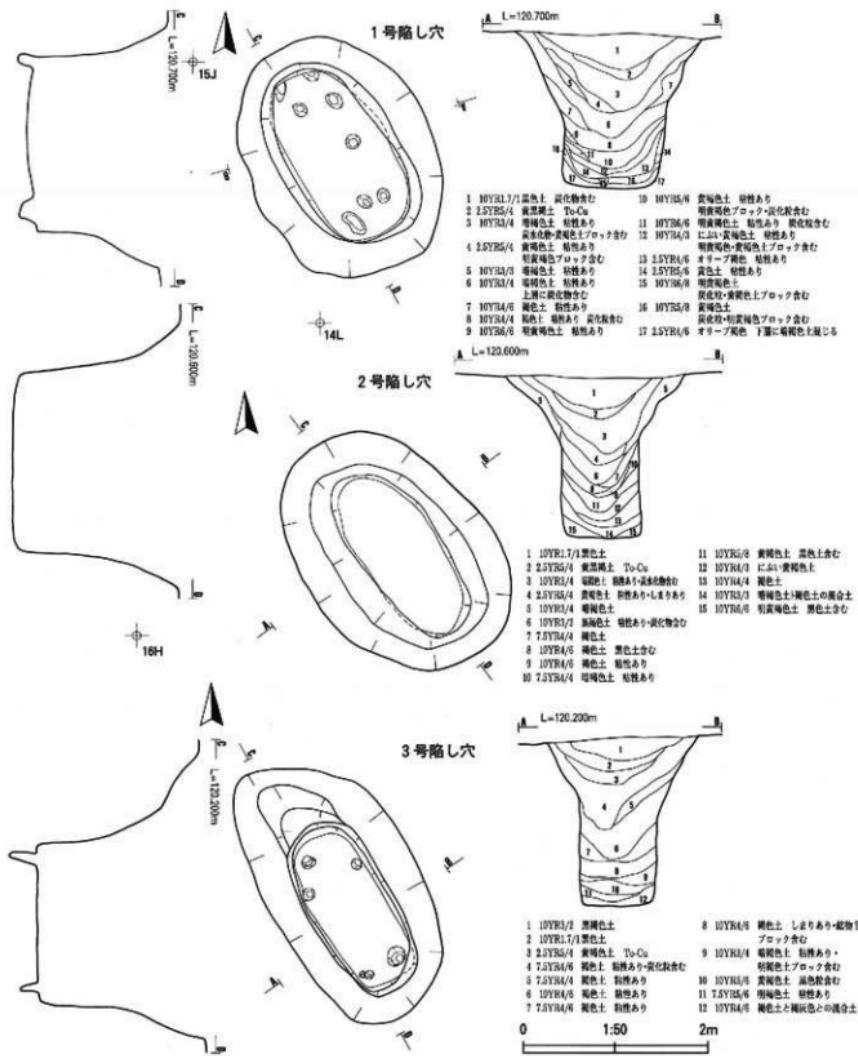
<検出状況> 表土除去後Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりにより確認した。

<形状・規模> 規模は開口部径 340×90cm・底部径 335×27cm・深さ 105cm を測る。平面形は溝形を呈し長軸方向はほぼ東一西である。短軸の断面形は底部から 50cm 位までほぼ平行に立ち上がり、その後開口部に向かって外傾するY字形である。長軸の断面形は東側の底部が強く内傾する不整平行四辺形を呈する。底部は中央部が低くなっている、両端と中央部の高低差は約 14cm である。

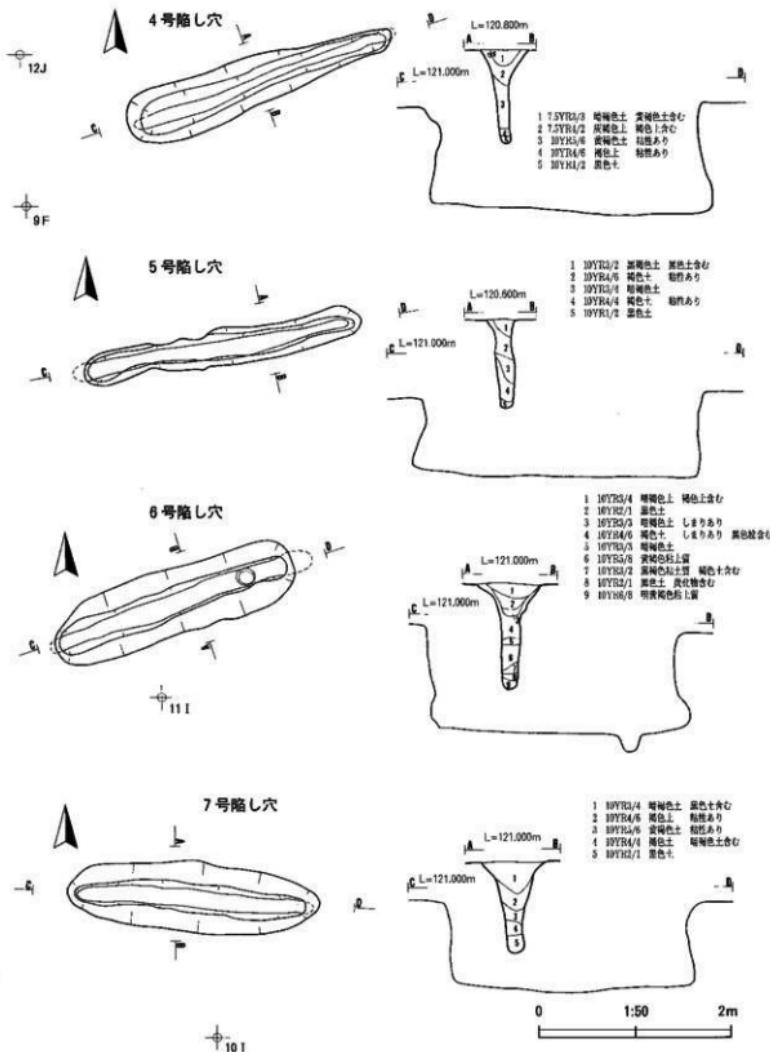
<埋土> 上位は暗褐色土、下位は黄褐色土を主体とする 8 層からなる。上層はレンズ状に堆積し、自然堆積の様相を呈する。

<出土遺物> 出土していない。

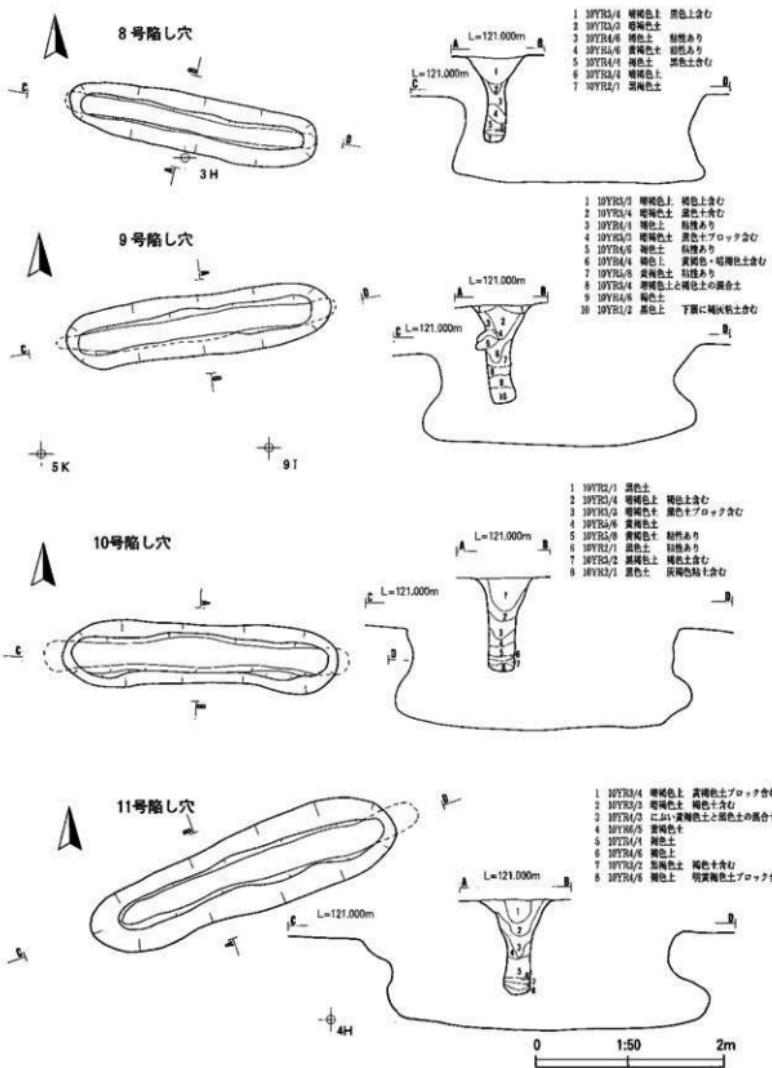
<時期> 繩文時代のものと思われる。



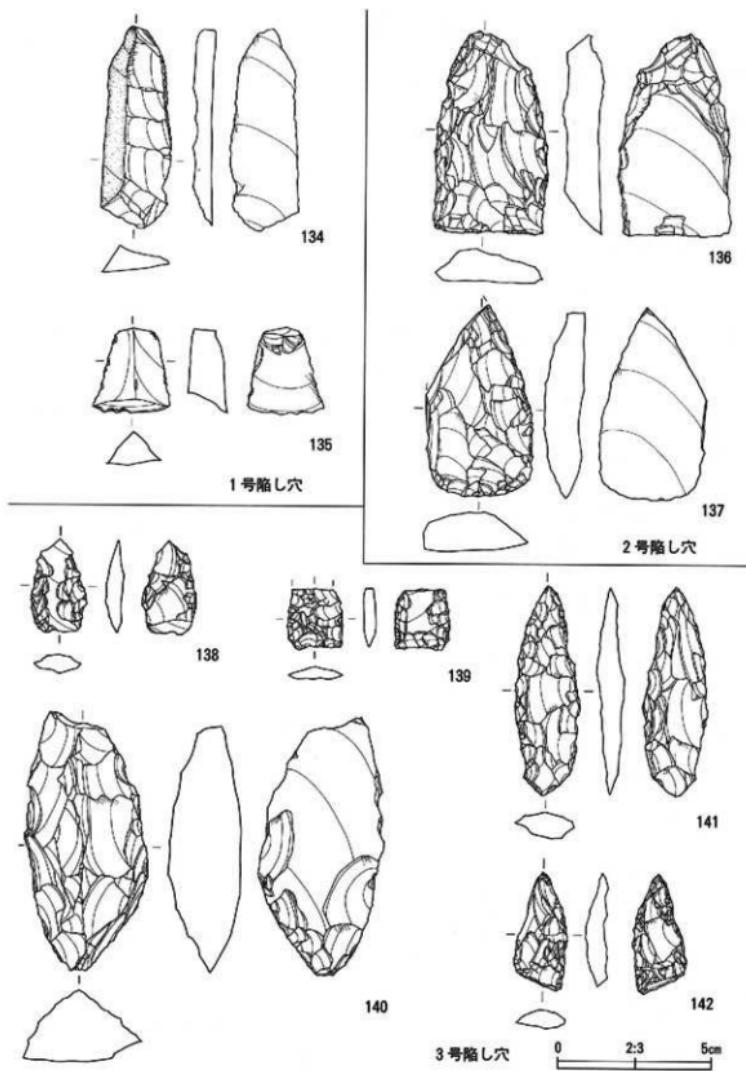
第33図 1~3号陥し穴



第34図 4~7号陥し穴



第35図 8~11号陥し穴



第36図 1~3号陥し穴出土遺物

No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	產地	備考	写真図版
134	1号陥し穴 北側埋土	削掻器	6.5	2.2	0.8	11.2	砂岩	奥羽山脈		27-134	
135	1号陥し穴 北側埋土	刮片	2.7	2.5	1.3	6.6	頁岩	奥羽山脈		27-135	
136	2号陥し穴 黒色土・層	石鏟	6.5	3.6	1.3	30.6	頁岩	奥羽山脈		27-136	
137	2号陥し穴 南側埋土	石鏟	(6.2)	3.4	1.2	27.0	頁岩	奥羽山脈	欠損	27-137	
138	3号陥し穴 北側埋土	石鏟	3.0	1.8	0.6	2.8	頁岩	奥羽山脈		27-138	
139	3号陥し穴 北側埋土	石鏟	(2.0)	1.8	0.4	2.0	頁岩	奥羽山脈	先塙部欠損	27-139	
140	3号陥し穴 北側埋土	削掻器	8.4	4.1	2.4	66.2	頁岩	奥羽山脈	未製品?	27-140	
141	3号陥し穴 北側埋土	削掻器	6.7	2.1	0.9	10.5	頁岩	奥羽山脈		27-141	
142	3号陥し穴 北側埋土	削掻器	3.8	1.7	0.7	4.1	頁岩	奥羽山脈		27-142	

#### (4) 陥し穴状遺構

##### 1号陥し穴状遺構 (第37図、写真図版14)

<位置> 12J区の南東側に位置する。

<検出状況> 表土除去後Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりをもって確認した。

<形状・規模> 規模は開口部径 210×40cm・底部径 177×10cm・深さ 27cm を測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向は東-西である。断面形は長軸が逆台形、短軸が楕形を呈し底面はほぼ平坦である。

<埋土> 黄褐色土、暗褐色土の2層からなり、レンズ状に堆積する。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 繩文時代のものと思われる。

##### 2号陥し穴状遺構 (第37図、写真図版14)

<位置> 5K・6K区の東側に位置する。

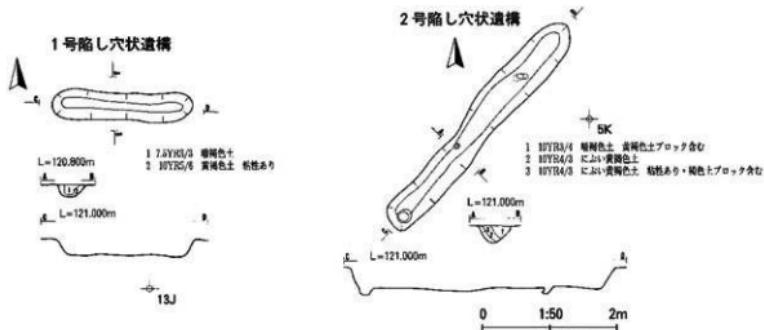
<検出状況> 表土除去後Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりをもって確認した。

<形状・規模> 規模は開口部径 392×55cm・底部径 360×30cm・深さ 27cm を測る。平面形は溝形を呈し、長軸方向は北東-南西である。断面形は長軸が逆台形、短軸が楕形を呈し底部は平坦である。

<埋土> 暗褐色土、にぶい黄褐色土の3層からなり、半レンズ状に堆積する。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 繩文時代のものと思われる。



第37図 1・2号陥し穴状遺構

### (5) 焼土遺構

### 1号焼土遺構（第38図、写真図版15）

＜位置＞ 13K・14K区の西側に位置する。

＜検出状況＞ 表上除去後Ⅲ層上面で確認した。

〔形状・標榜〕 112×49cm の長楕円形。

〔厚さ〕 最も厚い部分で 6cm

〈出土遺物〉、出土(玉有)

＜時期＞ 不明であるが、検出面からみて縦文時代に属する可能性がある。

2号墳土遣模（第38図、写真図版15）

〈位置〉 13丁目の北西側に位置する

〈檢出狀況〉：毒土除去後Ⅲ層上面で確認した

〔形状・規格〕 34×30cm ほぼ四角形を呈する

〈原音〉 墓木圓心部分看 3cm

#### 〈出土遺物〉　出土工具類

（时期） 不明或未定。检出率为 5.7%，与时代江原大田等地相似。

### 2号機主発電機（第38回 石原圖版15）

〈位置〉 11.I - 11.I 区の北側に位置する。

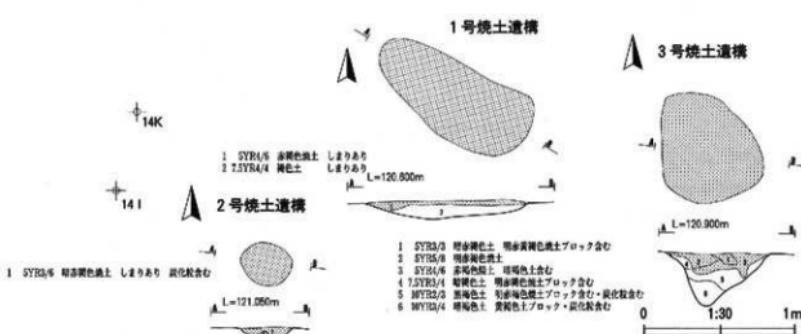
《榆山詩詞》 李士詒主編栗屬上面二首詞

『形狀・規則』 72×36 — 畫幅規形を呈する

（尺寸：寬度） 15 x 60cm (標準)

（厚さ）最も厚い部分で 200

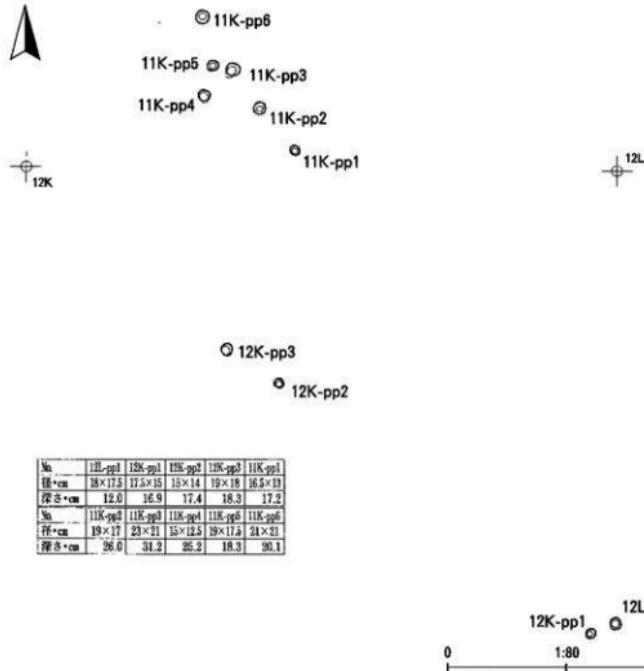
問題二：問題一の結果、株式会社Aは「損失の発生」する可能性がある。



第38図 1~3号焼土遺構

### (6) 柱穴状小ピット (第39図)

調査区南部に集中し、11K区より6基、12Kより2基、12L区より2基検出した。個々の柱穴は径15~23cm、深さ12~31.2cmを測り、平均すると径17.5cm前後、深さは20cm前後の規模である。埋土は暗褐色~黒褐色土を主体とし、柱あたりは確認できなかった。出土遺物は11K-pp3より磨耗した土器の細片と11K-pp2からフレイクが出土した。配置プランに関しては想定できなかった。

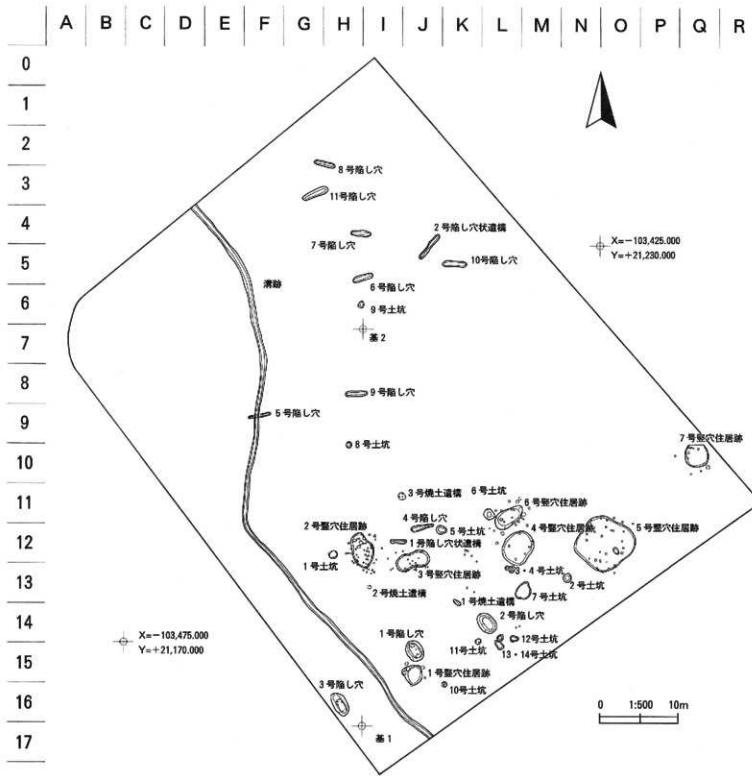


第39図 柱穴状小ピット

### (7) 溝跡 (第40図、写真版16)

調査区西側で1条を検出した。全長72m、上端幅平均70cm、下端幅平均40cmで南北を蛇行するようである。この地に詳しい方の話によると、この溝は胆沢川から水を引くための前沢堰の支流であるらしい。この堰は、昭和3年頃から38年頃まで使われ、当時前沢町には千代治・出口・清作開墾地があり、本流の馬留~万内堤を経て各支流から開墾地に水を送っていた。なお、先の開墾地は現在の前沢町日除松地区にあたり、この地区には現在でも千代治・出口・清作・半藏堤等の貯水施設がある。

出土遺物は、埋土から磨耗した上器片・石器が出土した。これらの遺物は溝の埋め立て時に入りこんだものと思われ、遺構の時期も明確なため遺構外出土遺物の欄にて掲載している。



第40図 遺構配置図

## 2 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、土器・石器である。土器は縄文土器の碎片で、その総量は小コンテナ(30×40×10cm)1箱にも満たない。石器は104点で使用の痕跡が認められない剥片類及びチップ、破損の著しい礫石器を除く、29点を掲載した。出土の層位はII・III層上面である。また、1号溝より出土した遺物についても遺構外として扱った。

### (1) 土器

縄文土器は単節縄文の地文のみの胴部破片が多く、時期や特徴を明記できるものは極僅かであったため、ここでは特徴をもつ土器のみを取り上げた。

143～149は胴部破片である。143・144は繊維を含み胎土は粗い。器面磨耗が激しく調整を読み取ることは不可能であった。145・146・147・149は外面R Lの縄文・内面はナデを呈し、145の内面には炭化物の付着が見られる。146は繊維が含まれず砂粒を含み粗い胎土である。148は外面ともRの縄目文が施される。

150は口縁部破片である。口縁にいたって緩やかに外反し口縁部には且殺条痕が施され、口縁部から縦位と口唇部に原体正痕が加えられる。胴部地文はR Lの縄文が施される。

### (2) 石器

石鏃(151)…1点のみの出土である。無茎鏃で基部は円基状である。

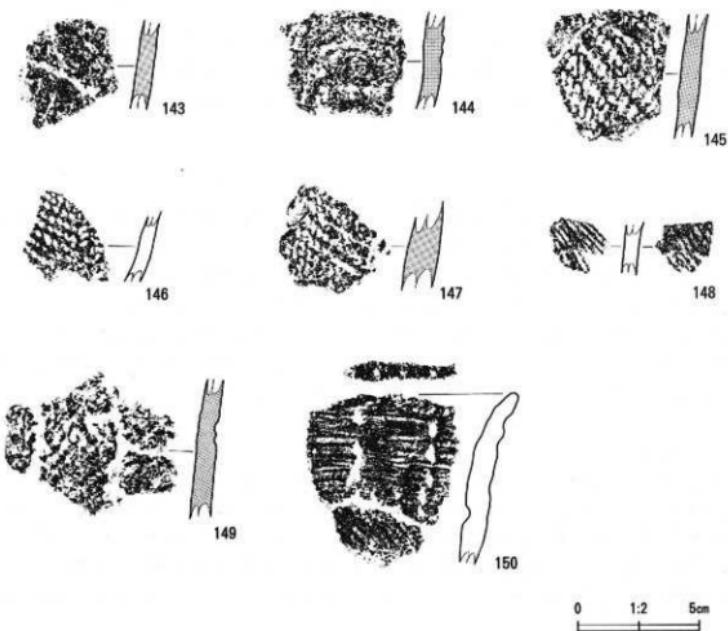
石匙(152～159)…全て縦型の石匙である。154～157は刃部、156・159はつまみ部を欠損している。152～156は両側刃に刃部を持ち、先端にいくにしたがって幅は狭くなる。153・155は裏面からも調整を施している。158は両側刃と末端(つまみの反対側)の三辺に刃部をもつ。刃部の形状は比較的丸みを帯びている。石箒(160～162)…3点とも片面加工である。160・162は基部が欠損している。162は左側面が鋸歯状に加工されている。

石錐(163)…1号溝埋土上層中より出土。扁平で隅丸方形状のつまみを持ち、先端部は短く太い。

削搔器(164～173)…165・166・167・171・172は欠損しているが1辺ないし2辺の刃部を形成している。169は両縁刃に刃部加工が施されるが、左側面には歯つぶし加工と思われる調整が入り末端は尖っている。170は3辺に刃部が施され裏面には一辺に加工を施している。173は両側刃に刃部加工が施され、裏面の左側面に調整が入っている。

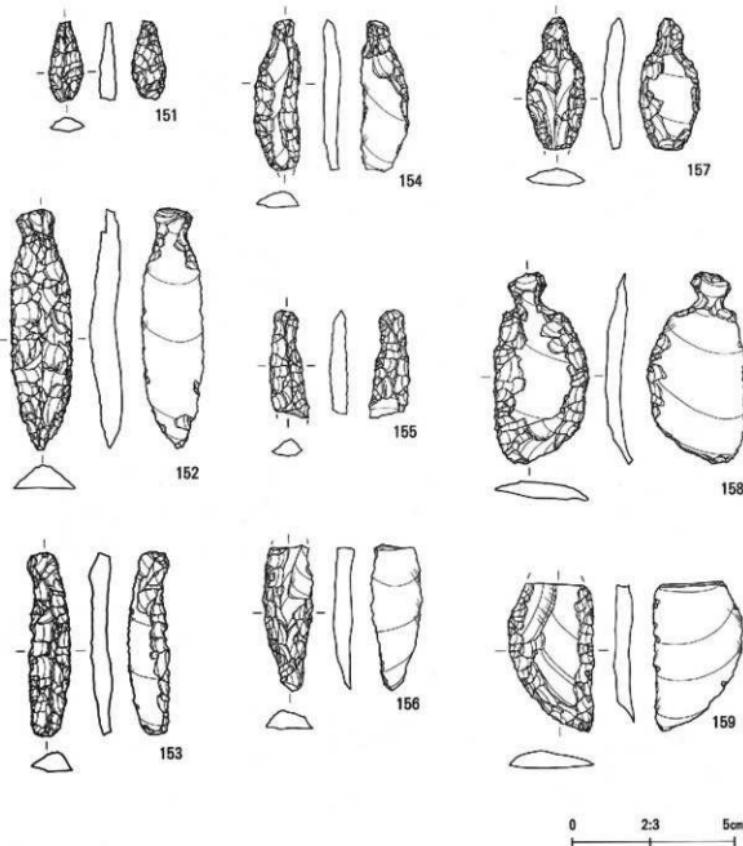
フレイク…調査区の南半部にて検出されている。ここでは調整が見られるものRフレ(174)と、使用痕が見られるものUフレ(175～178)である。

打製石斧(179)…自然礫を利用し右側面と刃部に加工している。



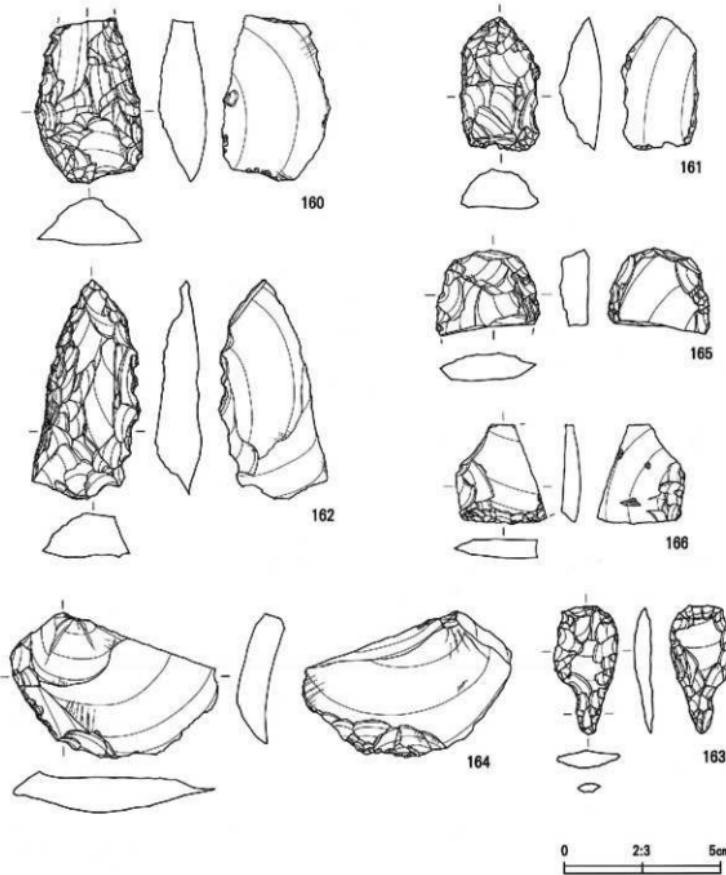
No.	出土地点	層位	器種	部位	文様ほか	色調			分類	写真図版
						織物	外面	内面		
143	10I	表土下	深鉢	網部	内外面斜接著しい 胎土：やや粗	少量	明黄褐色	明黄褐色	I	28-143
144	10H	表土下	深鉢	網部	内外面斜接著しい 胎土：やや粗	含む	黄褐色	こい黄褐色	I	28-144
145	11L	表土下	深鉢	網部	裏文（外面：RL）内面：ナテ・炭水化物付着	少量	黄褐色	こい黄褐色	I	28-145
146	11L	表土下	深鉢	網部	裏文（外面：RL）内面：ナテ 胎土：やや粗	なし	黄褐色	こい黄褐色	I	28-146
147	13L	表土下	深鉢	網部	裏文（外面：RL）内面：ナテ	含む	黄褐色	黒褐色	I	28-147
148	13L	II層上	深鉢	網部	裏文（外面：Rの縛）	なし	明黄褐色	こい黄褐色	I	28-148
149	16H	II層上	深鉢	網部	裏文（外面：RL）内面：ナテ	多量	こい黄褐色	褐色	V	28-149
150	調査区南側	III層上	口縁部	口縁部	口縫部文様体に貝殻骨面条痕を施し縦位と口唇部に原 体汗腺加える	なし	こい黄褐色		I	28-150

第41図 遺構出土遺物①



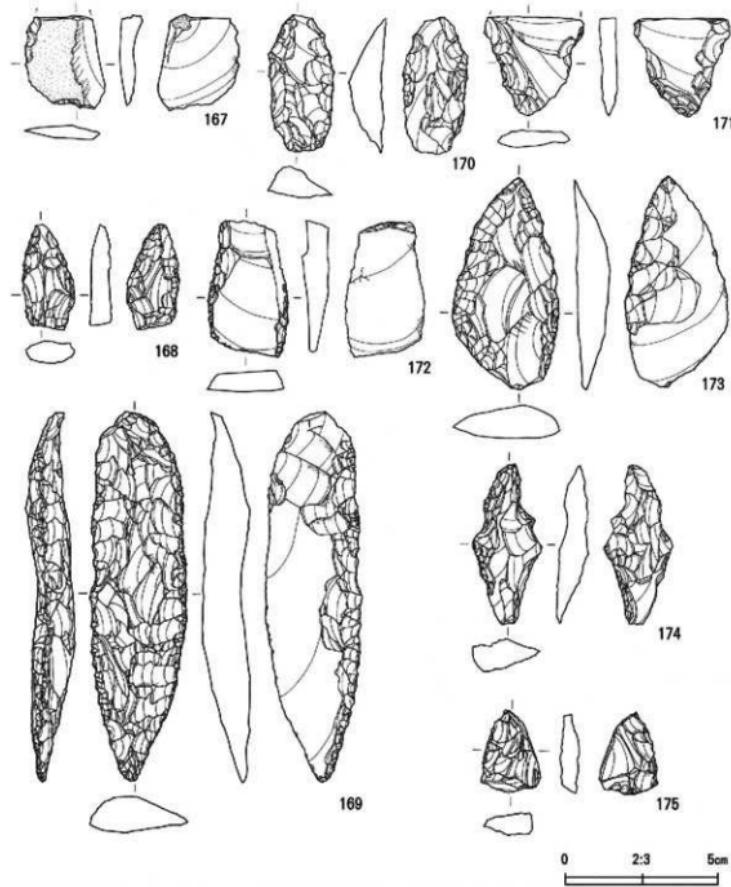
No.	出土地点	番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	产地	備考	写真版
151	14L	II層上層	石鏟	2.5	1.1	0.5	1.0	頁岩	奥羽山脈		28-151
152	南側試掘	I層下層	石鏟	7.4	1.8	0.9	11.1	頁岩	奥羽山脈		28-152
153	11K	II層上層	石鏟	5.6	1.3	0.7	4.8	頁岩	奥羽山脈		28-153
154	南側試掘	I層下層	石鏟	(4.7)	1.4	0.5	3.0	頁岩	奥羽山脈	欠損	28-154
155	1号主水道 墓十一号	石鏟	(3.0)	1.2	0.5	1.9	頁岩	奥羽山脈	欠損		28-155
156	16H	楓樹木場土	石鏟	(4.5)	1.6	0.6	4.5	頁岩	奥羽山脈	欠損	28-156
157	15J	II層上層	石鏟	(4.1)	1.8	0.7	3.9	頁岩	奥羽山脈	欠損	28-157
158	16H	I層下層	石鏟	5.9	2.9	0.8	9.7	頁岩	奥羽山脈		28-158
159	南側試掘	I層下層	石鏟	(4.5)	2.6	0.6	8.0	頁岩	奥羽山脈	欠損	28-159

第42図 遺構外出土遺物②



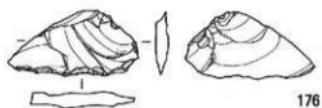
No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考	写真図版
160	14H	日暮上層	石劍	(5.3)	3.4	1.5	23.7	頁岩	奥羽山脈	欠鋒	29-160
161	9C	日暮上層	石劍	4.2	2.5	1.3	15.4	頁岩	奥羽山脈		29-161
162	10G	日暮上層	石劍	7.0	3.4	2.0	26.3	頁岩	奥羽山脈	一辺に掘削状加工	29-162
163	1号噴火-鉢型十二括	石劍	4.1	2.0	0.5	4.3	頁岩	奥羽山脈			29-163
164	1号噴火-鉢型十二括	削採器	6.8	4.1	1.0	30.4	頁岩	奥羽山脈			29-164
165	1号噴火-鉢型十二括	削採器	(2.7)	3.2	0.9	8.9	頁岩	奥羽山脈	欠鋒		29-165
166	12G	日暮上層	削採器	3.2	(2.6)	0.6	6.1	頁岩	奥羽山脈	欠鋒	29-166

第43図 遺構外出土遺物③

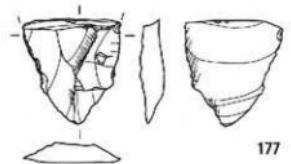


No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	产地	備考	写真図版
167	I号砂丘~1段	埋土一層	削盤器	(3.1)	2.6	0.7	4.4	頁岩	奥羽山脈	欠損	29-167
168	I号砂丘~1段	埋土一層	削盤器	3.4	1.7	0.7	4.3	頁岩	奥羽山脈		29-168
169	II層上層		削盤器	12.0	3.2	1.5	47.8	頁岩	奥羽山脈		29-169
170	II層上層		削盤器	4.5	3.1	1.2	1.0	珪質頁岩	奥羽山脈		29-170
171	II層上層		削盤器	(3.2)	3.2	0.6	6.0	頁岩	奥羽山脈	欠損	29-171
172	II層上層		削盤器	4.4	2.5	0.9	10.9	頁岩	奥羽山脈		29-172
173	表様		削盤器	6.9	3.4	1.1	22.6	頁岩	奥羽山脈		29-173
174	I号砂丘~1段	埋土一層	剥片	5.2	2.2	1.0	7.4	頁岩	奥羽山脈		29-174
175	I号砂丘~1段	埋土一層	剥片	2.7	1.6	0.6	2.7	頁岩	奥羽山脈		29-175

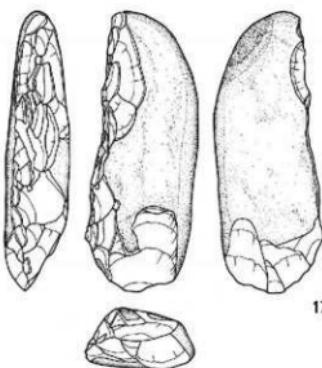
第44図 遺構出土遺物④



176

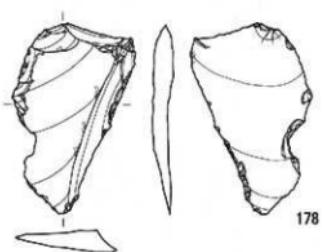


177



178

0 1:3 10cm



179

0 2:3 5cm

No.	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	产地	備考	写真図版
176	I 銀鉢一地点	埋土一括	剥片	2.1	4.0	0.5	3.5	頁岩	奥羽山脈		50-176
177	15G	I 層上端	剥片	(3.2)	3.0	0.8	6.4	頁岩	奥羽山脈	欠損	50-177
178	8F	II 層上端	剥片	5.9	3.8	0.7	13.7	頁岩	奥羽山脈		50-178
179	14K	I 層下端	打制石斧	17.6	5.9	3.9	570.0	頁岩	奥羽山脈		50-179

第45図 造様外出土遺物⑤

## V まとめと考察

### 1 遺構

#### (1) 壓穴住居跡

今回の調査で縄文時代早期後葉と考えられる住居跡7棟を検出した。遺跡はほぼ平坦な土地に立地し、壓穴住居跡の占地は調査区南側に集中しており重複はみられない。また出土遺物は縄文時代早期後葉のものであることから、同時期に使用されたものと思われる。住居の規模は様々で、最大のもので5号住居跡の802×694cm、最小のもので1号住居跡の84×90cmである。その他の住居跡は平均して3~4mの規模である。柱穴の配置は前章で触れているが、柱あたりを持つものではなく、柱穴の埋土と規模と位置、他遺跡の報告等を参考にして推定したものであり、明確な特定には至らなかったため調査時に確認できたものを全て図面に掲載している。床面は地山を多少掘り込み、ほぼ平坦である。壁は緩やかに外傾し、壁高の平均値は5~14cmである。6号住居跡については、壁はほとんどなくI・II層からの掘削が激しい場所であったため、その影響を受けているものと思われる。炉については、2号住居跡の北側から規模53×38cm、厚さ約20cmの焼土が検出された。焼土の検出面からみて住居に伴う炉と考えられる。しかし、尖底土器が出上した3号住居跡や大型の5号住居跡など他の住居からは床面上の焼土は確認されていない。住居跡に関連するピットについては、1号住居跡の北東側にあるP1から横型石臼・磨石が出土しているが、位置からみて柱穴になりうる可能性もある。1号住居跡P3、2号住居跡P1・P2は住居内の北西側にあり平面形が梢円形で浅い窪み状のものであり位置・形状とも類似している。出土遺物等はない。5号住居跡内の南側にあるP1の埋土から110点のチップが出土した。

各住居跡の出土遺物については、ほとんどが磨滅の激しい土器片で、織維は含むもの、含まないものが混在している。時期の特定となる尖底土器を出土した住居は2・3・5号住居で、いずれも底部の破片である。出土状況は床面直上で、一地点に集中し散らばっている状態で出土した破片が多い。3号住居については床面西側より尖底土器の完形破片2個体が出土している。また、床面に接して大型礫が5点出土し、そのうち3点には使用的痕跡が見られる。5号住居は他の住居跡に比べ石器の出土量が多く、先述したが住居南側のP1の埋土からチップ110点が出土した。

休場遺跡の本住居跡については上記した特徴が見られるが顕著な規則性は認められず、住居跡の平面形をとっても不整梢円形・円形・隅丸方形などバリエーションが見られる。県内でも表裏縄文土器をともなった住居跡の例は少ないため第46・47図を含め、他の遺跡より検出された縄文早期末葉～前期初頭の住居跡を概観する。

#### 遺跡の紹介

##### ・大渡野遺跡 紫波郡矢巾町赤林

JR東北本線矢巾駅の南西約4kmに位置する。遺跡は花巻段丘の段丘近くにある。大渡野遺跡からは弥生時代中期の埋設土器、縄文時代早期の土坑や屋外炉、焼土遺構、早期後半の遺物包含層が検出されている。

##### ・穂口I遺跡 九戸郡輕米町大字晴山

JR東北本線金田一温泉駅の東約6kmに位置する。遺跡は北上山地の北端で、西に猿越峠山地が南北に連なる低く緩やかな丘陵にある。同町内には押型文、貝殻文、表裏縄文の遺物が出土する土弓I遺跡、馬場野II遺跡がある。穂口I遺跡からは奈良時代の住居跡や土坑、縄文時代前期初頭～末葉の溝形の陥し穴状遺構

が検出されている。

・駁上遺跡 水沢市大台通り

JR東北本線水沢駅の南西約1kmに位置する。遺跡は胆沢畠状地の扇端部に立地し、胆沢段丘上の最下段である福原面にある。古くから縄文時代早期並びに平安期頃の複合遺跡として知られている。駁上遺跡からは、表裏縄文を覆土伴う溝形の陥し穴や土坑、焼土遺構が検出されている。

・尼坂遺跡 胆沢郡胆沢町南都田字加賀谷地

JR東北本線水沢駅の西約6.8kmに位置する。遺跡は胆沢畠状地のほぼ脇央に立地し、駁上遺跡と同様に胆沢段丘上の福原面にある。尼坂遺跡は昭和26年の調査以降縄文時代早期中葉の遺跡として知られている。最近の調査では平安時代の住居跡、縄文時代前期前半～早期後葉の住居跡や土坑、陥し穴が検出されている。休場遺跡からは北約10kmと近隣にある遺跡である。

岩手県内における該期の住居跡の類例は6遺跡21棟である。その中にても住居の検出状況・遺物出土状況が良好な18棟を対比させたのが第46・47図、第2表である。住居の平面形ごとに円形・長方形・方形・橢円形と分けて掲載している。円形・方形プランでみられることとして、休場1号住居跡、駁上S1-38住居跡以外はほぼ同じ規模であり、柱穴状の小ピットは壁際に見られるものが多い。方形プランでは休場5号住居跡が最も大きく、その他はほぼ同規模である。このプランでは4棟の住居跡とも長軸方向が北西～南東に向き、その中でも休場5号住居跡と尼坂B-1号住居跡はプランと付随する施設の位置もほぼ同地点にある。しかし、尼坂B-1号住居跡のピットからはチップなど遺物の出土は見られない。全体でみると焼土は作っているもの・ないもの両者あり、作っているものはほとんどは床面に硬くしまった焼土が広がっている状態である。床面に広がっている焼土の規模は最大で110cm、最小で42cm、厚さは厚いもので20cm、薄いもので3cmである。休場遺跡2号住居の炉は焼土が厚く残存し、焼土内に炭化物を検出した例は稀であったといえる。焼土の位置はほぼ中央にあるが、尼坂C-2・休場2号住居跡のように北側に寄っているものもある。壁の立ち上がり方はほとんどが緩やかに外傾し、周溝をもつものはない。柱穴状の小ピットも規模は小さく柱あたりを持つものはない。住居内の出土遺物についてはすべて破砕した土器片で、完形に近い状態で出土した休場3号住居跡、駁上S1-38住居跡の出土土器についても碎けた状態であり、完全な復元はできていない。

該期の住居は必ずしも1つの型におさまるものではなく、多様な形態がある。遺構が検出されている遺跡も県内には6遺跡と少数のため、類例を重ね規模・炉の位置・柱穴配置等を詳しく検討をすれば時期的・地域的特徴を見い出せるかもしれない。ここでは北上川水系の駁上遺跡、その支流となる胆沢川水系の休場・尼坂遺跡を主に取り上げたが、いずれも各特徴の一端を確認したものとして、ここでは平面形が多種にわたり、炉に相当する焼土を有するもの有さないものがあること、明確な柱穴配置（有無）と周溝を持たない住居跡の存在を指摘するにとどめる。

(平)

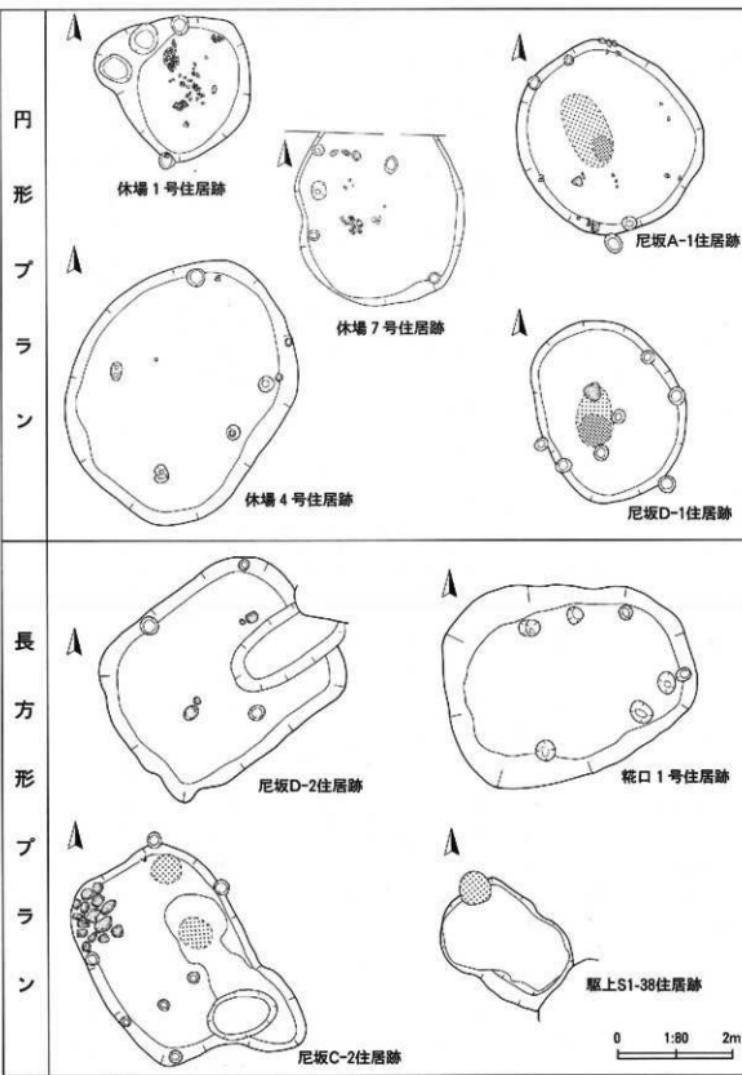
第2表 岩手県内における表裏縄文期の住居観察表

遺跡名		住場遺跡			尼板遺跡	
円形	遺構名	1号住居跡	4号住居跡	7号住居跡	A-1住居跡	D-1住居跡
	平面形	小部円形	不整圓形	ほぼ円形	卵形	卵形
	規模(m)	2.67×2.35	1.53×3.60	3.35×3.06	2.9×3.1	2.6×3.32
火炉	-	-	-	-	深さ10cmの 硬い燒土跡	床面上に 燒土が広がる
	柱穴	壁際に2基、 壁上に1基	壁際に1基	壁際に3基 遺構内に4基	壁際に3基 遺構内に5基	壁際に5基 壁上に1基
施設	施設	窓み上ピット1基	-	-	-	遺構外側に椭円形ピット 土器片・炭化物含む
	壁の傾斜	緩やかに外傾	緩やかに外傾	緩やかに外傾	外傾	外傾
壁高(cm)	4.3~11.0	9.5~12.7	1.6~8	15~18	-	16
	上器片	土器片2片・細片	土器片	土器片5点	土器片7点	土器片10数点
遺物出土状況		石器・礫	石器・礫	石器17点	細片13点	石器17点

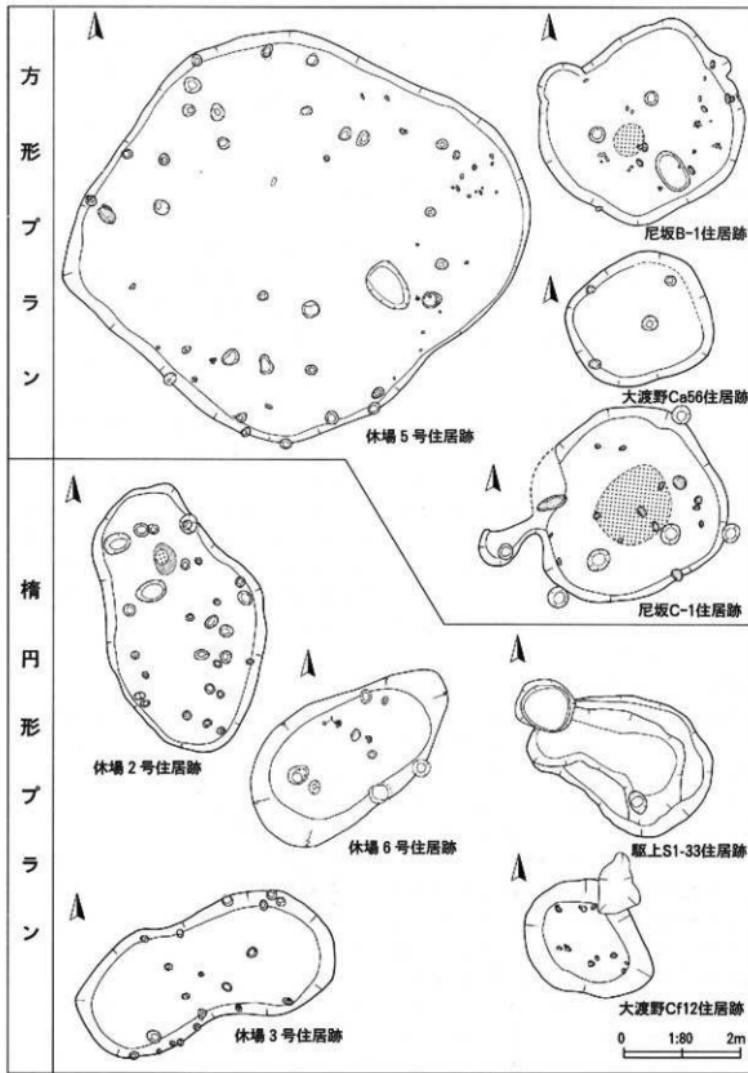
遺跡名		尼板遺跡		窓口1遺跡	壁上遺跡
長方形	遺構名	D-2住居跡	C-2住居跡	1号住居跡	S I-38
	平面形	隅丸方形	ほぼ方形	不整圓形	ほぼ方形
	規模(m)	4.1×3.0	3.8×2.64	4.25×3.44	2.9×1.6
火炉	-	同時代と思われる 燒土遺構2基	-	-	-
	柱穴	壁際に2基 遺構内に1基	壁間に5基 遺構内に2基	壁間に6基	-
施設	荷円形の土坑	-	-	焼土遺構と重複	
	重複	緩やかに傾斜	緩やか	緩く立ち上がる	
壁の傾斜	外傾	緩やかに傾斜	緩やか	緩く立ち上がる	
	壁高(cm)	2	10	20	30
遺物出土状況		土器片14点 細片約70点	尖底部含む上器片 9点・細片70点 石器33点	平凸形の土器片 その他土器片 石器12点	土器片 石器・石路

遺跡名		住場遺跡		大庭野遺跡		尼板遺跡	
方形	遺構名	5号住居	C a56住居跡	B-1住居跡	C-1住居跡	隅丸方形	隅丸方形
	平面形	不整圓丸形	円形ないし橢円形	隅丸方形	隅丸方形	3.8×3.0	3.2×3.0
	規模(m)	8.02×6.94	3.5×2.3	-	-	中央部に深さ12cm の深い燒土	中央部に深さ12cm の深い燒土
火炉	-	-	-	中央西側に燒土	-	壁上に3基 遺構内に2基	壁上に3基 遺構内に2基
	柱穴	遺構内37基	壁際に3基 床面中央に1基	遺構内に2基	-	-	-
施設	中央南側にピット	中央南側にピット チップ110点含む	2m西に屋外炉穴	中央南側にピット 土器片・炭化物・含む	-	-	-
	壁の傾斜	緩やかに外傾	緩やか傾斜	外傾	外傾	-	-
壁高(cm)	7.0~15.3	9	20	-	-	29	29
	遺物出土状況	上器片 石器・礫	上器片 石器	土器片9点 細片約30点	土器片14点 細片17点 石器54点	-	-

遺跡名		住場遺跡			人渡野遺跡		壁上遺跡	
円形	遺構名	2号住居跡	3号住居跡	6号住居跡	C I12住居跡	S I-33		
	平面形	不整圓形	不整圓形	長橢円形	長橢円形	卵型		
	規模(m)	4.68×2.77	4.49×1.74	8.02×6.94	2.4×1.95	3.2×2.1		
火炉	厚さ約20cmの燒土 地床炉?	-	-	-	-	-	-	-
	柱穴	46基	35基	19基	-	-	南西隅に1基	-
施設	-	-	-	-	-	-	-	-
	壁の傾斜	緩やかに外傾	外傾	緩やかに外傾	傾斜するが西側は 比較的急	-	-	-
壁高(cm)	8.0~17.2	6.0~22.9	1.8~7.0	24	-	48	-	-
	遺物出土状況	上器片 石器・礫	上器片 石器・礫	土器片 石器	土器片 石器	-	-	-



第46図 岩手県における表裏縄文期の住居跡①



第47図 岩手県における表裏縄文期の住居跡②

## (2) 土坑

14基の土坑を検出している。調査区南側、住居検出域を縫うようにある。住居や陥し穴との重複は見られなかった。平面プランは不整円形をはじめとして不整形を呈するものが多く、断面形は皿状を呈するものが多い。土坑の深さは10~20cm・5基、21~30cm・4基、30cm以上・5基と浅い土坑が多い。副穴の検出は6・13・14号土坑で深さは8~5cmと浅い。検出は全て立ちあがり部分である。遺物の出土は1・3・5・7・8・11・12・13・14号土坑で磨耗著しい小破片がほとんどであり、11号土坑からは尖底部の破片が出土している。出土土器は全て縄文時代早期末葉のものと思われる。

(平)

## (3) 陥し穴

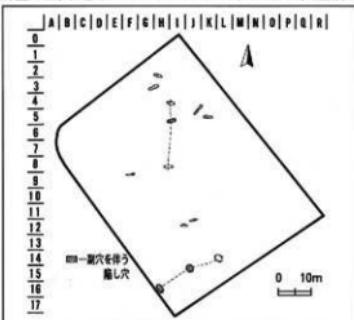
10基の陥し穴を検出している。調査区中央部南北にわたって見られる。形態別では溝形と椭円形の2タイプに分けられる。その中でも副穴?をもつもの、もたないものがあるが検出数が11基と少ないため、あえてここでは2種類とする。又、陥し穴状遺構のまとめについてもここで触れる。陥し穴と陥し穴状遺構と分けた事については、形状は溝形を呈しているが、深さに違いがありすぎ機能を考えた上で深いものを陥し穴状遺構とした。

### <横円形> (1~3号陥し穴)

3基とも調査区南側にて検出された。規模は平均で開口部287×188cm・底部径189×87cm・深さ180cm、断面形は底部から80~95cmまではほぼ垂直に立ち上がりその後緩やかに外傾するビーカー状である。検出面はⅢ層上層と全く同じ面である。副穴を伴うものは1・3号陥し穴で、1号陥し穴は計8基を検出した。深さは18~10cmで底部の隅に7基・中心に1基ある。3号陥し穴は計5基検出。深さ15~30cmでいずれも底部の隅に寄っている。副穴の配置に顕著な規則性は見られない。埋土は上層に十和田中漂浮石を含んでレンズ状堆積をする。この堆積層から底部までは1m以上あることから縄文時代早期後葉の遺構の埋土上位に堆積しているものと考えることができる。それぞれの長軸は北西~南東方向に向き、有意の配列を示していると考えられ、獸道の存在が窺われる。配列は東側から3・1・2号陥し穴と続き、それぞれの距離は9.60m・7.70mである。(図48)

### <溝形> (4~11号陥し穴)

調査区中央部南北に沿って検出された。規模については最小で開口部径2.93×0.5m、最大で3.40×0.9m、深さは92~113cmである。底面はほぼ平坦で、長軸の断面は底部近くがオーバーハングするもの、短軸は底面から垂直に立ち上がるY字状のものがほとんどである。埋土は上位に黒色土ないし黒褐色土・中位に褐色土ないし黄褐色土・下位に黒色土ないし黒褐色土を主体としている。6号陥し穴について、埋土は極めて粘性が強く長軸方向東側底面には開口部径0.18×0.20m、深さ18cmの副穴?が見られる。このような柱穴は他の陥し穴にはみられなかった。有意の配列については7・6・9号陥し穴の長軸はほぼ東~西を向きそれぞれの距離は4.60m・13.50mである。その他の陥し穴について、有意の配列を示すものは見られないが長軸方向の向きはほぼ東~西を向いている。



第48図 陥し穴配列図

#### <陥し穴状遺構>

1号陥し穴状遺構は調査区南側2・3号住居と4号陥し穴にはさまれるように検出され、長軸方向は4号陥し穴とはほぼ同じ東一西を向いている。2号陥し穴状遺構は調査区北部10号陥し穴横に検出され、長軸方向は南西一北東を指す。深さは20cm程度と浅いため、陥し穴として十分に機能されたかは不明である。

(平)

#### (4) 焼土遺構

3基検出している。いずれもⅢ層上面で検出されており、厚さは8~26cmである。場所は住居の検出が多い南側で検出されている。全て現地性の焼上で焼成面が単独で存在した屋外の地床炉と思われる。埋土中には遺物・炭化材の確認はできなかったが、2号焼土からは細かい炭化粒が含まれ、3号焼土からは焼土下の黒褐色土より同様の炭化粒がみられた。周辺より柱穴などの痕跡は確認できなかった。

(平)

## 2 遺物

全部で大コンテナ4箱分の遺物が出土した。ここでは出土量の多い土器および石器について若干のまとめを行いたい。

#### (1) 土器

器面の表裏に縞文や条痕が施された尖底深鉢土器が出土している。出土した土器は胴部の小破片が殆どで、磨耗が著しく残存状態は極めて悪い。器形は全体が残る資料が少ないが、3号堅穴住居から得られた31・32は尖底を呈する深鉢土器で、口縁部がやや外傾するものである。また、底部破片が全体で3点得られたが、形状は全て尖底であった。胎土は纖維を含まないものと、少量の纖維を含むものがあり、後者はスクリーントーンによって示した。また、ほとんどの土器は焼成不良で、土器の断面が黒色を介したサンドイッチ状を呈する。口縁部の文様には横位平行沈線や沈線下に遡る原体末端圧痕、口唇部の刺突や刻目、貝殻条痕+原体末端圧痕などが認められる。地文はLR・RLの單節縞文がみられ、横位に施されるものが目立つ。これらの土器は施文手法などの特徴から、青森県八戸市の赤御堂遺跡出土の第V群土器や、宮城県石巻市の梨木畠貝塚出土の梨木畠式土器に相当するものと考えられ、これらとの関連性も示唆される。

#### <分類について>

本書では遺跡から出土した土器を、遺構外のものも含めて下記の通り分類し観察表に掲載した。分類は施文手法に主眼を置き、調整等を合わせて行った。小破片がほとんどであり、不明な点が多いことから、器形や底部の形態は主要な属性として扱わなかった。なお、土器は小破片のうえ、ゆがみが大きいものや、磨耗のため纖維の方向が判定にくいものが多く存在する。その為、遺物の天地（上下）や原体についての間違いが少なからず存在している可能性があることを先にお断りしておく。

I類 外面が単節縞文、内面にナデ・指頭圧痕が施されている土器 （遺物番号 1.2.5.8.10~

13.15.18.19.29.38.43.46~55.74.77.78.108.110.111.114.119.121~129.132.143~147.149）

II類 内外面とも単節縞文が施されている土器 （遺物番号 3.4.6.7.9.14.16.30~37.39.44.76.109）

III類 外面が単節縞文、内面に貝殻条痕が施されている土器 （遺物番号 112.113）

IV類 口縁部文様帶に貝殻条痕+原体末端圧痕、胴部に地文が施される土器 （遺物番号 150）

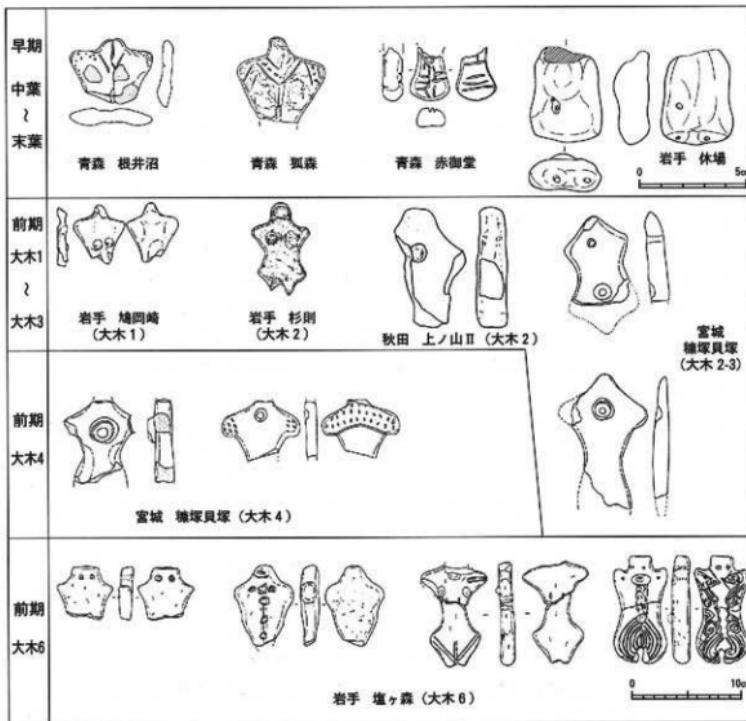
V類 その他 （遺物番号 11.17.45.133.148）

（中村）

## (2) 土製品

2号住居南側床面より土器片にまじって1点出土した。長さ4.5cm・幅3.4cm・厚さ1.7cm・重さは18gで、にぶい黄橙色～明黄褐色を呈す。特徴は①4.5cm程の小型のものである。②中央部に凸状のふくらみを持つ。③下面に刺突を持つことがあげられる。この性格については明確性がないため、①～③をふまえ近県・同県にて出土した類似の土製品例をあげておきたい。早期中葉の貝殻沈線文土器様式期のものとして、青森県の根井沼遺跡・孤森遺跡より土偶として出土している。文様は細かな刺突文と沈線文が施されている。後葉になると小型・細身で幾何学的な沈線が施された板状を呈した土製品が青森県八戸市の赤御堂遺跡より出土している。前期に入ると県内でも出土例が増え、大木1式期・江釣子村鳩岡崎遺跡、大木2a式期・花泉町杉則遺跡、大木6式期・零石町塙ヶ森遺跡があげられる。近県では秋田県の上ノ山II遺跡、宮城県の糠塚貝塚遺跡等からも出土している。当遺跡出土の土製品も類似する事例として事実報告のみにとどめたい。

(平)



(原田昌幸 1997 発生・出現期の土偶総論 より一部抜粋)

第49図 県内近県における早期～前期の土偶土製品

### (3) 石器

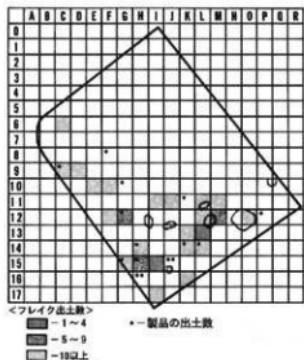
石器の全点数は 573 点で、遺構内より 469 点、遺構外より 104 点が出土した。このうち明瞭な使用痕の認められない剥片やチップ類を除いた 104 点を掲載した。掲載した石器の石材は剥片石器では頁岩が 90%、鍛石器では安山岩が 81% を占め、登録外の石器についてもほぼ同率で石材を用いているものと思われる。いずれの石材も周辺部から容易に入手できるものである。

堅穴住居跡においての器種組成は第 3 表に示したとおりである。1・3・5 号住居からの出土が断然多いがその出土量の差については土器の出土量や住居の床面積とは比例しておらず、その関係については不明である。出土した石器は剥片類が 80% を占める。製品では磨石や石匙・石籠が見られ、その中の欠損品は約半数を占めている。遺構外出土については第 50 図に示したが、生活域だったと考えられる住居検出区域に多く出土している。製品の出土は少なく 15 点で、その内の約 60% は欠損品である。

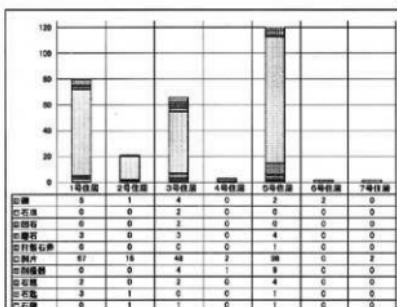
全体の石器の組成（剥片・チップ類 483 点を除いた 90 点の割合）については、石籠は 8 点（10%）、石匙 13 点（15%）、石籠 13 点（15%）、石錐 1 点（1%）、削搔器 36 点（37%）、打製石斧 3 点（4%）、磨石 12 点（14%）、凹石 2 点（2%）、石皿 2 点（2%）、である。石籠は全て無茎のもので、円基が 6 点、凸基が 2 点である。完形で出土したものは 3 点で、その他は全て尖頭部が欠損している。石匙は 13 点で縦型が 12 点、横型が 1 点で、縦型のほとんどが細長く対照的な形をした柳葉状のものである。石籠で完形のものは 9 点と他の製品に比べ欠損している割合が低い。刃部の欠損しているものが 1 点、基部の欠損しているものが 3 点である。

剥片石器の製品数は全体の出土数に比べると少なく、裸石器についても同様のことが言える。また、欠損品が半数を占めていることも特徴の一つとして窺われる。

（平）



第 50 図 遺構外石器出土点数



第 3 表 堅穴住居における器種組成

## おわりに

今回の調査では胆沢扇状地の南部、岩堀川からなる河岸段丘上の平地の一端、約3,200m<sup>2</sup>を調査し、その結果、竪穴住居跡7棟、土坑14基、陥し穴11基、陥し穴状遺構2基、焼土遺構3基、柱穴状小ピット10基、溝1条を検出することができた。遺物量は土器1.5箱、石器573点、土製品1点と少なく、しかもほとんどの上器は、破片で磨耗が激しく脆いものであった。そのなかで、3号竪穴住居跡からは2個体の尖底土器が出土し、胆沢扇状地の一端に縄文時代早期後葉の資料が加えられることとなった。残念ながら、この土器も脆く、取り上げ・水洗・接合の段階で砕け、完全な復元とはならなかった。

占地については、ほぼ平坦な立地であり、調査区の北側には陥し穴を中心、南側には竪穴住居跡や土坑、焼土遺構を中心とする。調査区外の南側にある畠からは石鐵があったと地主の方からの話もあり、居住の範囲は南側にも伸びる可能性がある。

現在の遺跡の立地は、ほぼ平地で近くには小さな沢が点在し人間が生活する上での水源には恵まれているように思われる。しかし、この水源が6,000年以上も前から安定した水の供給が可能であったか否かは知り得ないが、この立地や水源を求め、狩猟を行い、この地に定着し、生活した人々がいたことは事実である。

最後にこの内容については、筆者の不勉強もあり、解釈や位置づけなど誤っている部分も多いと思うが、ご容赦いただければ幸いである。(平)

## 参考・引用文献

- (財) 岩手県埋蔵文化財センター 1979 「大渡野遺跡」  
『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－II－ 第32集』
- (財) 岩手県埋蔵文化財センター 1999 「下原前II遺跡A地区発掘調査報告書 第288集』
- (財) 岩手県埋蔵文化財センター 1988 「飛鳥台地I遺跡発掘調査報告書 第120集』
- (財) 岩手県埋蔵文化財センター 1997 「下原前II遺跡発掘調査報告書 第252集』
- (財) 岩手県埋蔵文化財センター 1992 「鏡口I遺跡発掘調査報告書 第175集』
- 八戸市教育委員会 1988 「赤御堂遺跡発掘調査報告書 第33集』
- 八戸市教育委員会 1975 「赤御堂遺跡発掘調査概要報告書』
- 青森県教育委員会 1980 「長七谷地貝塚発掘調査報告書 第57集』
- 胆沢町教育委員会 1992 「尼坂遺跡－第二次緊急発掘調査報告書 第22集－』
- 胆沢町 1971 「胆沢町史I 原始古代編』
- 水沢市教育委員会 1982 「瓶上遺跡発掘調査報告書 第7集』
- 中村哲也・板本真弓 1998 「青森県の縄文早期住居集成」『研究紀要第3号』  
青森県埋蔵文化財調査センター
- 原田 昌幸 1997 「発生・出現期の土偶論」『土偶とその情報研究論集(1)』
- 田村 壮一 1987 「陥し穴状遺構の形態と時期について」『紀要VII』  
岩手県埋蔵文化財センター
- 加藤晋平／小林達雄 他 1983 「道具と技術」『縄文文化の研究 7』
- 町田勝則 1996 「石器の研究方法」『(財)長野県埋蔵文化財センター研究論集』
- 稻野裕介 1998 「北上川中流域における板状O脚土偶とそれ以外の形態について」  
『野村先生還暦記念編集 北方の考古学』

## VI 分析・鑑定

### 1 休場遺跡の出土炭化材の年代測定について

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

休場遺跡は、胆沢扇状地の開析段丘（中位段丘）上に立地する。今回の発掘調査により、縄文時代早期～前期の集落が出されている。今回の自然科学分析調査では、これらの時期のものと考えられている炭化材の年代に関する情報を得るために、放射性炭素年代測定を行う。

#### （1）試料

試料は、休場遺跡出土炭化材の1点である。

#### （2）分析方法

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定研究室の協力を得た。なお、年代値の算出には  $^{14}\text{C}$  の半減期として、LIBBY の半減期 5,570 年を使用した。

#### （3）結果

測定結果は、 $2460 \pm 60$  B. P (Gak-20094) であった。なお、この年代値は同位立効果の補正をした結果である。

#### （4）考察

今回得られた年代値は、これまでの資料からみて、縄文時代晩期にあたると考えられる（キーリ・武藤 1982）。これは、出土遺物等から想定されている、縄文時代早期～前期より数千年新しい値である。したがって、本試料は後世の新しい炭素（例えば植物の根やカビなど）によって汚染されたか、縄文時代早期～前後に亘る新しい炭化材の可能性がある。出土状況を改めて確認したい。

#### 引用文献

キーリ C.T.・武藤康弘 (1982) 4. 年代 縄文時代の年代、縄文文化の研究 第1巻 縄文人とその環境、p.246-275、雄山閣出版。

### 2 休場遺跡の火山灰分析について

#### はじめに

休場遺跡は、胆沢扇状地の開析段丘（中位段丘）上に立地する。今回の発掘調査により、縄文時代早期～前期の集落が出されている。また、該期の土坑の埋土上位には、テフラに由来すると考えられている軽石のブロック状堆積物が検出されている。今回自然科学分析調査では、このブロック状堆積物を対象に、テフラ分析および屈折率測定、重鉱物分析、火山ガラス比分析を行い、テフラの特徴を捉える。

#### （1）試料

試料は、「YB-98 3号陥れ穴 2 休場遺跡火山灰」とされる、褐色砂混じりシルトである。

#### （2）分析方法

##### a・テフラ分析・屈折率測定

試料は、適量を蒸発皿にとり、水を加え、超音波洗浄装置により分散、上澄みを流し去る。この操作を繰

り返すことにより、泥分を除去する。得られた砂分を实体顕微鏡および偏光顕微鏡下で観察し、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石の形状を調べる。さらに、火山ガラスの屈折率の測定を行う。以上の観察および屈折率の測定結果から、テフラの同定を行う。なお、屈折率の測定は、古澤（1995）に示された温度変化型屈折率測定装置を用いて行う。

#### b・重鉱物分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分を、ポリタングステート（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを、「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は、「その他」とする。

#### c・火山ガラス比分析

重鉱物分析の処理により得られた軽鉱物分を偏光顕微鏡下にて観察、火山ガラスとそれ以外の碎屑物250粒計数し、碎屑物中における火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、便宜上軽鉱物に含め、その形態によりバルブ型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バルブ型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

### （3）結果

#### a・テフラ分析・屈折率測定

試料中には、中砂～粗砂径で発泡が良好～やや良好の白色の軽石が、中量含まれる。また、軽石の中には、繊維束状に発泡した軽石も認められる。さらに、中量の細砂～極細砂径の無色透明の火山ガラスが含まれる。火山ガラスの形態は、スポンジ状に発泡した軽石型火山ガラスおよび気泡の長く伸びたものが集まった繊維束型が比較的多く、薄手平板状のいわゆるバルブ型も認められる。火山ガラスの屈折率は、平均値1.5118、最小値1.5097、最大値1.5142であった。

#### b・重鉱物分析

結果を表1・図1に示す。試料中の重鉱物は、斜方輝石が最も多く次に單斜輝石、不透明鉱物を含む。

#### c・火山ガラス比分析

結果を表1・図1に示す。試料中には、軽石型火山ガラスが比較的多くバルブ型火山ガラスが微量含まれる。

### （4）考察

今回の分析結果と、町田ほか（1984）Hayakawa, Y. (1985)、Arai et al. (1986)、町田・新井（1992）等の記載および検出層準から、本試料中の軽石や火山ガラスは約5500年前に十和田カルデラより噴出した

表1 重鉱物・火山ガラス比分析結果

試 料 名	カ ン ラン 石	斜 方 輝 石	單 斜 輝 石	角 閃 石	不 透 明 鉱 物	そ の 他	合 計		バ ブル 型 火 山 ガ ラ ス	中 間 型 火 山 ガ ラ ス	軽 石 型 火 山 ガ ラ ス	そ の 他	合 計
							250	250					
YR-98-1号上部2 体験地跡火山灰	2	135	57	2	35	19	250	250	15	1	110	124	250

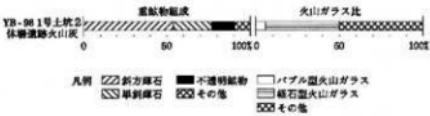


図1 重鉱物組成および火山ガラス比

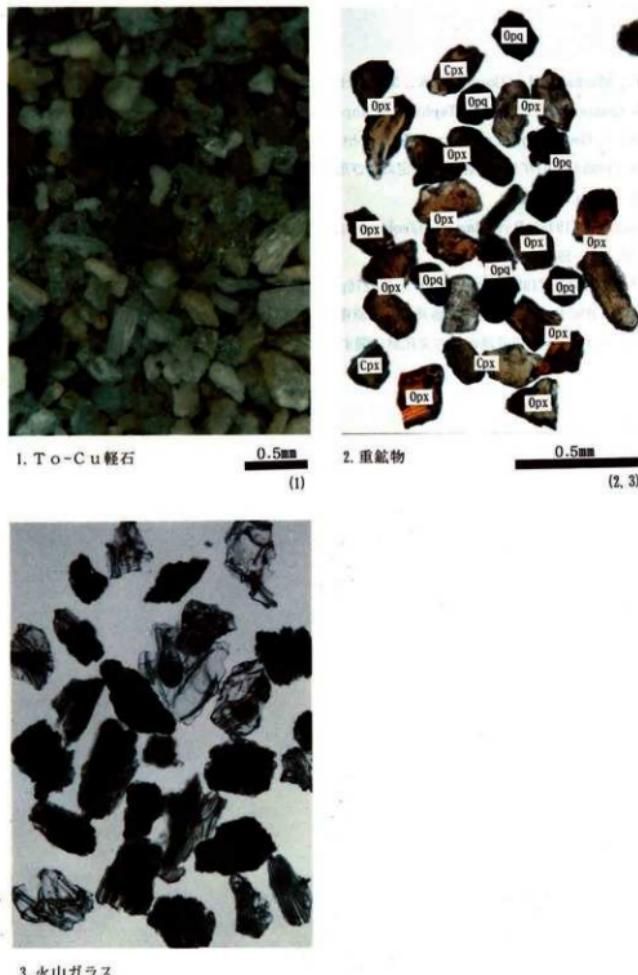
分析鑑定の表グラフ

To-Cuに由来すると考えられる。このことは、本試料が縄文時代早期～前期の土坑埋土上位から検出されていることと整合する。

#### 引用文献

- Arai, F., Machida, H., Okumura, K., Miyauchi, T., Soda, T., and Yamagata, K. (1986) Catalog for Late Quaternary Marker--Tephras in Japan II -Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido -, Geographical of Tokyo Metropolitan University, 21, p. 223-250.
- 古澤 明 (1995) 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な分析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, p. 123-133.
- Hayakawa, Y. (1995) Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bull. Earthq. Res. Inst., Univ. Tokyo, 60, 507-592.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 276p., 東京大学出版会.
- 町田 洋・新井房夫・小畠静夫・達藤邦彦・杉原重雄 (1984) テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカタログ－. 渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p. 865-928.

図版1 軽石・重鉱物・火山ガラス

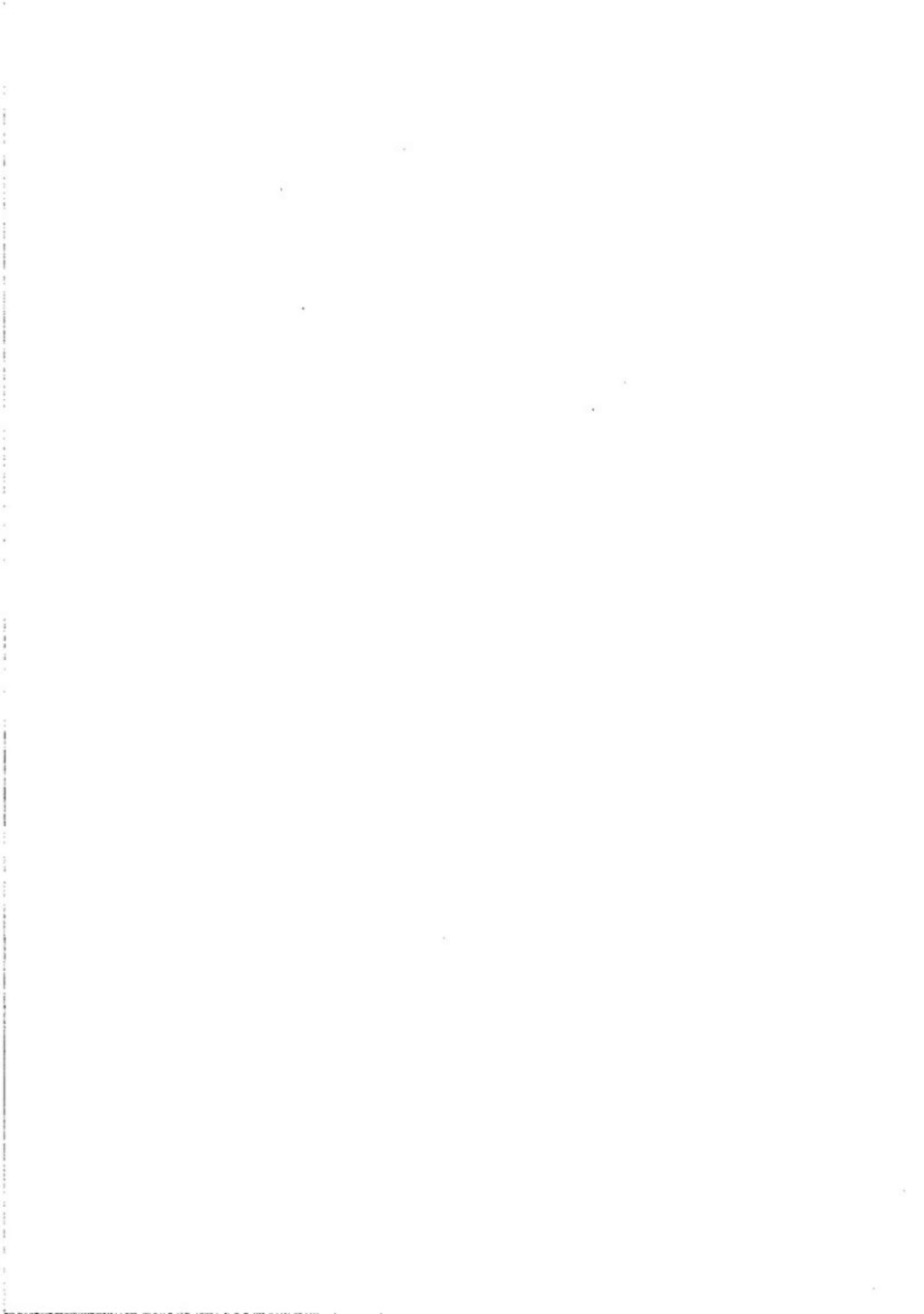


3. 火山ガラス

Opx:斜方輝石, Cpx:单斜輝石, Opq:不透明鉱物.

分析・鑑定・結果 写真

# 写 真 図 版





調査区遠景 南から



調査区遠景 南東から

カラー写真図版 1 調査区遠景

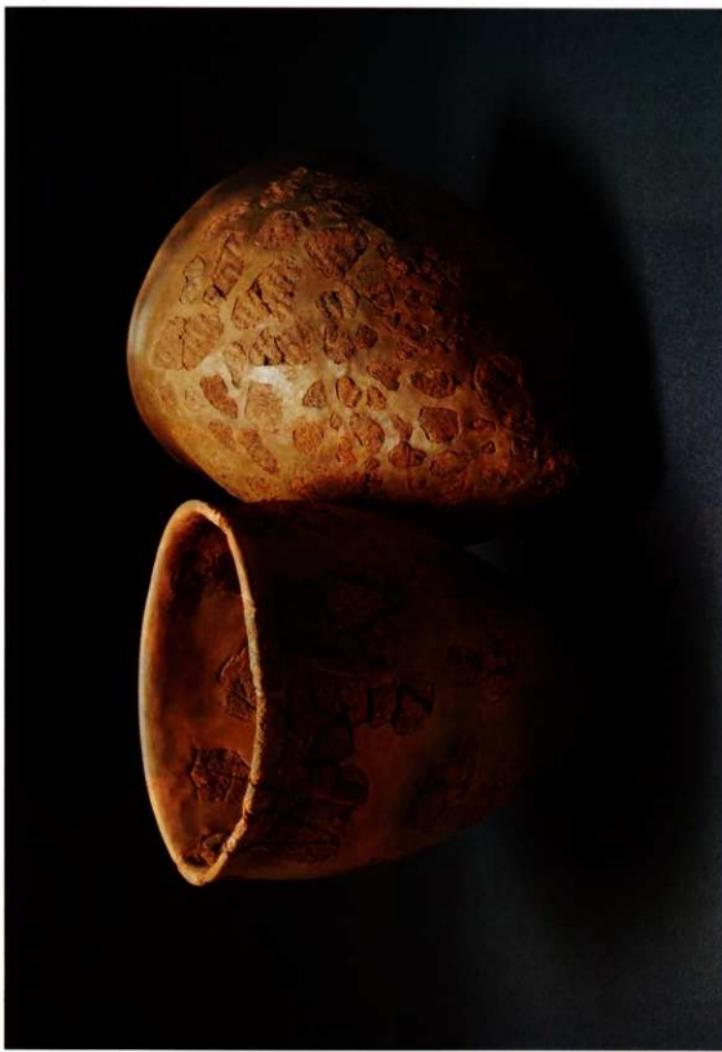


3号竪穴住居跡



3号住居跡 尖底土器出土状況

カラー写真図版2 3号竪穴住居跡・尖底土器出土状況



カラー写真図版3 3号整穴住居跡出土土器



調査後全景 南東から



基本土層



調査前 近景 北から



調査前 近景 北西から

写真図版 1 調査区遠景・基本土層



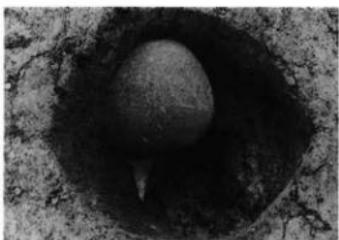
1号竪穴住居跡 平面



1号竪穴住居跡 断面

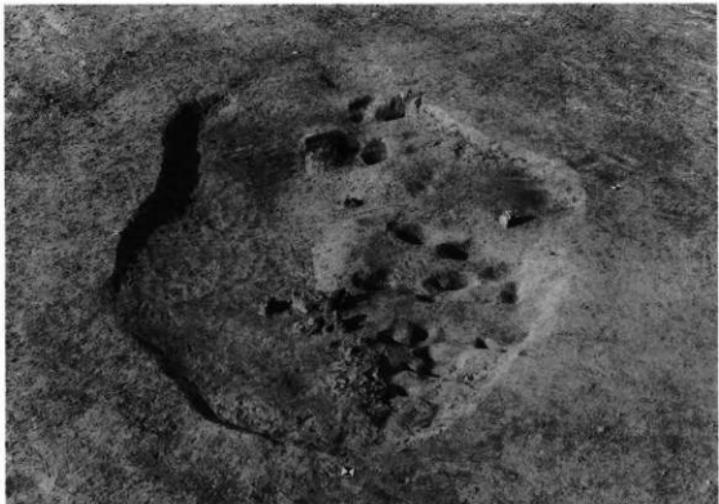


1号竪穴住居跡 P2 断面



1号竪穴住居跡 P1 平面

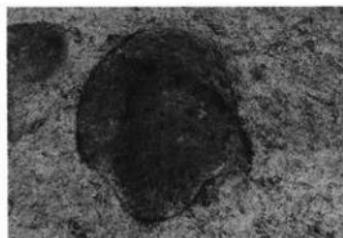
写真図版2 1号竪穴住居跡



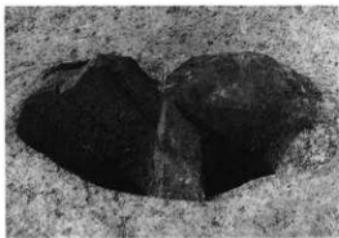
2号竖穴住居跡 平面



2号竖穴住居跡 断面



2号竖穴住居跡 炉 平面



2号竖穴住居跡 炉 断面

写真図版 3 2号竖穴住居跡



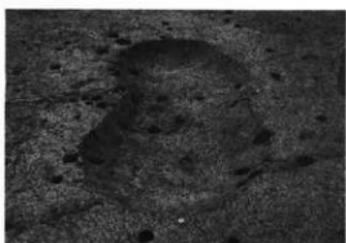
3号整穴住居跡 平面



3号整穴住居跡 断面

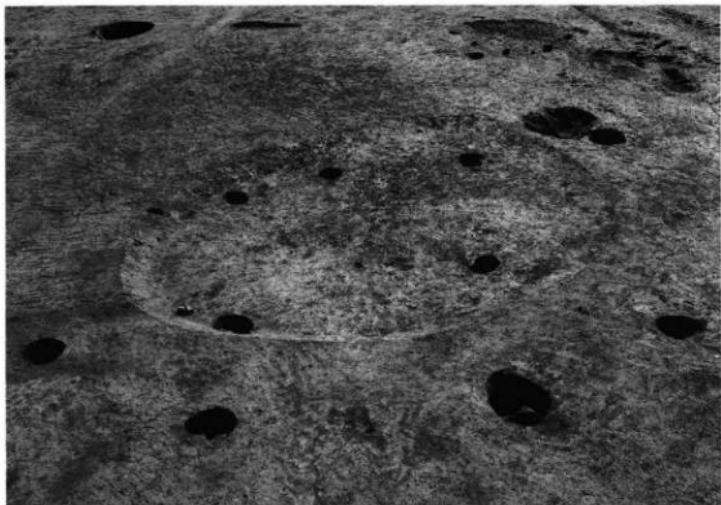


3号整穴住居跡 遺物検出状況

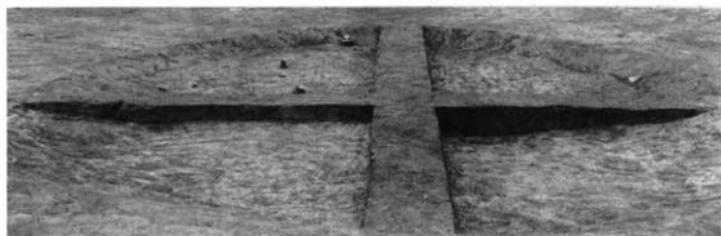


3号整穴住居跡 完掘

写真図版 4 3号整穴住居跡



4号整穴住居跡 平面



4号整穴住居跡 断面



4号整穴住居跡 柱穴 断面

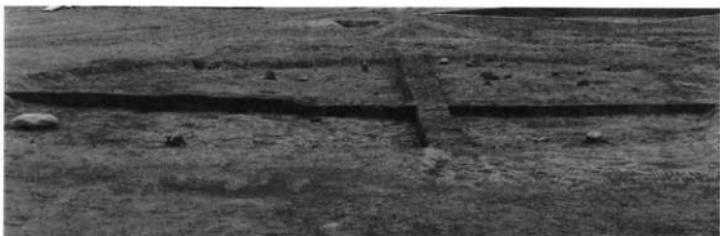


4号整穴住居跡 柱穴 断面

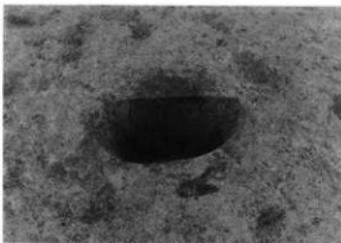
写真図版 5 4号整穴住居跡



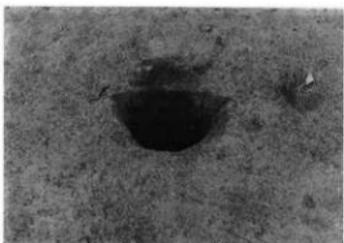
5号整穴住居跡 平面



5号整穴住居跡 断面



5号整穴住居跡 柱穴 断面



5号整穴住居跡 柱穴 断面

写真図版 6 5号整穴住居跡



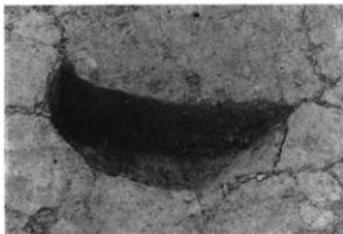
6号竖穴住居跡 平面



6号竖穴住居跡 断面



6号竖穴住居跡 遺物検出状況



6号竖穴住居跡 柱穴 断面

写真図版7 6号竖穴住居跡



7号竖穴住居跡 平面



7号竖穴住居跡 断面

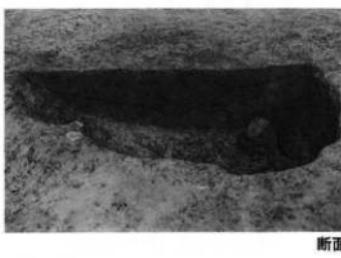
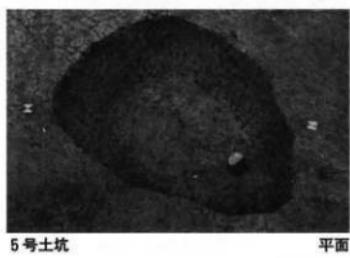
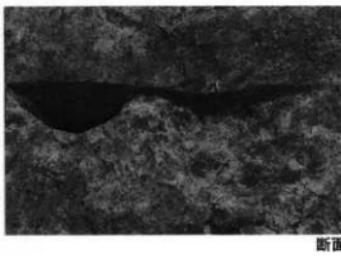
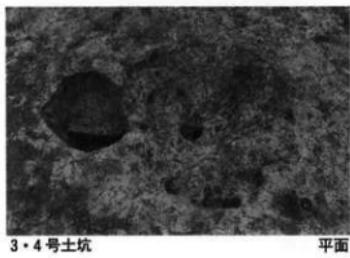
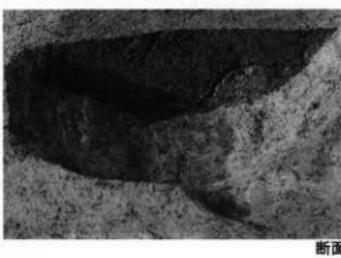
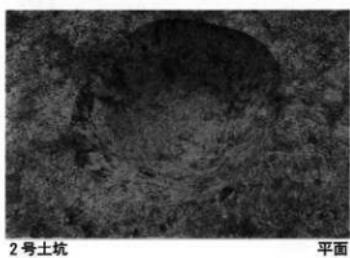
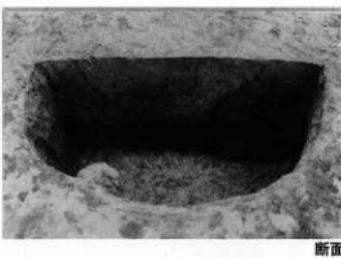
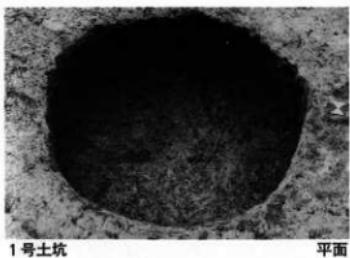


7号竖穴住居跡 遺物検出状況

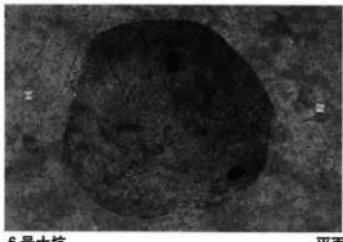


7号竖穴住居跡 断面

写真図版 8 7号竖穴住居跡



写真図版 9 1~5号土坑

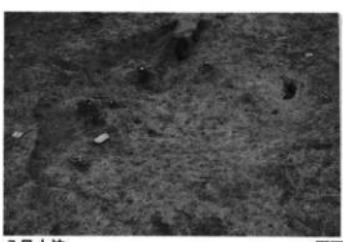


6号土坑

平面

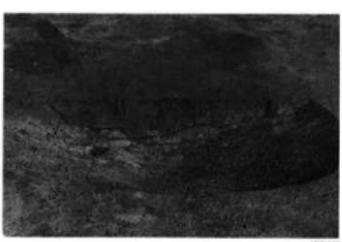


断面

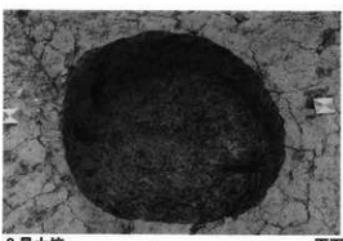


7号土坑

平面

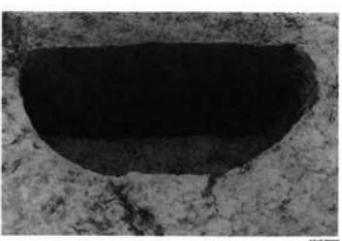


断面



8号土坑

平面



断面



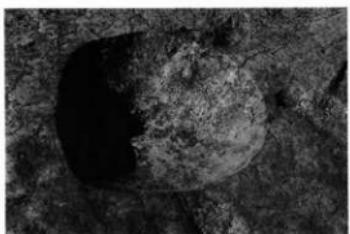
9号土坑

平面



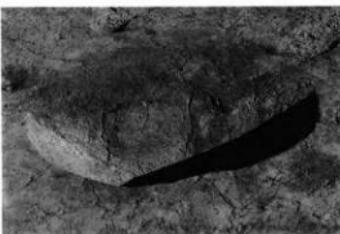
断面

写真図版10 6~9号土坑

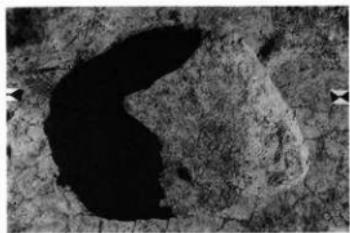


10号土坑

平面

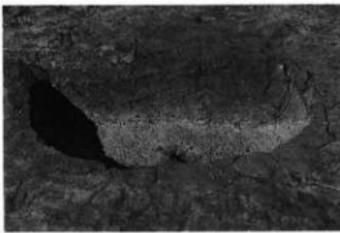


断面



11号土坑

平面



断面

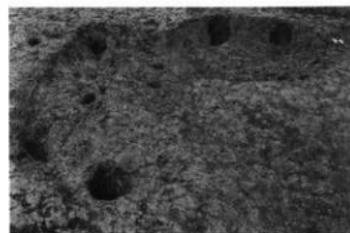


12号土坑

平面



断面



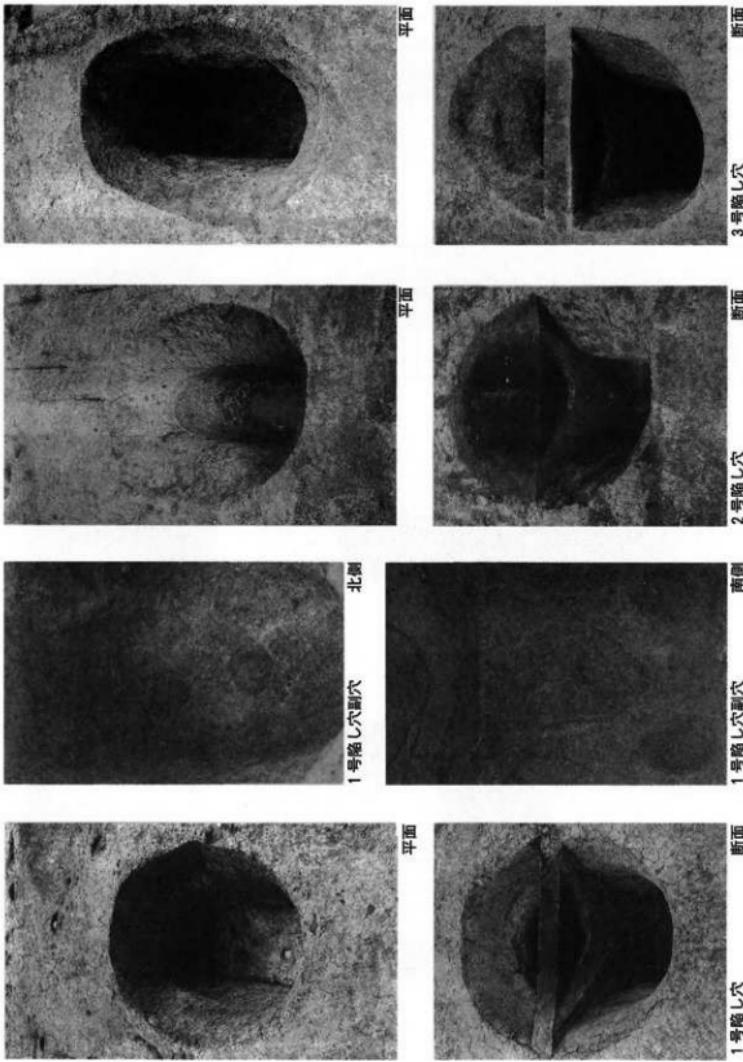
13・14号土坑

平面

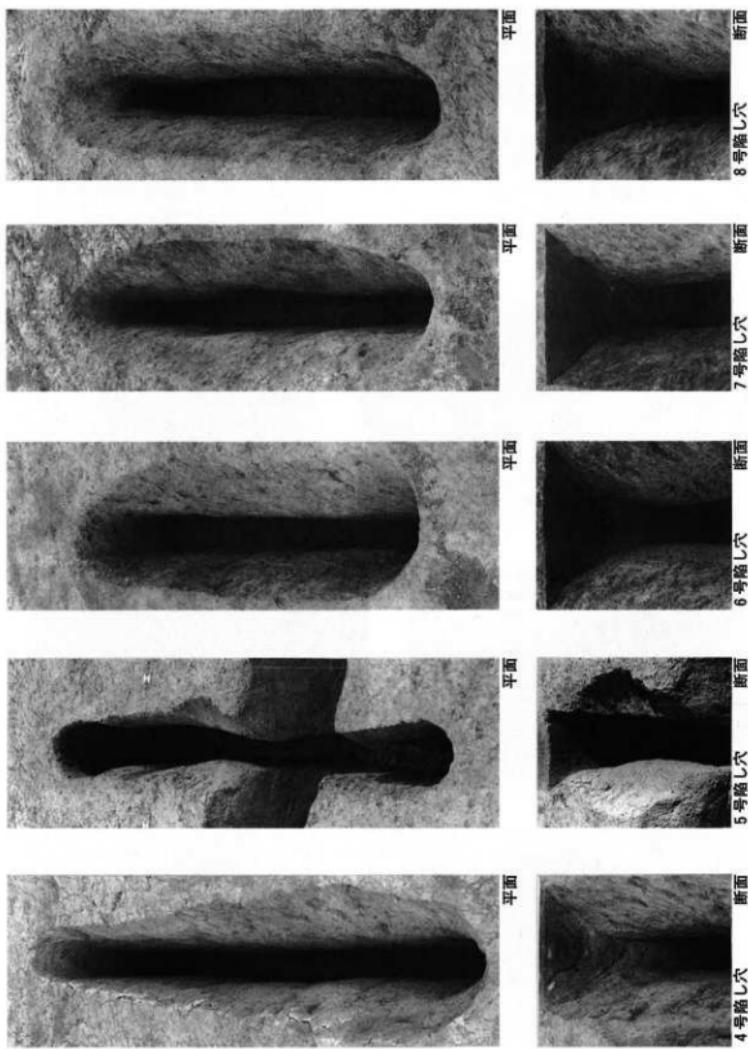


断面

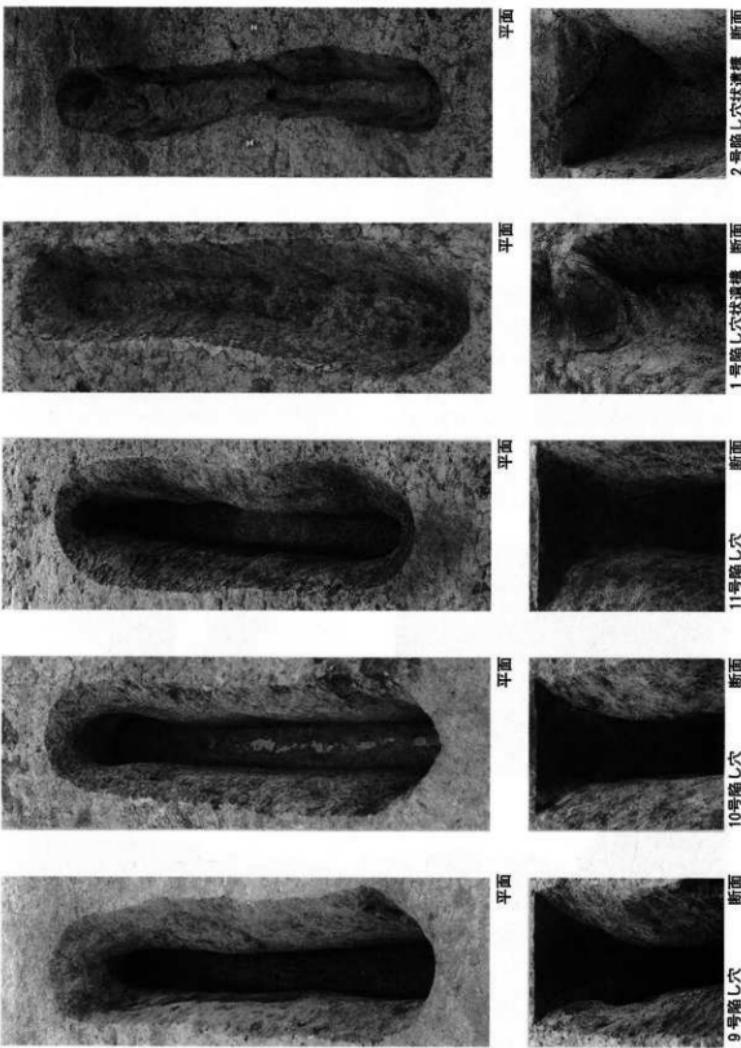
写真図版11 10~14号土坑



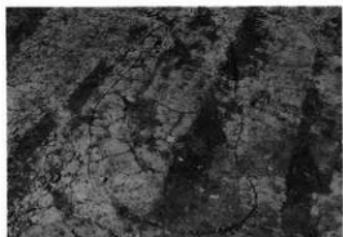
写真図版12 1~3号陥し穴・1号陥し穴副穴検出状況



写真図版13 4~8号陥し穴

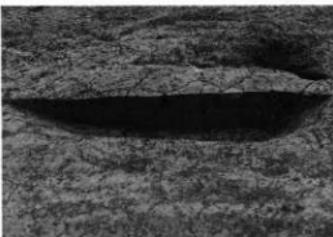


写真図版14 9~11号陷し穴・1・2号陷し穴状遺構

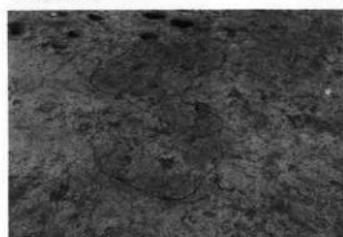


1号焼土造構

平面



断面

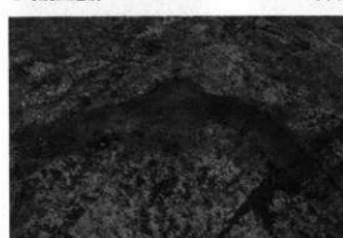


2号焼土造構

平面



断面



3号焼土造構

平面



断面



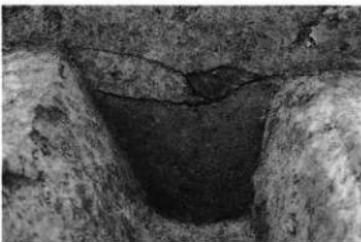
作業風景

写真図版15 1~3号焼土造構・作業風景



溝跡

平面

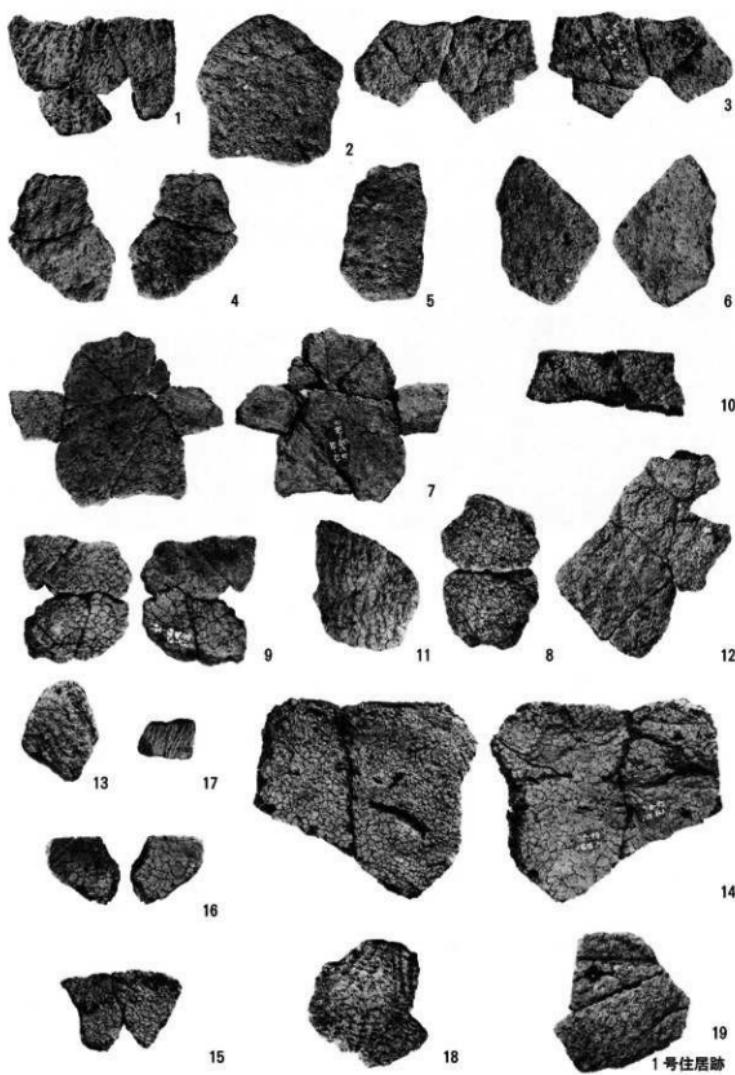


断面

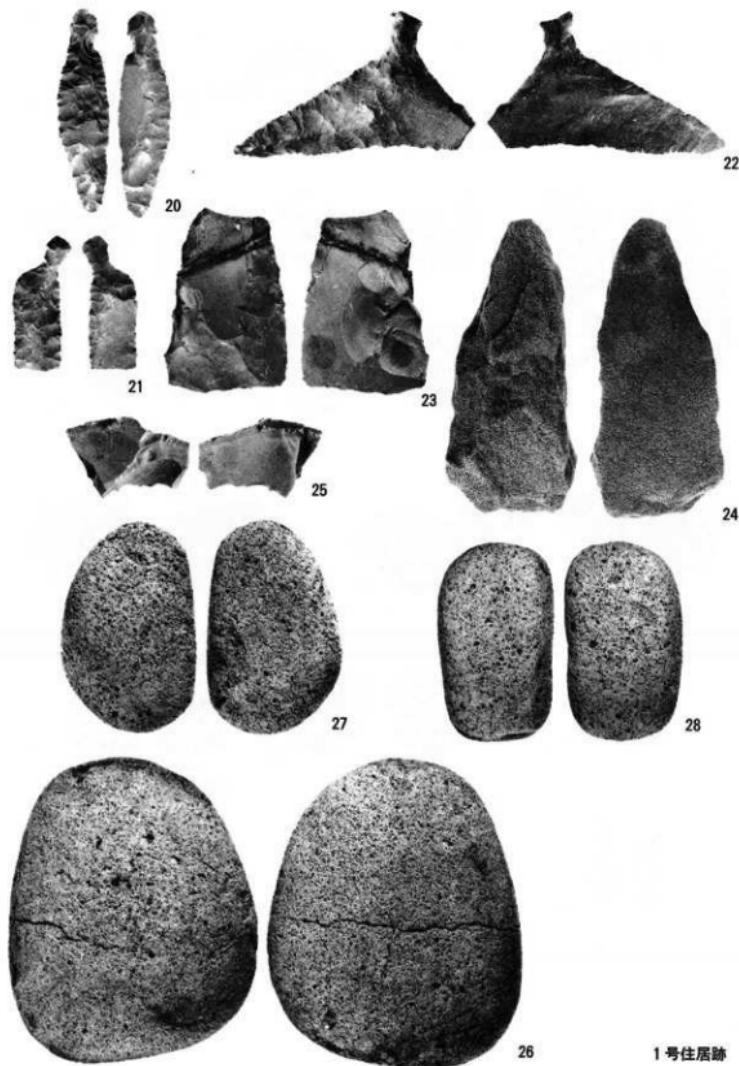


断面

写真図版16 溝跡



写真図版17 造構内出土遺物①



写真図版18 造構内出土遺物②



2号住居跡

写真図版19 造構内出土遺物③



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



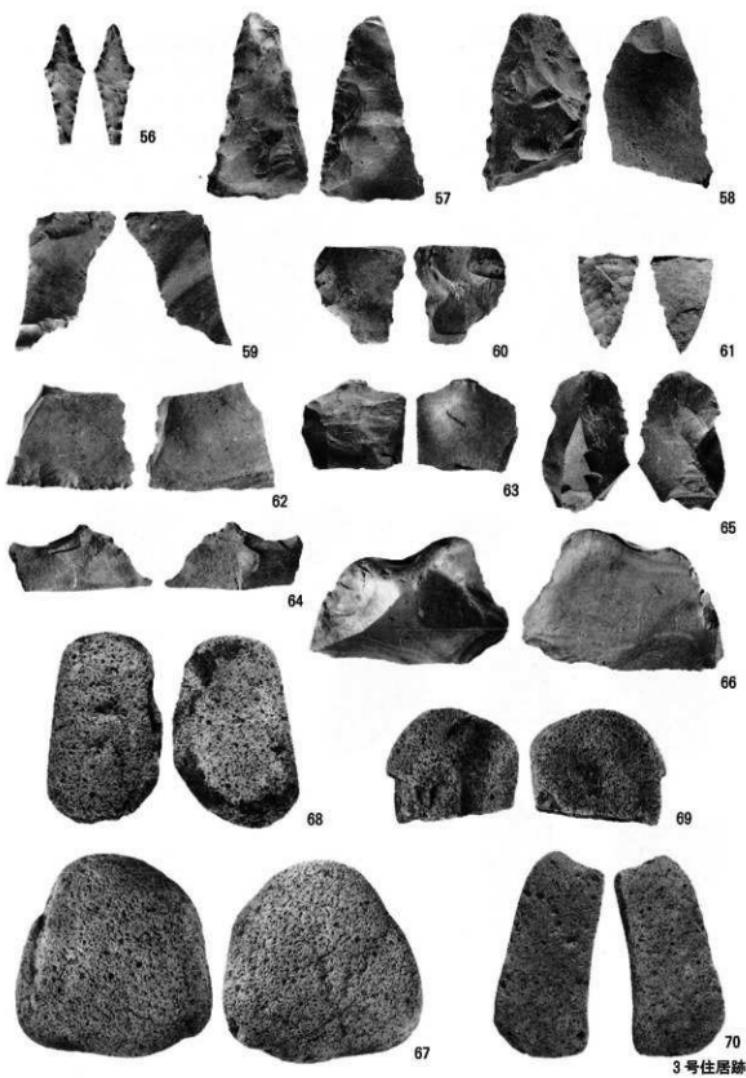
54



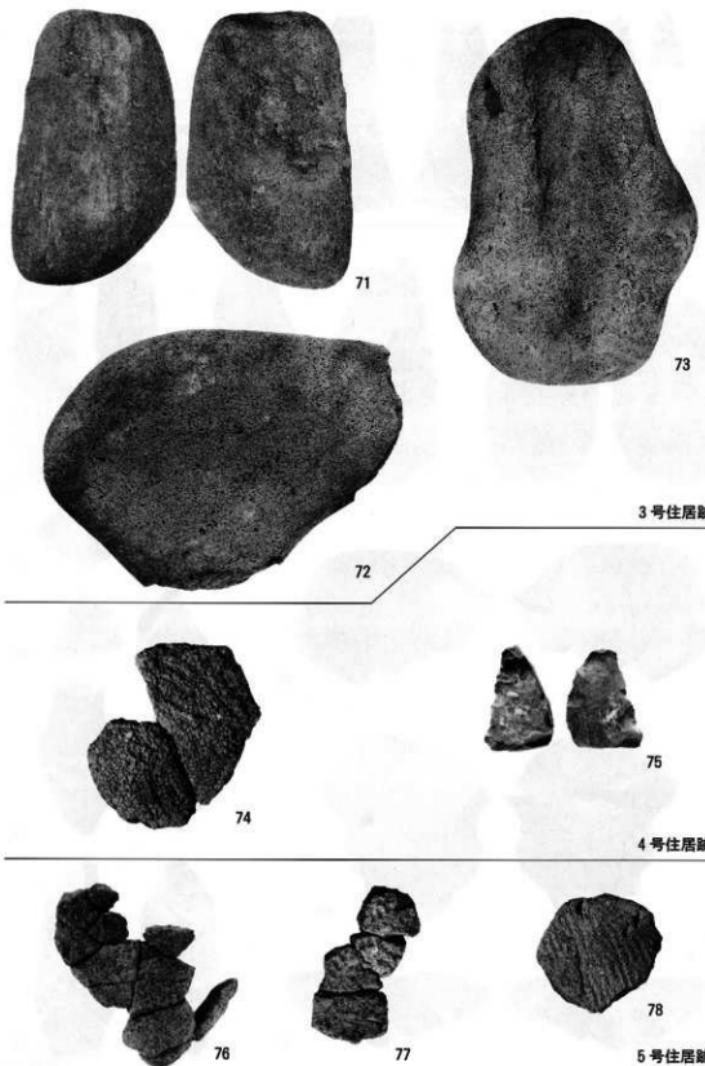
55

3号住居跡

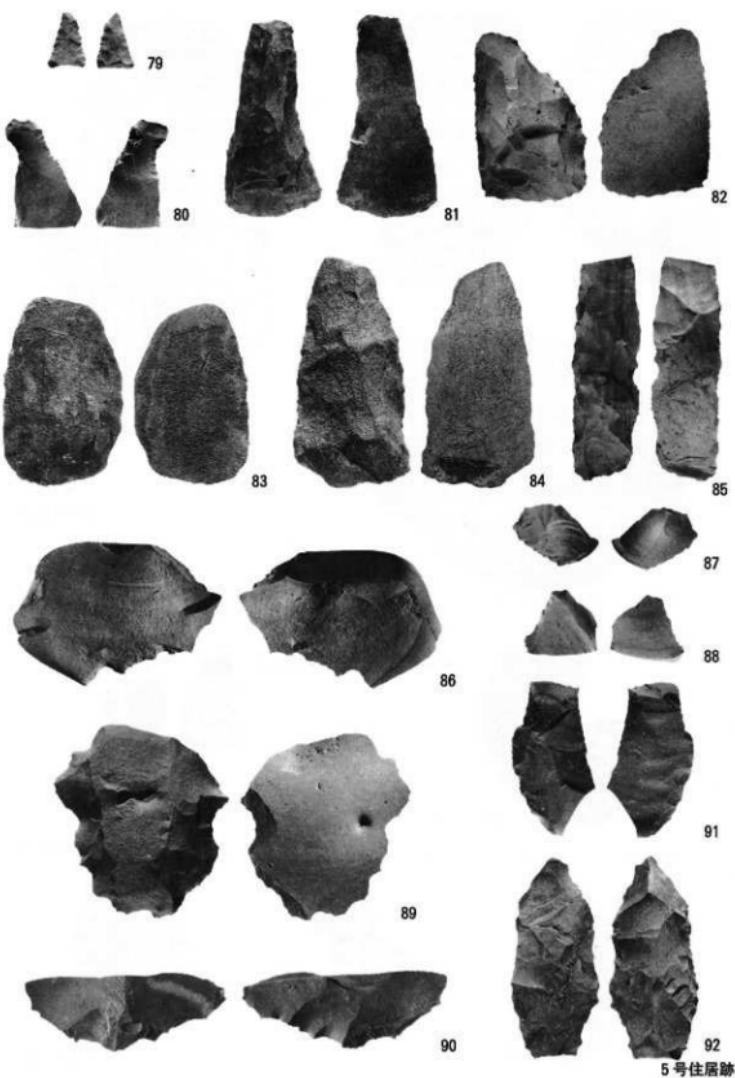
写真図版20 遺構内出土遺物④



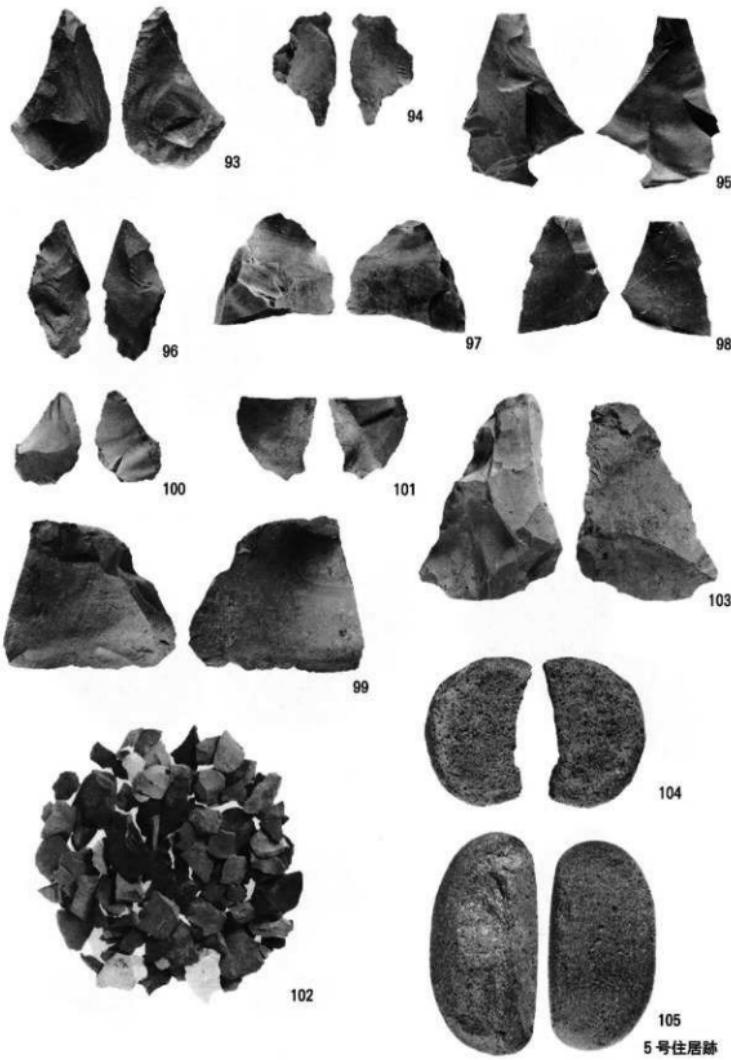
写真図版21 遺構内出土遺物⑤



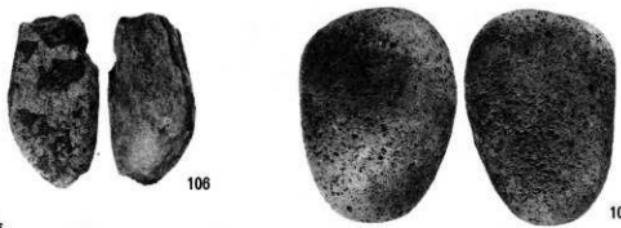
写真図版22 遺構内出土遺物⑥



写真図版23 造構内出土遺物⑦



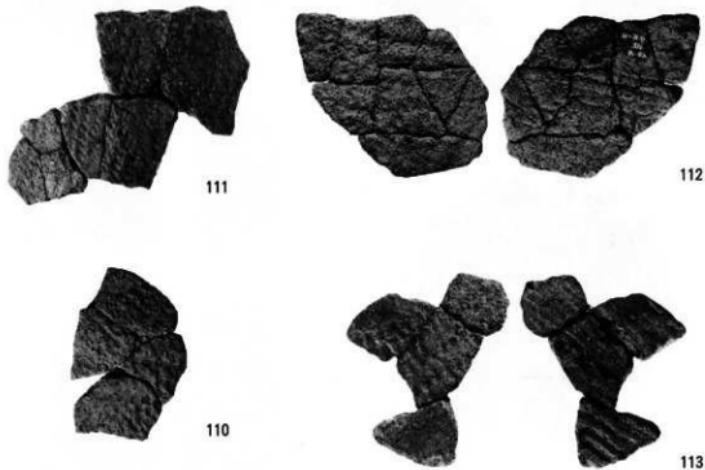
写真図版24 造構内出土遺物⑧



5号住居跡



6号住居跡



7号住居跡

写真図版25 造構内出土遺物⑨



写真図版26 遺構内出土遺物⑩



134



136



135



137

1号陥し穴

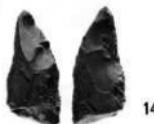
2号陥し穴



138



139



141



140



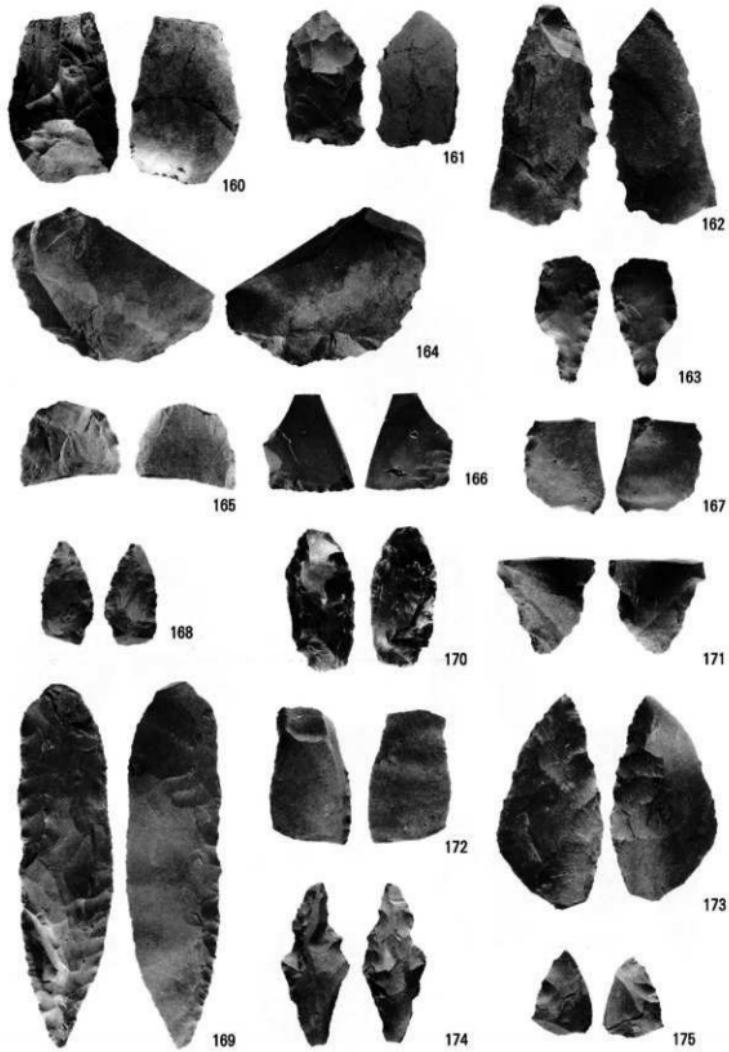
142

3号陥し穴

写真図版27 造構内出土遺物①



写真図版28 遺構外出土遺物①



写真図版29 遺構外出土遺物②



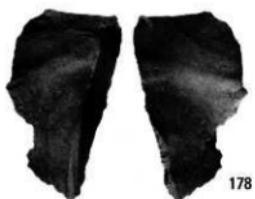
176



177



179



178

写真図版30 造構外出土遺物③

報告書抄録

ふりがな	やすみばいせきはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	休場遺跡発掘調査報告書						
副書名	担い手育成基盤整備事業徳岡地区関連遺跡発掘調査						
巻次	-						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第331集						
編著者名	中村直美 平めぐみ 高橋與右衛門						
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001						
発行年月日	西暦 2000年2月28日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 住 所	コード 市町村	北緯	東經	調査面積	調査期間	調査原因
やすみばいせき 休場遺跡	いわてけんいわねぐん 岩手県胆沢郡 いさわちょうやまやあざ 胆沢町小山字 そとうら ほか 外浦70他	03383 NE45-1144	39度 04分 05秒	141度 04分 39秒	19980901～ 19981106	3,200m <sup>2</sup>	埋場整備 事業に伴う 事前調査
所収遺構名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
休場遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡 土坑 陥し穴 陥し穴状遺構 焼土遺構 溝 柱穴状小ピット	7棟 14基 11基 2基 3基 1条 10基	繩文土器 石器 土製品	1.5箱 573点 1点	

財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	佐藤直基	嘱託	島恵子
副所長	伊藤直司		
(管理課)			
管理課長	川浪徳志	"	ヨリ重
主任	立花加志	"	ト光
主事	日影睦夫	"	新佐々木
(調査第一課)			
課長	小野田哲清	門紀介	身澄幸一
課長補佐	佐木井宗	橋右衛門	松原稔子
主任文化財監査員	小佐酒井内田	高橋義典	太郎
"	中田田原居田	古阿部真義	二郎
文化財監査員	吉田笠原居田	松山小工	昭彦
"	篠原居田	前田金工	忠
"	佐佐木内田	金岩早佐	里
"	安木戸野	佐野晴星	義
"	木小阿木千羽	佐佐木杉	浩
"	佐木高高佐	北山金鈴	忠
"	佐半高佐	平山平	昭
"	朝菊村	布山熊吉	里
"	木本中丸	吉北吉	義
"	佐木中丸	田川田	佳里
"	佐平藤江	谷田川	佳里
"	原藤江	谷口	昭
"	原林原	木澤谷口	浩
監査員	小	子木澤谷口	忠
監査員	小	田川	昭
(調査第二課)			
課長	高橋哲	門紀介	身澄幸一
課長補佐	佐木井内田	橋右衛門	松原稔子
主任文化財監査員	高橋義典	高橋義典	太郎
"	佐野晴星	古阿部真義	二郎
"	佐佐木杉	松山小工	昭彦
"	北山金鈴	前田金工	忠
"	平山熊吉	金岩早佐	里
"	吉北吉	佐野晴星	義
"	田川	佐佐木杉	浩
"	谷口	北山金鈴	忠
"	谷田川	平山熊吉	里
"	田川	吉北吉	佳里
監査員	小	田川	昭
監査員	小	谷田川	忠

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第331集

## 休場遺跡発掘調査報告書

扱い手育成基盤整備事業地閑連遺跡発掘調査

印刷 平成12年2月20日

発行 平成12年2月28日

発行 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 盛岡市下飯岡11-185

電話 (019)638-9001・9002

FAX (019)638-8563

印刷 株式会社 五六堂印刷

〒020-0021 盛岡市中央通3-16-15

電話 (019)654-5610

FAX (019)651-2167

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000

